春は山の上から

氣溫というものは、山が高くなるほど低くなるものと、相場がきまっている。海拔一〇〇メートルのぼるごとに、氣溫は約〇・五五度低下するのである。この法則に反して、低いところが低溫に、高いところがかえって高溫になる現象が、「氣溫の逆轉」である。風がしずかで、空氣の攪乱がすくないとき、冷たい空氣が、その重さのために低みに流れあつまって、この現象をおこす。ちょうど、大興安嶺は、風のひじょうにすくない地方である。とくに、その西側の地方を支配する、ほとんど無風狀態の冬には、氣溫の逆轉のいちじるしいことが、以前から知られていた。しかし、われわれの経驗によって、春から夏にかけてもまた、この現象のかなりおおいことがたしかめられた。

この数日、春は山の上から、いや、すくなくとも山腹からさきに、おとずれてきた。谷そこでおくった、支隊の第一夜も第二夜も、まだ冬のようにさむざむとした茶褐色の世界だった。ところが、山腹では、うっとりとさせるようなカラマツの新緑がもえだし、ムラサキツツジのむせるような花ざかりをかきわけて、われわれは前進したのである。植物季節から判斷するかぎり、すくなくとも数日は、谷間のほうに、春のおとずれがおそいようであった。谷では、このつぎの日、すなわち六月四日に、灌木原にまじったサカイツツジが、ようやく紫紅色のつぼみをちらほらとほころばせ、水べにはリュウキンクッの黄いろい花だけが、春をつげていた。まぎれもなく、これは、氣溫の逆轉のしわざだった。

大興安嶺の秋を旅したブレチュケも、やはりおなじような現象をかきのこしている。山腹のシラカンバがまだ

青々としているとき、谷そこのシラカンバはすでに黄ばみ、山腹のそれが黄ばむころには、谷には、はだかの林がひろがっていたのである。[1] 氣溫の逆轉は、また大興安嶺周辺の農業にたいしても、重要な役わりを演じている。たとえば、三河のロシア人の畑地は、ひろい沖積原をさけて、丘の斜面にえらばれる。われわれは、ドラガチェンカでもボクロフカでも、こうした畑をみた。

われわれの隊は、携帯用の微氣象観測用具をもちいて、毎日五回の観測をつづけた。とくに氣溫は、地表五センチ、一メートル、三メートルの高さで、小型のアスマン通風乾濕計による測定をくりかえした。その結果からは、地表ちかくでの小規模な氣溫の逆轉が、たびたびみいだされた。夕ぐれの焚火の煙が、人の脊たけくらいの高さで、横にたなびくこともあったが、これも、氣溫の逆轉をしめしている。冷たい空氣とあたたかい空氣との境の不連続面にそうて、煙は横にひろがってゆくのである。また、本隊は、六月中旬以後のビストラヤの谷で、七月になってからはアルバジハの谷で、夕ぐれになると、谷間にだけ霧の発生するのを、しばしば経驗した。このような、森のないひろい谷では、晴れた日の夜には、輻射による熱の放散がとくにいちじるしいのである。この霧は、一晩ぢゅうたれこめるが、朝の光が谷にさしこんでくると、たちまち消えさってしまう。

われわれが、さいごの霜を、そして氷点下の氣溫を記録したのは、六月二一日の基地入りの日であった。

〔註〕

① Plaetschke (1937) op. cit. S. 54.

消えうせた分水嶺

あくる朝、フォーミンが眼の色をかえてなにごとかをうったえた。いってみると、野地坊主のなかに黒馬が一頭はまりこんで、死んだように横たわっていた。われわれは、おもわず腹のそこからひやりとした。ゆうべは、例のように前足をしばったまま放牧したのだが、野地坊主の草をくいにきて、はまりこんで倒れたまま起きあがれなかったのだ。全員総出で苦心のすえ、ようやく引きおこしたが、片眼をひどく傷つけて弱っていた。とりあえず、消毒と繃帯をしてやり、荷をほとんどほかの二頭にうつして、ひき馬をすることにした。前途は多難である。

キャンプのすこし下流では、ユルタのあとが、この流域にふみこんではじめてみいだされた。ふしぎなことにそこから下流にも一向に道はなく、ただけもの道らしいものが断続するだけであった。かと思うと、やがて右手の山腹から、きのうのようなよくふまれた道が、ひょっこりとあらわれた。オロチョンの道は、どうやら神出鬼没で、まったく予想をゆるさない。ひるまえになると、分水嶺をなす右がわの丘は、ますます河からとおのいてしまって、小道は谷の灌木濕原を横断すると、河辺林へと移った。サミドリ川はこのあたりになると、そうとうの河辺林をともなってきている。ここから上流にかけては、それは、黒々と單調なカラマツ一色の林であるが、ちょうどわれわれが晝食をとったところから、はじめてシラカンバがそれにまじってくるようになった。ケショウヤナギやそのほかのヤナギ類も、しだいにくわわってきて、さらに四キロも下流になると、こういった廣葉樹の大木も、カラマツのなかに三割ばかり混ってきた。

やがて右岸には、からりとした展望がひらけた。これはどうだ。そこにはみわたすかぎりの平坦地がはるかにつらなり、森林さえないそのはてには、航空写眞によればあきらかにゲン河流域に属する山々が、すがたをあらわしているではないか。大興安嶺の主嶺は、とうとうすっかり消えうせてしまった。四キロ四方にもおよぶであ

ろうこの開潤地は、ほとんど氣づかれぬくらいの微傾斜で、分水点にまで達していた。しかし、ゲン河の谷はかなり深そうだ。その浸蝕がさらにすすみ、サミドリ川の水がゲン河におちる時代も、そう遠いことではあるまい。ここは一めん灌木原におおわれた野地坊主の濕地であって、濕地は、この微傾斜地をはいあがって、分水嶺そのものにまで達しているのだった。そのなかには、いためつけられたすがたのひくいカラマツの木が、点々と孤立しているにすぎなかった。

この大濕地のほとりで、道はあとかたもなくきえうせてしまった。このようにひろい、しかも歩きにくい濕地の横断には、はじめてぶつかった。早春とちがって、凍土層はかなり深くとけはじめていたから、野地坊主の株をふみわたって横断するのは、ひとかたならぬゆううつであった。ときおりまたぎこえる小川は、溝のようにおちこみ、迷路のようにまがりくねって濕地のなかを流れている。駄馬にとって、それはもっともありがたくないしろものだった。興安嶺では、大きな河よりもかえってこういった小川が、はるかに駄馬をなやますのだ。つまずいたが最後、駄馬は横たおしにはまりこみ、もがけばもがくほど傷つく。荷物はずぶぬれになってしまう。けっきょく、荷をおろし、馬をおこして荷をつけなおすのに、一時間くらいはすぐたってしまうのである。だが、溝のような小川をのぞけば、野地坊主の旅そのものは、すでに駄馬たちのほうが、人間よりも上手になっていたようである。かれらは、たくみに野地坊主の頭をふんでわたるのになれてしまった。ところが、われわれはといえば、いまだにガタクリガタクリと、濕地のなかをゆきなやんでいるのだ。

さんざん油をしぼられたあげく、ようやく山すその林縁にたどりついたときには、もうすでにたそがれが近づいていた。ありがたくないことに水が手ぢかになかった。つかれたからだでユルタがたてられているあいだに、フォーミンは、例の不愉快な濕地のなかを、数百メートルもはなれた流れまで、水をくみにいってくれた。天候

はくずれはじめた。暮れかけるころ雨がふりだした。あすは滞在だ。水がとおいのは不愉快だが、ここはサミドリ川が大ビストラヤに合流するすぐ手前であり、われわれにとっては、予定しただけの旅をなしとげることのできた氣易さがあった。

雨は、一晩ぢゅうふりしきった。あくる六月六日も、滞在日にふさわしく、雨にくれた。だが、このユルタ式テントは、絶対に優秀だった。すこしも雨もりがしない。朝寝をして、取りこんでおいた枯れ枝でテントのなかで焚き火をなつかしむのは、こんなにじめじめと寒い日には、まったくふさわしい。梅棹は、綿密な地図の作製に余念がない。藤田は天測の計算にいそがしい。こうしてこのふたりは、毎夜おそくまでしごとの分担をはたしつづけてきた。土倉は、われわれの隊になくてはならぬ、力しごとの専門家である。積み荷をはじめ、馬のとりあつかい一切について、かれは、すぐにエキスパートとなってしまった。それは、フォーミンひとりの手にはおえぬ仕事だったし、ほかのメンバーには、この荒しごとに耐えられる体力はなかったからである。たまった観察記録の整理や雑用が、ひととおりおわると、歓談と食事、そして読書。

夕ぐれごろ、雨はあがった。

ビストラヤの源流へ

一

ビストラヤの谷は、そのひろがりの大きさからおして、ナーラチ①（サミドリ川のトナカイ・オロチョン名）にもまさる大湿原を、えんえんとくりひろげているだろう。これにおそれをなしたわれわれは、流れからはるかにとおざかった、左岸の林縁をつたって北上することにした。ささやかな尾根をひとつこえると、もうビストラヤ本流

の谷である。快晴の七日の朝であった。

林縁にゆきついてみると、はたして茫漠とした大濕原が展開していた（図33）。よく茂った河辺林によって、ひと目でそれとわかる本流は、はるかに左にとおざかり、そこから右手のほうにむかってきわめてゆるやかな傾きをもって高まってくる濕地の斜面は、そのゆるやかさをかえぬままに、カラマツの大森林へと移行する。それゆえ、われわれの道をもとめるべき林縁——濕地と森林とのつぎめというのは、まったく両者の勢力の消長がつりあいをたもつことによって、決定されているようにみえる。

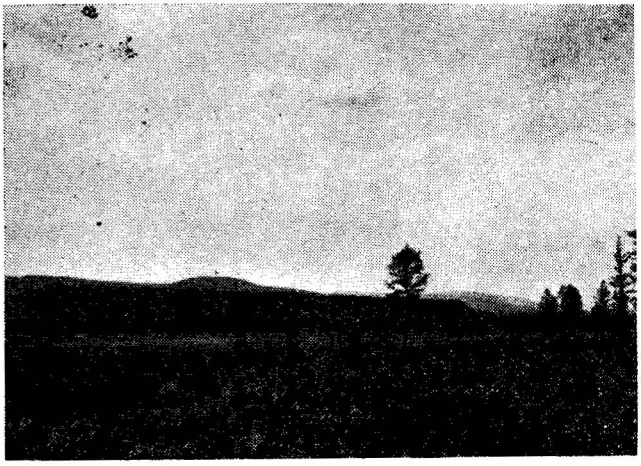

図 33. ビストラヤ本流とナーラチの合流点．前景はイェルニク．うしろにみごとな平坦面をもった丘がみえる．

本流の右岸には、まるで段丘のように、うつくしい平坦面を展開する、ひし餅型の丘が眼をひいた。しかし、なによりもわれわれの眼を磁石のようにひきつけてやまなかったのは、そのおくにどっしりとそびえた、ふたつの高峯であった。ひとつは、よりすっきりとした頂きをもち、頂上の直下には、白く光る二点の残雪があった。もうひとつ、左よりにややおくまった峯は、高いが、しかしおそろしくだだっぴろい頂きをもっている。かつて、英吉里山や春峠のうえに立って、北のほうにみとめた二つのめだった山は、まさしくこれであったにちがい

ない。双眼鏡でかわるがわる観察すると、どちらも森林限界をぬいているようだ。

われわれの心のおくは、あやしくときめきはじめた。高い山の魔力だ。ナプタルダイにのぼることをゆるされなかった川喜田の心のなかには、すでにある考えがつきまといはじめていた。なんとかしてこの処女峯をものにしようと、腹のなかで計画をねりながら、くりかえし穴のあくほど山をみつめては、ルートの研究におもいふけるのであった。もちろん、われわれが、いまこんな考えをおこすこと自体が、冒険であった。支隊のいまおかれている位置は、ナプタルダイのふもとをすぎたころの本隊にくらべて、いっそう危険なものであった。ぶじに白色地帯を突破して漠河隊とおちあうこと自体が、すべての関係者からきづかわれているときに、すくなくとも一日の滞在を必要とする道草が、ゆるされてよいだろうか。いまや、じぶんで判断をくださなければならない立場におかれた川喜田は、思案にくれた。もっとも、高いといっても、このあたりの波状山地の平均から、せいぜい四〇〇—五〇〇メートルばかりぬきでているにすぎない山に、こんなにくりかえし執着するのは、すこし奇妙な印象をあたえるかもしれない。しかしこれは、ただの山のぼり、ただのピーク・ハンティングとはすこしちがう。どこまでも、探検という行爲とむすびつき、探検の対象である特定の地域の特殊性とむすびついた山登りなのである。一般に、東シベリアのこうした老年期にちかい山地には、群をぬいた高峯はなくて、ところどころに、わずか森林限界をぬきんでた、はだかの山頂をもった峯——シベリアではゴレッツ（golets, golyets）という——の散在することが、ひとつの地理的な特徴となっている。ナプタルダイをみおくったあと、本隊のルートにそっては、もはやこういうゴレッツはみられないかもしれぬ。とすれば、一日をついやして、大がかりな紫陽道人をやり、あわせて分水嶺附近の地形や、森林限界以上の自然界をみておくことは、探検自体として、重要な成果をくわえることになるだろう。さいわい、いまのところ支隊は、着々として行進予定を実行してきている。川喜田

は、とうとうこの登山をやることにきめた。

まっすぐ南北に走るビストラヤ最上流の谷には、あたかも肋骨のように、東西から直角にそそぐ、たくさんの小支流がある。そして、灌木原におおわれた野地坊主の大湿地は、これらの支流の谷にそうても、まるで舌のように、はばひろく入りこんできていた。林縁をうまく利用してあるいていても、こういう支流の湿地だけは、横断しないわけにゆかない。そのたびに、駄馬は、例の難行をくりかえすのであった。

ひるすぎには、奇妙な小地形が、われわれの注意をひいた。それは、カラマツの疎林のひろがる、ほとんど平坦な丘ひだのうえに、まったくだしぬけにそばだった、ちいさな丘であった。長さは一五〇メートル、はば五〇メートルばかりの矩形で、側面の斜面は、一〇メートルの高さをもち、四五度の急なかたむきをなして、累々とした安山岩の岩屑におおわれていた。頂きにのぼってみると、そこには、切ったような平坦面が、三段にわたって形成されていた。高いほうの面は、やはり角礫におおわれ、不自然な小さい凹凸が波うっていて、ただ一めんのムラサキツツジの花ざかりであった。たれかが、「ツツジが丘」と名づけたこの小突起は、ゆるやかな地形の圧倒的な自然のなかにあって、あまりにも幾何学的であり、不自然であった。ちょうどそれは、車輪をはずした巨大な自動車のようにみえ、なにか人工的な築造物のような感じをいだかせた。藤田の考えでは、安山岩の岩脈の突出した部分である可能性がおおい。しかし、それにしても、こんなに美しい階段は、どうしてできたのだろうか。われわれのこしてきた、なぞのひとつである。のちになって、本隊もまた、ビストラヤの支流コンホと本流との合流点にちかい森林のなかで、人工にしては大がかりな、不規則な凹凸の地形をみた。規模はちいさく、幾何学的な構造ではなかったが、なにかを掘りあげたような穴のまわりに、掘りだした土をもりあげたような外観であった。しかも、そのうえには、樹齢すくなくとも一〇〇年ちかいカラマツが、一めんに生えていたの

である。

アムーンナリという、かなりおおきい支流をわたると、われわれは、しばらくなじんだ林縁をすてて、本流の河辺林へと、不愉快な濕地をよこぎった。アムーンナリには、小さいながらも、細い河辺林がつきまとい、流れは、かわいいふくざつな蛇行をつづけながら、はるかかなたの本流へとそそいでいた。すべてビストラヤの源流では、支流の河辺林は、カラマツばかりであって、本流においてさえ、九〇パーセントまではやはりカラマツから成っている。本隊のとおった中流地方の、豪華なドロやヤナギの河辺林にくらべて、一そう酷烈な自然條件をものがたるものであろう。しかし、あるいはそこには、乾いたあるきやすいヒースの下生えがつらなっているかもしれないし、永続的なオロチョン道があるかもしれない。あすの登山のために、より対岸にちかい、水の便利なよいキャンプ地をえることのほかに、ルートとしての本流の河辺林の價値を検討しておくためにも、ぜひ一度は、いやな濕地わたりをしんぼうしなければならなかったのだ。

はたして、たどりついた河辺林は、すくすくとのびた、樹の間隔のかなりひろいカラマツ林で、例の夢のようなハナゴケまじりのヒースの下生えをもった、キャンプに申しぶんのない乾燥地であった。登山のための滯在キャンプは、ゴーロイティチャクという、かなりの支流のそそぐ段丘のうえにたてられた。

〔註〕

① 支隊および本隊のルートにそった、ビストラヤ流域の地名は、とくにことわらないかぎり、すべて、トナカイ・オロチョン名である。これらは、基地またはニジネ・ウルギーチの川口で、オロチョンたちに水系図をしめしてききとった。かれらは、きわめて正確に、よく地図を理解する。

望み山

あくる朝、川喜田と土倉とは、あの残雪ののこった山をめざして、乗馬で出発した。われわれは、この山を、「望み山」とよびならわしていた。

河辺林と濕地との境にそうて、およそ四キロばかり北上すると、対岸から小さな支流がそそいでいる。望み山は、そのおくにあるものとおもわれた。倒木をのりこえて、はじめて本流の流れに達すると、そこは、じつにあつらえむきの渡渉点だった。本流を西にこえて、いくつもの分流の倒木になやまされ、うつくしい三日月沼をわたって、河辺林をぬけきると、めざす支流の谷が、やはりひろびろと濕地をくりひろげていた。左手には、きわめてあざやかな段状の台地があり、うちひらけた斜面をもっていたので、馬を駆って展望をもとめた。

こんな妙な山のぼりは、うまれてはじめての経験だ。のぼるべき山は、けさから一度もすがたをみせないばかりでなく、じつは、どこにあるかもわからないのだ。われわれのたずさえていった、一万分の一の航空写眞は、ごく谷にちかい部分だけにかぎられていて、谷から数キロはなれたところは、もはやどうなっているのかわからない。あとは、おもな河すじだけのはいった、二〇万分の一の水系図しかなかった。ちょうど、めくらの手さぐりのように、道をさがしてゆくほかはない。こういうところが、内地の山のぼりでは味わえないおもしろさであった。

われわれは、おおよその見当をつけて、この支流の谷を、つっきることにした。わずかに傾斜した濕地は、それでも、三—四キロの横断を必要とした。本流にちかいその下半分では、あいかわらずの野地坊主のうえに、ヒ

メカンバがしげっていたが、山手よりの上半部では、この野地坊主のうえに、しだいにミズゴケがおおって、ついには、ミズゴケと灌木との濕地とかわってしまった。ふしぎなことに、それでもなお野地坊主は、その下にでこぼこをつくって、とけきらない青氷が、ときおりくぼみの根もとからのぞいていた。

濕地をこえて、山すそにたどりついたところで、ふたりは、馬をすてて、ここまで送ってきたフォーミンに託してかえらせ、なおも西にむかって、森のなかにわけいった。つみかさなった巨礫の下では、地下水がゴトゴトと音をたてている。まもなく、ひとつの尾根をとらえて、登りにかかった。この尾根は、たぶん、展望のよい前山の頂きへとみちびき、それとともに、眼のまえにパッと望み山があらわれるだろうと予想された。われわれは、そこから、すでにお花畑とかわった尾根すじを、らくらくと頂上へとたどりつく場面を心にえがいて、登りつづけた。この尾根にも、英吉里山の下りに経験したような、数段の階段地形がある。そうとうな高さに達したとおもうころ、オロチョン道が一本、はすかいに尾根をよこぎった。かれらの交通路は、こんなおくまった山のうえにも、傍若無人な氣まぐれさをもって——すくなくともわれわれにはそうとしか思えない——発達しているのだ。かれらの生活領域が、河谷だけでなく、この山地の全面にわたって、面狀にひろがっていることは、いまや明らかであった。

森林の下にあらわれはじめたハイマツのしげみが、しだいにおびただしくなって、ついに前山の頂きに立った。附近には、まるで火山の噴火口のちかくを思わせるような、累々たる巨礫が、地上をおおっていた。そのうえには、いままでかつてみなかったほどみごとな地衣類が発達して、角礫のごつごつした凹凸をかきけすほどの厚みに達した斜面もあった。地衣原のうえには、シカの類の足あとものこっていた。しかし、このような岩礫のはげ地をのぞけは、一めんに大地を占領するものはハイマツであって、立ち枯れにちかいカラマツが、まばらに

ポツポツと孤立しているのみだった。

お花畑の高山帯の夢は、みごとにやぶれた。大興安嶺の高山帯には、決してお花畑は出現しない。あるものは、ただ圧倒的なハイマツのしげみと、あちこちに斑点状にまじる地衣原ばかりである。地衣原のなかには、ところどころに、エーデルワイスをしのばせるタカネキヌヨモギをみうけ、まれにはガンコウランも注意をひいた。林縁ちかくには、ダフリアビャクシンとリシリビャクシンとが、ひくく地をはっているのもみられた。だがぜんたいとして、この山上の世界は、おそろしく單調なしずんだ色彩と、あれはてた沈黙との世界であった。そこには、風さえもないのではなかろうか。ところどころに孤立するカラマツの独立樹には、内地の高山にみるような、風とたたかい、まがりくねって、片がわにばかり枝を張ったものはみられない。サルオガセをぶらさげた貧弱な小枝を、四方にのばして、死のような靜けさのなかに、まっすぐに立ちつくしているのであった(図版六ページ)。

ふたりの勘は的中して、前山の頂きは、申しぶんのない展望をゆるした。望み山は、全貌をあらわして、眼のまえに立ちはだかり、頂上のま下に、まさに消えようとするふたつの残雪を抱いていた。そして、われわれのとってきたこの尾根は、その頂上へとつらなるもっとも主要な山稜であった。森林は、左右から山頂にせまっていたが、それは、五〇メートルばかりの下でおわり、さらにいじけた樹木が、点々と頂上のすぐ下にまで達している。森林限界は、ある場所ではカラマツ、ある場所ではシラカンバによって、つくられている。望み山のすぐうしろには、高原山(タカハラ)となづけた、いまひとつのほうの高峯が、深い谷をへだててはいるらしいが、まぢかにせまっていた。この山は、高さにおいては、望み山をしのいでいたかもしれない。長さ数キロもあろうとおもわれる、その山頂は、まったく切ったように平坦で、一本の樹木をもとどめぬその台地は、双眼鏡でうかがえば、あきら

かに、ハイマツの藪のただ一色であった。

望み山にむかって、前山をはなれるやいなや、脊たけを沒する錯綜したハイマツの密生のなかに、いいようもない難行がはじまった。時刻は、すでに正午をすぎはじめていた。もしこのひろい山稜が、お花畑か、すくなくとも地衣原であったなら、一時間ののちには、頂きに着けたであろう。しかし、ふたりの予想には、大違算が生じていた。あたりまえなら、ハイマツの海をおよぐ、この悪戰苦鬪は、たぶん一時間でわれわれを敗退させるに足りただろう。しかるに、われわれの心は、まるで、魔に吸いよせられているように、この処女峯の頂きへとひきつけられていた。大興安嶺の縱斷というおおきな行爲のまえに、たかが千數百メートルのけちな山は、登る氣もおこさせないだろう、というのが、このあいだまでのわれわれの理論であった。ところが、この子どもじみたほどの心のまよいは、どうだ。理論と感情とは一致しなかった。精力は、こんこんとわきでて、盡きなかった。わたくしたちふたりは、ピストンのようにはげしく、しかしあわれにものろのろとした速さで、ハイマツの海のなかを、頂きへと近づいていった。

二時半、頂きを眼のまえにしながら、前進をうちきった。われわれは、きょうのうちには、かならずキャンプにかえって、あすはまた旅をつづけなくてはならない。それは、会心の敗走であった。あとに悔いものこさず、夜なかにつかれはてたすがたをキャンプにあらわす醜態もなく、ひきあげの潮時をうしなわなかったことは、せめてものなぐさめだった。

しかし、つかれたうえに、氣合いのぬけたからだで、もときた尾根すじを引きかえすことは、絶対にできそうもなかった。かねてこのことを予想して、南がわの谷にたえず觀察の眼をそそいできたふたりは、三時すぎ、意を決して、來たほうと反対の谷に下りはじめた。カラマツ林にはいってからも、ハイマツは、なおかなり下まで

つづいた。しかし、やがてしだいにまばらとなり、ついに一本々々が、まるで立ちあがったカンガルーのようなすがたで、三メートルくらいの高さに半直立するようになって、とうとうわれわれは、ハイマツ帯から解放された。だが、おり立った未知の谷は、いったい西に向っているのか、それとも東にながれてもとのキャンプ地のほうにむかうのか、すこぶるあやしかった。この谷の下流は、あまりにも平坦な樹海のなかに吸いこまれているので、尾根からみおろしたのでは、どうしても判断がつきかねたのである。もし西に向っていたとしたら、われわれは、とんでもない方角にまよいこんで、ひょっとすると、永久に仲間と出あえないかもしれないのだ。

はたして、平坦地にでたころ、谷すじは、やや西よりにふれはじめた。われわれは、これをすてて、森の中を、磁石をたよりに東進しはじめた。先頭をすすむ土倉のすがたが、左右にかたよりすぎると、磁石を手にした川喜田が方角を修正しつつ、慎重にすすんだ。地図もなく、見知らぬ森林のなかをさまよう、心のおく底の緊張が、時たまの休息にゆるむと、灰いろの空の下を支配する、荘厳な森のしずけさが、おしせまってくる。ときおり、巨礫をつみかさねた渇れ谷が、忽然とあらわれ、忽然ときえた。ハナゴケの、夢のように青じろいカーペットもあった。ときには、このような低地にも、ハイマツが、礫のひろがる空き地にはびこっていた。渇れ谷を一めんにうずめて、ミズゴケのクッションのおおっているところでは、それをふみぬいて、礫のあいだに足をつっこむこともあった。そして、ゴトゴトと水音をたてて、伏流が、そのどこかを流れているのであった。

何時間がたっただろうか。われわれは、理想的に、ゆきの濕地にかえりつくことができた。孤独なさまよいのちに、見おぼえのある出発点にかえったときの、ふたりの解放された氣もちは、まったく、ふるさとにまみえる思いであった。疲れと孤独とは、こんなにまで人の心を感傷的にするのである。ふたりは、ものうくのろのろと濕地をよこぎり、ビストラヤの本流にかえりついた。

ここで、すこしばかり欲ばり心をだしたために、われわれは、有終の美をなさなかった。本流の右岸に、あすのルートにふさわしいオロチョン道がないかをもとめて、こんどは右岸をゆくことにしたのである。やがて、流れは、急傾斜の山腹にぶつかった。朝の徒渉点にもどる労をおしんで、われわれはここを徒渉することにした。ビストラヤの水は、氷のようにつめたく、たちまち腰に達した。あやうくおしながされる瞬間に、長身の土倉はかろうじて対岸の枝をひっつかんだが、川喜田はとうとうわたりおおせず、朝の徒渉点へと大まわりした。九時なつかしいキャンプにかえりついたとき、長い北満のたそがれもようやくおわって夜がきた。（以上三節　川喜田）

濕地の様相

支隊のとびこんだ大興安嶺の中央部は、濕地の國であった。主稜にそうた、ビストラヤ最上流の大縦谷は、濕地をみたした、あさい皿のような凹地帯だといっても、いいすぎではない。

ガン河の上流部、およそ第九キャンプから上流の一帯でそうであったように、この廣大な面積の濕地の大半は、灌木性のカンバ類でおおわれて、きわめて特色のある、めずらしい灌木濕原をつくっている。あとにのべる礫原とともに、この灌木濕原は、大興安嶺中央部の、もっともいちじるしい自然景観にかぞえられよう。季節がすすむにつれて、いままで茶いろの枝の一といろにみえていた、この灌木性のカンバも、そろって若葉をのばしはじめた。ところが、その葉を手にとってみると、これまでかりにヒメカンバとよんで、ひとつの種類とかんがえていたものが、あきらかにちがった二種類をふくんでいることに氣づいた。この二種類は、のちに、マメカンバとコウアンヒメオノオレと同定されたが、その二種類のおもな区別点は、表5のようにまとめることができ

表 5. 灌木性カンバ類二種の比較.

		コウアンヒメオノオレ *Betula fruticosa*	マメカンバ *Betula exilis*
葉	外形	鋭頭・鋭鋸歯・心臓形	鈍頭・鈍鋸歯・ほぼ円形
	支脈	6〜7 條	5 條内外
	毛茸	表面の葉脈のあいだに，毛の密生した條がある．裏面は葉脈上にのみ毛がある．	表面の葉脈上に，わずかに毛がある．裏面は無毛．
幹		太くなると，シラカンバのように樹皮の白くなることがある．	太い幹でも黒い．
樹型		やや丈がたかい．小枝の先きの垂れる傾向がある．	やや低い．小枝は垂れない．
生育地		やや下流性．濕地では流れに近い部分におおい．河谷の土のふかい乾燥地に密生することがある．	やや上流性．流れからとおい濕地の内部にもよくそだつ．山地の土のあさい乾燥地に密生することがある．

る。図34は、葉のスケッチである。

表5にもみるように、灌木性のカンバは、かわいた土地にはえていることもある（二〇三ページ）が、大部分は濕地とむすびついている。密度は場所によりちがうが、ふつうは、夏に葉がのびそろうと、濕地の全面を完全におおいつくし、なれないものには、そのしたに悪性の濕地がかくれていようとは、とうていおもわれない。山のうえからみおろすと、直径二センチ前後のつやのあるこまかな葉によってうずめつくされた谷は、あさいみどり色の牧野のように

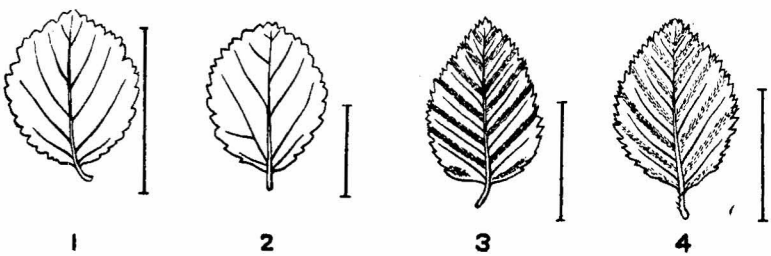

図 34. マメカンバ (1, 2) とコウアンヒメオノオレ (3, 4) の葉の比較.
線は実物大の縮をしめす.

みえるのであった（図版一一ページ、下段）。

プレチュケによると、東シベリアでは、このような灌木原を、イェルニク（Jernik）とよんでいるという。[1] イェルニクの構成種は、この地方では、ほとんど二種類のカンバばかりで、なかんずく、マメカンバが圧倒的におおい。ただ、わりあいにカンバの脊のひくい、まばらな部分には、ホザキシモツケ、キンロウバイ、サカイツツジ、ヤナギ類（ヌマキヌヤナギ、チョウセンキツネヤナギなど）そのほかの灌木類を、かなりまじえていることもある。

こういう、湿地とむすびついたイェルニク――湿性イェルニクは、一種のツンドラ的な植物社会である。たとえば、*Betula nana* の灌木湿原は、北極をめぐるツンドラ地方に、ひろく分布しているし、またマメカンバの生えた湿地は、東シベリアの北部タイガ地方を特徴づけている。[2] だから、こういうタイプの湿地は、「灌木ツンドラ」とよばれることもある。のちに、氣候條件とむすびつけて、学術篇のなかで論議されているように、このような灌木ツンドラが分布しているということは、その地方が、北方的な針葉樹林帯のなかでも、とくに低温な、いわば森林からツンドラへの移行帯的な氣候をもっていることをしめすのである。この点で、ガン河上流から北の北部大興安嶺の大部分に、イェルニクをみることは興味がふかい。われわれが、はじめてイェルニクの断片を発見したのは、ガン河の峡谷部の入り口だったが、プレチュケは、ずっと南方のクルドゥル河の水源地帯と、そこからクロポトキン峠をこえたノミン河の源流とに、分布の南限をみとめている。[3] 北は、ビストラヤの全流域をへて、われわれのルートにそうては、モーホのわずか手前まで、とぎれることなく分布している。この範囲の地域は、イェルニクの分布から察して、その海拔高度のために、ほぼ北緯六〇度以北の、東部シベリア北部にそうとうする、寒冷な氣候をもっており、まさしく満洲の寒極にあたるのである。

ところで、この濕性イェルニクの下にかくれた濕地は、どういう性質をもっているだろうか。ガン河では、最源流部をのぞいて、カンバ類は、野地坊主濕地の、野地坊主のあたまのうえに生えていた。このような野地坊主型のイェルニクは、ビストラヤ上流でも、ごくふつうにみられるが、ちがったタイプとして、ミズゴケの濕地のうえに成立したイェルニクが、あたらしくあらわれてきた。いま、うえにはえているカンバ類をしばらく度外視して、ミズゴケと野地坊主との関係についてのべてみよう。

ガン河で、ミズゴケのはじめて出現したのは、やはり峡谷部の入り口であったが、さいしょは、谷の外がわの山すそにちかい林縁の野地坊主のあいだに、ミズゴケのかたまりが、斑点状にひっかかっているのをみた。上流にちかづくと、ミズゴケの量は、しだいに増して、野地坊主のあいだをうずめ、さらに前者が後者をおおいかくして窒息させ、ミズゴケ帯のはばは、山すそからだんだん流れに近いほうへと、ひろがってきた。ビストラヤの上流では、この狀態がいっそうすすんで、ひろい谷の流れから山すその林縁までの濕地帯のうち、流れにちかい地帯と林縁にちかい地帯とを、野地坊主とミズゴケとが、それぞれすみわけているようにみえる。このあたりの谷は、きわめて平坦にみえるが、その横断面を想像すると、流れの位置を底に、あさい皿のように、ごくわずかな傾斜をもって、両がわに高まってゆく。ミズゴケと野地坊主との境は、この傾斜がようやく感じられはじめるあたりに一致するように思われた(図35)。

このようなミズゴケと野地坊主とのすみわけは、両者の水位にたいする性質のちがいによって説明されよう。野地坊主濕地は、一種の低層濕原であって、スゲの成長点は、水位すれすれのところにあり、ふかい水をたたえたなかで生活できるが、高層濕原の構成者であるミズゴケのほうは、水位がひくまって、成長点が水位よりずっと高くなければそだつことができないのであろう。だから、たとえ小さな流れであっても、流れにすぐ接したと

ころまでは、ミズゴケ湿原は、決しておりてこない。そして、流れの方向にかなりの傾斜をもっているような、ちいさな枝谷のそこは、一めんにミズゴケによってうずめられるのがふつうであった。また、傾斜度にともなう水位の関係のほかに、水温の高低も、多少は影響しているかもしれない。たとえば、プレチュケも観察しているが、下流から河をさかのぼって、はじめてミズゴケのあらわれるのが、北斜面の山すそである、というような場合に。川喜田は、ナーラチの谷で、垂直にちかいような急斜面に、一めんにミズゴケがこびりついて、黄いろいもうせんのようにみえるのを観察した。ミズゴケの下からは、青氷があらわれた。のちに七月の下旬、吉良がソロニースの谷で、まったくおなじようなものをみたときには、掘っても掘ってもふかふかの死んだミズゴケの層がつづき、数十センチのそこに、つめたい地下水がしみでてきた。

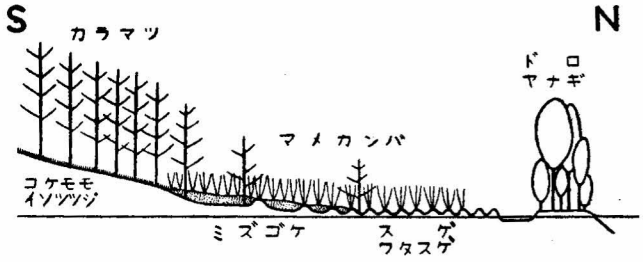

図 35. ビストラヤ上流の谷における湿地の分布.

そのしたが野地坊主であると、ミズゴケであるとをとわず、マメカンバやヒメオノオレは、ほとんどその全面をおおっている。しかし、ごく流れにちかい部分には、帯状に、じゅんすいの野地坊主がのこされている場合がおおい。ごく小さな流れでも、そのふちに、わずか二—三列の野地坊主が、ぎょうぎよくならび、支隊の馬に、とぼしい食物を供給した。ビストラヤ本流などでは、もちろんそのはばがひろい。また、とくにおおきな支流——たとえば、コンホなどの合流点には、野地坊主ばかりの湿地が、イェルニクをおしのけて、ひろびろと展開していることがある。図35にしめしたのは、本隊のとおったビストラヤ上流、タジモカン合流点ちかくの左岸の断面模式図で、ごく典型的な湿地の各

タイプの分布狀態をしめしている。

一方、かなり傾斜のつよい、ちいさな谷の水源には、灌木を欠いて、ミズゴケの面を露出した、じゅんすいのミズゴケ濕地も、小面積ながらみられた。そこでは、色とりどりのミズゴケが、クッションのようにもりあがり、典型的な高層濕原のながめをつくる。ただし、泥炭層は、もっと濕潤な海洋性氣候の土地の高層濕原にくらべて、はなはだしく貧弱なようであった。これは、土地の凍結に関係しているものらしい。[3] ホソバイソツツジ、ホロムイツツジ、クロマメノキ、サカイツツジ、キンロウバイ、コウアンヌマヤナギ、ヌマキヌヤナギなどの小灌木や、ヒメツルコケモモ、トナカイソウ、クロバナロウゲ、ヒメオノエスゲなどの草本は、こうした高層濕原を特徴づける。とくに、サカイツツジは、ミズゴケの指標植物ともいうべく、ミズゴケが多少ともあらわれると、イェルニクのなかでもどこでも、きっとそのすがたをみせた。なお、ざんねんなことに、ミズゴケの標本の大部分が紛失したので、その種類相をあきらかにすることができない。ただひとつ、ガン河の峡谷部で採集したものは、*Sphagnum obtusum* と同定された。

注意しなければならないことは、いままでミズゴケの濕地としてのべてきたもののなかに、あきらかに、野地坊主濕地から発達したものが、そうとうにふくまれていることである。図35でもわかるように、野地坊主帶とミズゴケ帶とのつぎめのあたりに、前者のうえにミズゴケがかぶさったような狀態がみられるのは、とうぜんのこ

図 36. サカイツツジの花.

とだが、ずっと上部の、完全なミズゴケ帯のなかでも、やわらかいミズゴケの下に、野地坊主の凹凸が、はっきり感ぜられる場所がすくなくないのである。ビストラヤの源流部では、あるいは、このような中途半端な湿地が、いちばん大きい面積をしめているかもしれない。しかし、だからといって、すべてのミズゴケ湿地が、野地坊主の段階をへて、生成してきたという、公式的なサクセッションをかんがえる必要はないであろう。やはり、河の浸蝕のすすむにつれて、すこしずつ谷の側面の傾斜がまし、それにともなって、両者の帯状すみわけの相対的な位置がずれていったものと思われる。

湿地のサクセッションの問題としては、むしろ、さいごにのべようとする現象のほうが、興味がある。それは支隊が、第一夜のキャンプ地でであったような、立ち枯れのカラマツ林のしたが湿地化している場合である。白骨となったカラマツが林立するなかが、完全な湿性イェルニクとなってしまっている例は、そののち、いたるところでみうけられた。その一部は、たしかに、湿地にとなりあう森林が山火事でやけたあと、凍土層がふかくまでとけて、地面が湿潤化するのに乗じて、湿地が進出したものとおもわれた。しかし、そうつごうよく、とびとびに森林が焼けていったとはおもわれない。それでは、この地方では、湿地は、たえず森林を圧迫しつつあることをみとめ、その背後に、永久凍土をすこしずつ余分にとかしてゆく氣候の温暖化、あるいは湿潤化を假定すべきなのだろうか。

もうひとつのにげ道は、つぎのような變化のくりかえしを假定することである。すなわち、森林と湿地とのつぎめにあたる、中間的な立地條件の土地が、一度森林になると、永久凍土層に、なにか微妙なバランスの變化がおこって、土地が湿地化し、森林が枯れる。そのあとには、まず野地坊主ができ、そのうえにカンバ類が芽ばえて、イェルニクとなる。イェルニクが発達の極限に達すると、こんどは土地の乾燥化がおこって、ふたたびカラ、

マツの若木が侵入しはじめ、森林のかげとなって、イェルニクは消失する。こうして、濕地のふちでは、いつまでも、一進一退がくりかえされるというわけである。ゆかいなことに、アムール地方の濕地についても、にたりよったりの假説を提出しているロシア人がいる。[4] けれども、この假説には、なにも実証的ならづけはないから、問題は疑問のままでのこされる。ビストラヤの濕地の様相は、くわしくみるほど、ふくざつをきわめているのである。（吉良・川喜田）

〔註〕

① プレチュケ（一九三七）前出。七八—八〇ページ。

② ミロツウォルツェフ・滿鉄経済調査会訳（一九三六）東部シベリア地方自然地理概観（大連）。一四、一六五ページ。原著は、モスクワおよびイルクーツク、一九三三年。

③ Katz (1932) op. cit. S. 274.

④ プローホロフ・滿鉄調査課訳（一九二七）黑龍州の氣候・土壤・植物研究誌、下卷（大阪）。一二九ページ。原著発行一九一三年。

水源から水源へ

きのうの偵察の結果は、本流ぞいの河辺林が、ルートとして、決してのぞましいものでないことを、あきらかにした。われわれは、やはり、はるか東にある林縁をたどってゆくべきだった。たとえ、支流の濕地を、たびたび横ぎらなくてはならないとしても。

ところが、われわれにとってもっともてきとうな交通路である、そうした林縁には、ほとんど例外なく、オロ

チョン道がみつかった。かれらとわれわれとの感覚は、ようやく一致してきたのである。ただ、支流にさしかかると、オロチョン道は、きまって、枝谷のほうに入りこんだり、妙な方角にそれたりするので、主体性をとりもどして、みずからの道をもとめなくてはならない。ところが、濕地をわたってしまうと、またきまって、ひょっこりとべつの道があらわれてくるのであった。オロチョンのユルタあとは、たいてい、こういった支流の谷のほとりの、かわいた台地のカラマツ林のなかにあった。そこは、われわれにとっても、よいキャンプ地にそういないが、こまったことに、馬にくわせる草のたぐい——野地坊主を主とする——がとぼしかった。なぜなら、まえの節にあるように、こういう山すその濕地では、ミズゴケにおおわれたイェルニクがふつうで、野地坊主は、ささやかな流れのほとりに、列をなしてならぶ程度にしか、みいだされなかったからだ。馬が腹をすかすだろうとおもうと、われわれまでも、ほがらかにはなれなかったのである。ミズゴケの濕地がしだいに優勢となって、しばしばカラマツの林内にまでひろがっているのをみたとき、われわれは、大ビストラヤの水源がもうとおくないのを知った。

六月一一日には、ビストラヤの最源流の分岐点に達し、左又をさかのぼって、この谷でのさいごのキャンプをむかえた。おもえば、ナーラチの合流点からここまで、われわれは、ほとんど河をさかのぼっているという感じをもたなかった。それほどまでにだだっぴろい、時計皿の断面をおもわせるような谷であった（図37）。ロシア語で、「急流をなす河」を意味するビストラヤの名は、ジン山脈に横谷をつくって、アルグンにそそぎこむ、下流部にこそふさわしいのであろう。

峠ごえをひかえたあくる朝には、またもや馬が、とんでもないさわぎをひきおこした。一頭のすがたがみえないのだ。おりから、雨がシトシトとふりはじめた。滯在の覚悟をきめて、眞剣な捜索にかかったかいがあって、

あった。朝の交信時間には、アムールの河びらきをまって黒河に滞在中であった漠河隊からの第一信が、モーホ経由で受信された。

「漠河隊は昨一六日黒河発。二三日モーホ着の予定。」

交信のおわるころ、隊列はもうつま先上りに、つぎの峠にかかっていた。峠に立つと、上流の山々は、両岸とも、シラカンバとカラマツとのまじった疎林におおわれていた。峠から、キャラバンは、ふたたびガン河の谷へ下ってゆき、隊員の一部は、東北にあたる岩山へと展望にのぼっていった。

これは、この興安嶺的山野にあわせて、今西隊長の採用した行進技術のひとつだった。一日のうちに二―三度てきとうな展望台をえらんで、そこから行進方向のかんたんなスケッチをとり、山系・水系を航空写眞に同定したのち、予定ルート・つぎの展望台・晝食予定地・キャンプ予定地などをきめておくのである。こうすることによって、たとえ航空写眞がなくても、地勢のあらましが理解でき、行進中の局部的な障害によって、大勢の判断をあやまらずにすむ。われわれは、この展望法を、「紫陽道人」と愛称していた。われわれが山のぼりの手ほどきをうけた三高の山岳部には、ふるくから、たぶん大先輩である今西隊長のころからつたわってきている、紫陽道人著「山岳旅行の祕訣」というポケット本があった。そのなかには、「釜なくして飯を炊く法」、「密林を抜けるに小太刀の入身」などというユーモラスな表現で、近代アルピニストがあんがいおろそかにしている、基礎的な登山技術のかずかずを、くわしく説明している。そのなかの一節、「三点以上の目標を定めおくこと」というのがその出典である。ちょっと引用してみよう。

「まず分け入るべき山岳を、自己の眞正面に見て、山狀や林相や、伐畑とか断崖とか、崩壞の個処とか、何かの特徴を見定める、之れを甲の点とす。そして之れに向って右の方に於て、乙の点とすべき高峯の特徴を見定

める、次に左の方に於て、同様に丙の地点の高峯を見定める、そして自己の居る眞後に丁の地点を定める、之れを野帳の端に、見取り図として写し、側らに、磁石により方位線を引いて置く。……行くに從って終いに甲なり乙なりの地点が、見えなくなる、その見えなくなる前に、又た自己の目的の山頂を平面に見て、左右に丁戊己の地点を見定め、之れを野帳に留める、成るべくは前の甲乙丙の地点を存じ、又は新らしい点と連絡して菱形を造る。斯くして進むに從うて、菱形が連絡して網の目を重ねた様になる。……山相は見る方面に依って異るから、特徴を見て置かぬと、往々山を見間違える、之れが山岳探檢の必要な方法である……」

変化のない下流の谷の行進では、毎日の紫陽道人は、なかなかたのしみでもあった。ガン河の谷は、あいかわらず黄いろい枯れ草か燒け野ばかりで、ねむけをもよおすほど單調だった。そのなかに、晝食のために馬をとめたムリという支流のほとりで、まひるの日ざしをあびて、めざめるばかりの黄金色に咲いていたフクジュソウの印象はわすれがたい。フクジュソウも、このあたりのは、ふつうのアドーニス・アムールエンシスではなくて、アドーニス・シビリカという学名をもっている。これが、シベリアフクジュソウの、満洲ではじめての発見であった。

午後は、はじめて濕地にてこずった。まだ濕地の分布は、沖積原の凹地にかぎられているので、ふつうは迂回できるのだが、ここでは、一本の支流が幅のひろい濕地と化していたので、避けてとおるわけにはゆかなかった。いちばん幅のせまいところは、三〇メートルそこそこしかないが、そのかわりに深い。駄馬は文句はないが馬車のほうが問題だ。なにしろはじめてのことだから、名案珍案続出してはてしがない。おかげで必要以上の時間をついやした。いつの場合も、船頭がおおすぎてはろくなことはない。けっきょく、荷をかるくして強引にのりいれてみれば、たいしたことはなかったのだから。それでも、運のわるい馬は、わき腹まで泥のなかにはまり

こみ、馬具をはずして引きあげてやらねばならなかった。

それは、ひとつには、シナ人の車夫が、泣きごえで「ワンパ・タン！」とどなっては鞭をふるうばかりで、ロシア人のように、体をつかって手だすけしてやらないせいであった。骨おしみして体を使いたがらないのは、見ていてあまりゆかいではない。とまり場についても、ロシア人がいそがしそうにはたらいているのに、車夫のふたりは、いちはやく大テントの風かげを占領して、ゆうゆうとねそべるのがならわしであった。いよいよ、馬車にも車夫にも、ひまを出すべきときが近づいたのである。この夜は、ガン河の分流のほとり、ふかい枯草のなかにテントをはった。

一九日も、ひねもす沖積原の行進をつづけた。ひる休みには、突風が黒い雲を巻いて、東の空に春雷がひびき、カラマツのこずえをならせた。カラマツは、いつのまにか、沖積原のなかや、河辺林のうしろに、まばらな木立ちをつくるようになっていた。

きのうからきょうにかけて、河辺林のうしろのこうした木立ちのなかに、ところどころオロチョンのすまいのあとをみるようになった。長さ三メートルあまりの細い丸太が、二五—六本円錐形にくみあわされ、底面の直径四メートルくらいにひらいている。丸太は、頂点でまず三—

図 12.　野地坊主との最初のたたかい．中央右手の大男は，ダフール人トクンボ．

四本をくみあわせ、のこりはそれにもたせかけてあるだけで、綱や釘をもちいていない。この骨組みだけが、あちこちにのこされているのである。われわれは、外人の習慣にしたがって、このすまいをユルタ（yurt）とよんだが、ユルタというのは、モンゴル人のパオなどをもふくむひろいことばで、オロチョン自身は、これをジュウとよんでいる。ひるすぎには、山すその林のなかに、風葬の屍体もみつかった。風葬といっても、屍体そのものは、荒けずりの板でつくった棺におさめ、高さ一メートルばかりの木組みの脚のうえにのせてある（図版一三ページ）。こうして放置したまま、そのちかくには一切近よらないのだという。

そして、午後もだいぶんおそくなったころ、本流にちかい河辺林のそばをあるいていたわれわれは、左手はるかの山すそに、にぶく光る白いものをみとめた。オロチョンのユルタであった。双眼鏡をむけてみると、放牧されている馬の群れもみえた。あすは、五日間の連続行進のあと一日の滞在と予定されていたので、つごうよくちょうどその日に、オロチョンを訪問できることになったのである。

やがて、乗馬で先行していた隊員から、滞在地をきめたというしらせがきた。ガン河の本流が、おおきく屈曲して右岸の山にぶつかって急な崖をつくりだし、ふたたび左岸のほうに向きをかえるその山ぎわに、五―六メートルの高さの快適な段丘があって、カラマツの大木がまばらに生えていた。その段丘の突端に、二夜をおくるはずのテントが立ちならんで、テントのとびらをあけると、水面から立ちのぼるうすい夕霧が、しらじらと流れこんできた。

滞在の前夜は、ちょうど土曜日の夜の氣分で、どことなくのんびりしていた。しかし、かならずしも暇というわけではない。計理係の小川は、人夫賃の精算に頭痛鉢巻だ。あすは、馬車と車夫、それにトクンボをくわえて帰すことにきまったからである。わざわざ案内としてやとったトクンボをかえすことにしたのは、ほかでもな

い。かれは、案内としてガイブシャンをたすける一方、ロシア語・オロチョン語の通訳にもあたるはずであった。ところが、ガイブシャンは、ガン河のオロチョンきっての秀才で、狩りや道案内の腕のたしかなのはもちろんのこと、シナ、モンゴル、ロシアの三ヵ國語を、かなりの程度にあやつることができた。しかも隊員には、シナ語の通訳として郭助手があり、なんによらず器用な無電の大塚さんも、やはりこの三ヵ國語に通じていたのでトクンボの役目は、すっかりなくなってしまったのである。滞在日二〇日の朝はやく、かれらは帰っていった。

馬オロチョン訪問

二〇日の朝、われわれは、資料の整理にいそがしい測量隊の佐藤技手や航空写眞係の山本さんをのこして、馬をつらねて、オロチョン訪問にでかけた。シマリスのチョロチョロ走る林をぬけて、三〇分ばかり馬をはしらせると、林のはずれにユルタが三つ立っていた（図版一二ページ）。

オロチョンというのは、満洲の北部にすんでいる、北方ツングース族（northern Tungus）の原住民をさす総称で、かれらが自分自身をさしてよぶよび名にしたがって、オロチョンといわれるのである。満洲のオロチョン族は、大部分、馬を家畜として飼っている狩猟生活者である。その例外としては、われわれのめざす大興安嶺北部の密林地帯に、トナカイを家畜としている「トナカイ・オロチョン」がいる。これと区別して、前者を「馬オロチョン」とよぶ。馬を飼うということと狩猟生活とのあいだには、おおきな矛盾がある。馬は本來草原の動物であって、放牧のための草地を必要とするが、狩りの目標となる野獣は、草原よりも森林のほうにおおいからである。このふたつの相反する條件に制約されて、馬オロチョンの生活空間は、密林と草原とのあいだにはさまっ

た、森林ステップに限定されざるをえない。とくにガン河のように、谷にそうて、草地が森林のなかにくさび狀に入りこんでいるところが、かれらのすみかとしてもっともつごうがよい。だから、興安嶺の馬オロチョンは、たいてい大河の谷にすみ、冬は下流に、夏は上流にと、季節とともに移動しながら暮しているのである。また、こういう二元的な矛盾性は、ちいさくは、ユルタの位置のえらびかたにもあらわれている。すなわち、放牧のための草地と、ユルタの骨組みに必要な木材とのふたつの條件をみたすために、いきおいユルタは、林のはずれ、とくに水のゆたかな河辺林のはずれに立てられねばならないのである。

馬をつないでユルタに近づくと、つながれた犬が、猛烈にほえたてた。ユルタの骨組みのうえは、よしずのようなものでおおわれ、そのうえから、さらに数本の棒が、おもしとして立てかけられていた。冬には、シラカンバの樹皮を厚くぬいあわせたものや、獣皮をもちいるから、これは一種の夏ずまいなのであろう。入口は、骨組みの材木のすきまがすこし廣くなっており、鹿皮がとびらのかわりにぶらさがっていた。内にはいってみると、まんなかには焚火があって大鍋がかかっており、左右にはシカの、奥には馬の皮をしいた座席がもうけられているほかは、土間のままで、わずかに枯草がしかれていた。ユルタの頂点から一メートルたらずの部分には、おおいがかかっていないので、明りがさしこみ、煙出しの役をもはたしている。

まわりの壁ぎわには、ごたごたとした容器類や馬具をならべ、これがすきま風のふせぎともなっていた。容器はたいてい白樺皮製で、けものの腱糸でぬいあわせられていた。正面の壁には、皮でつくったまんだらのようなボルカンがかかっている。ボルカンというのは、神像あるいは呪符とでもいえばよいか、とにかく、シャーマニズムを信じているかれらの、一種の偶像である。四—五〇センチ角の皮に、布などをもちいてぬいとりをほどこし、上部にはノロをかたどったという人型ようのぬいとりがふたつ、下部にはボタンどめのポケットのようなも

のがふたつ、まんなかには馬の木像と鏡の形の金属板、それにじゅずのようなものが、それぞれひとつずつつるしてある。ふちには、馬の尾毛をたばねて、たくさんつるしてあった。ポケットのなかを、こっそりさぐってみたら、馬の毛といっしょに、奉天神社のおまもりがでてきた。ボルカンとよばれているものは、これればかりでなく、木でつくった棒のようなものや、稚拙な木像もあり、ユルタの中の柱や、戸外のシラカンバの枝につるされていた。

このユルタのあるじは、オングーチャンという、五〇がらみの男だった。わかいころには、清朝の満洲旗人として、軍制に編入されていたという。辮髪のような頭をしているので、シナぎせるをくわえているとひどくシナ人化した印象をあたえた（図版一三ページ右上）。きものは

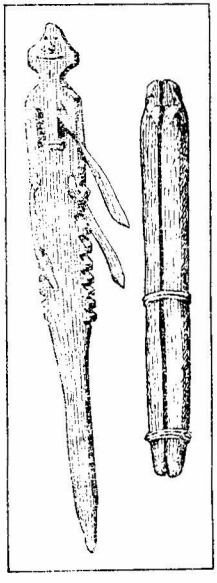

図14. ボルカン（その2）左は木彫，皮片れをつけたもの．右は木を腱糸でしばりあわせたもの．ユルタ正面にかけられていた．およそ1/4大．

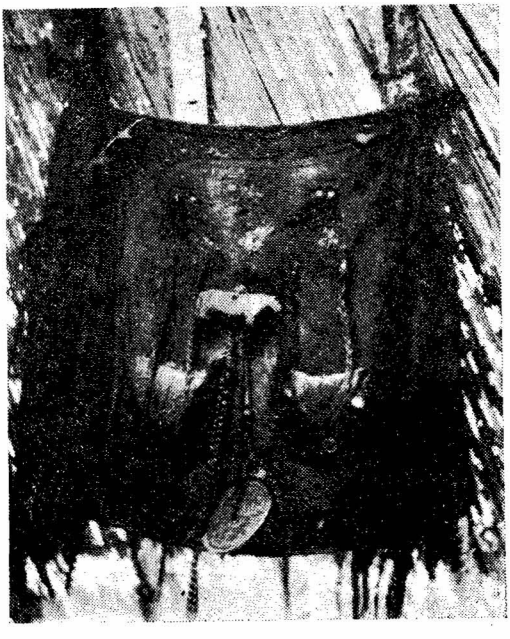

図 13. 馬オロチョンのボルカン（その1）．背景は，ユルタをおおっているよしず．

なめし皮の上下で、上着はえりのない外とうのようなものを、前びらき、左前にふかくかさねあわせる。ズボンは、ほそい筒のようなももひきを、片脚ずつはく。靴は皮の半長靴、いわゆるモカシン型で、くるぶしでひもでしめる。女の服装も似たりよったりで、あかいすそかざりがついているくらいのものだ。この服装は、ひろく北方ツングースに共通のもので、あまりにも防寒用としておそまつな点に、疑問がもたれているので有名である。じっさい、おなじシベリアにすむ原住民でも、いわゆる古アジア族に属するチュクチ、コリャーク、サモエード、オスチャックなどの民族は、いかにもあたたかそうな、袋型の上着と長いズボンにくるまっているのである。シロコゴロフなどは、北方ツングースが、もともと南方起源の民族であるという学説の根拠のひとつとして、この衣服をあげてさえいる。[1] おそらく、本來は、下着をつけないか、固有の下着があったのであろうが、いまでは、みな綿布製のものを着ていた。ふつう男女とも、上着のうえから、モンゴル風の黒い帶をしめていた。

用意してきたビスケットや薬品のおくりものをひろげてしまうと、われわれは、オングーチャンをつかまえて、質問ぜめにしはじめた。もちろん、良心的な調査のためには、こんなやりかたは賢明ではない。そのためには、そうとうな日数を、かれらとともに送るべきであろう。しかし、われわれは、先をいそぐ身であった。ことにガイブシャンによれば、これから先にはもう馬オロチョンはいないというから、われわれのおもな目的のひとつであるトナカイ・オロチョンの調査の参考とするために、どうしてもここでなにがしかの資料をにぎってゆく必要があった。質問の矢おもてに立ったオングーチャンも、通訳として両方の板ばさみになったガイブシャンもずいぶんめいわくそうであった。

質問がすすみはじめると、われわれは、たちまち、おおくの疑問におそわれざるをえなかった。第一、かれらの昨年の狩りの成績は、ひどくわるくて、えものの数は、とうてい、一家族をささえてゆくに足りそうもないの

だ。食わずにすませたはずはあるまいと追及してみると、主食は配給のアワでおぎなったという。狩りにでなくとも、食ってゆけるだけのアワの量は、配給で確保されているらしいのである。そのせいかどうか、この数年、かれらはしだいに狩りをなおざりにしているようであった。狩りを生命としていた連中が、ほかに生活の道を切りひらくことなしに、なまけてあそんでいるということは、わるい影響なしにはすまないであろう。かれらの第一印象が、いちじるしく退嬰的・非活動的であったのは、偶然ではなさそうにおもわれた。そのうえ、不健康そうな顔つきが、いっそう印象に陰惨味をくわえた。隊づきの医者折口さんの意見では、すくなからぬ人数が、胸をおかされているうたがいがあった。現に、たえずかるい咳をしている若い女もあった。なかんずくめだったのは、トラコーマのおおいことであって、半数くらいの人間が色めがねをかけていた。子どもが、ことごとく重症であるのも悲惨であった。どこへいっても、これだけはかわいいものであるはずの子どもが、ここにかぎって、近よる氣がしないのだ。親のひざにまといついて煙草をせびっていた一〇歳くらいの男の兒に、ビスケットをあたえると、ひと口かじって、いきなり眼のまえ数センチのところまで近づけて眺めたのには、おどろいた。ほとんど失明に近いのだ。けものを追って生きてゆく人間が、眼をわるくしてどうするというのだろう。このままでは、このオロチョンたちの運勢は、あきらかに凶とでている。かれらは、せまってくる近代文明のなかに、もはやあたらしい運命と生活とをみいだしえないで、滅亡の道をたどりはしないであろうか。

この家族は、ガン河のオロチョンのなかでも、とくべつのものであり、またガン河オロチョンそのものが、興安嶺にすむ同族の最低の水準をしめすものなのかもしれぬ。すくなくとも、われわれはそう思いたかった。この考えがただしかったかどうか、またこのほかに、かれらの重い口からなにがもらされたかについては、節をあらためてまとめることにして、わたくしはひとまずこの陰氣なユルタから遠ざかることにしよう。われわれ自然科

学をうけもつものは、あとを伴や小川にまかせて、一足さきにキャンプにかえらなければならなかったのだから。

キャンプでは、あすから数日ぶんの隊員の晝食となる燒餅(シャオピン)つくりに、馬夫たちが、粉まみれになってふざけていた。隊長と大塚さんとは、グラモースキーに入門して魚釣りに、梅棹は鳥うちに、それぞれでかけてしまって、藤田がひとり六分儀をとりだして、最初の天測点を定めるべく、しきりと器械を調整していた。天測には、観測者と時計係りと、ふたりの人間がいる。その片棒をつとめてしまうと、わたくしも胴乱をさげて、植物採集にでかけた。まだ木々の芽がうごきだしたばかりで、あまりあたらしい種類にもであわなかったが、河辺林のなかに、葉の緑のさえざえとしたシベリアアカマツの若木をみつけたのはうれしかった。シルホーワヤの河辺林にカラマツの若木をみたときのように、このアカマツも、やがて数日行程の上流に、林となってあらわれてくるだろう。流れの岸の曲りかどには、背を沒するようなイワノガリヤスの枯れ野がせまり、そのなかにわけいってみると、おもいがけないところに、縱横にふみあとが走っていた。よく注意してみると、見おぼえのある縞のぬけ毛が、いたるところに眼についた。糞もおおい。ノロの道だった。ところどころに、おびただしい毛をふくんだほそながい、ちがった糞がおちているのは、オオカミのものにちがいない。

引きかえしてみると、ノロはとれていなかったが、魚はたくさん釣れていた。タイメンのほかに、レノック、シューカなど、どれも五〇センチ以上、最大のタイメン九八センチという大ものぞろいだった。レノックは、やはりマス科の魚で、横腹に、マス科特有の褪紅色の斑紋と、こまかい黑点とがある。シューカは、頭のとがったどうもうな顔つきで、貪食者として有名である(図97)。味は、レノックがタイメンに次ぎ、シューカはずっとおちる。ちょうどそこへ、さっきのオロチョンたちが答礼にきて、やすで突いた魚をおみやげにもってきたので、

ますます夕食のおかずが豊富になった。おかげで、脂こい料理をたらふく食ったうえに、タイメンが腹にもっていたすずこを、生醤油で食べるなど、まことにぜいたくのかぎりであった。（以上四節　吉良）

〔註〕

① シロコゴロフ・川久保悌郎・田中克己訳（一九四一）北方ツングースの社会構成（東京・岩波書店）、二八二ページ。原著は、Shirokogoroff, S. M. (1933) Social organization of the Northern Tungus. Shanghai.

馬オロチョンの生活

生活空間　馬オロチョンの生活を、同族のほかの北方ツングースたちと区別する最大の特徴は、いうまでもなく、家畜として馬を飼っていることである。それでは、かれらの生活のなかで、馬は、どんな役わりをはたしているであろうか。まずかれらは、馬にのって、狩りにでかける。これは、徒歩の場合にくらべて、いちじるしく行動速度をはやめ、狩りの舞台を拡大する。また、とれたえものの運搬のみならず、生活そのものが移動生活であるため、家財の運搬のためにも、馬は、なくてはならぬ存在である。

このように、馬は、かれらの狩猟生活にとって重大な役わりをしめており、その社会にあっては、まさに欠くことのできぬ財産なのであるが、一方その馬を飼うということが、かれらの行動を制約している事実をみのがしてはならない。まえにものべたように、馬を飼うために必要な草原から、はなれることができないからである。一方、狩猟をいとなむかれらの生活は、えものの豊富さの点でも、また材木を骨組みとするユルタに住む点からいっても、本質的に森林の世界に適應したものであって、森林から遠ざかることもできない。この点で、森林ス

テップのよく発達した地方、なかんずくガン河の谷のように、草原が深く森林のなかに侵入しているところは、もっともかれらの生活に適していると考えられる。ことに森林ステップの背後には、モンゴリアのステップという、廣大な遊牧の世界をひかえているのであるから、馬の補給という点でも、ひじょうにつごうがよいわけである。ところが、おなじ大興安嶺の河でも、東斜面の諸河川になると、こういった点では、よほど條件がわるくなる。馬オロチョンの家族あたり馬の頭数の分布図は、ある程度この事情をものがたっている。じっさい、シロコゴロフの報告によると、東斜面のクマラ河のオロチョンは、この地方が馬を飼うに適しないために、狩りに出るのに、丸木舟や徒歩でゆかねばならないといい、また、草のかわりに肉で馬を飼うという、おどろくべき方法さえとられているのである。[1]

馬と狩猟生活とをむすびつけた北方ツングースの生活型は、大興安嶺の北部のほか、小興安嶺の一部にもひろくみられ、やはりオロチョンとよばれている。また、大興安嶺のオロチョン領域の南方に、その領域をもっているソロン族は、オロチョンと種族的に嚴密な区別をつけにくいとされているが、かつては、やはり「未開の森林狩猟種族」と考えられていた。[2] しかし、いまでは、東斜面のノンニの谷にすむものは、すでに農耕生活にうつりつつあり、[3] 西斜面のホロンバイルのものは、すべてモンゴル人とおなじ遊牧をいとなんでいて、ごく一部のものが狩猟をやるにすぎなくなっている。[4] これは、狩猟生活の世界が、他の世界に移行する地帯にみられる、生活型の適應分散（adaptive radiation）の適例といえよう。

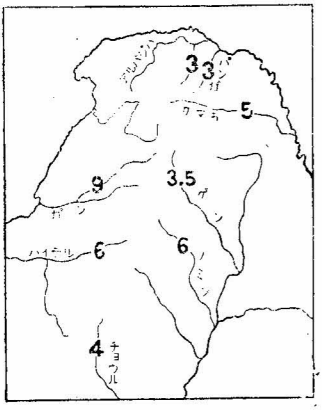

図 15. 馬オロチョンの家族あたり馬所有数（1936年末，吉岡義人氏調査による）.

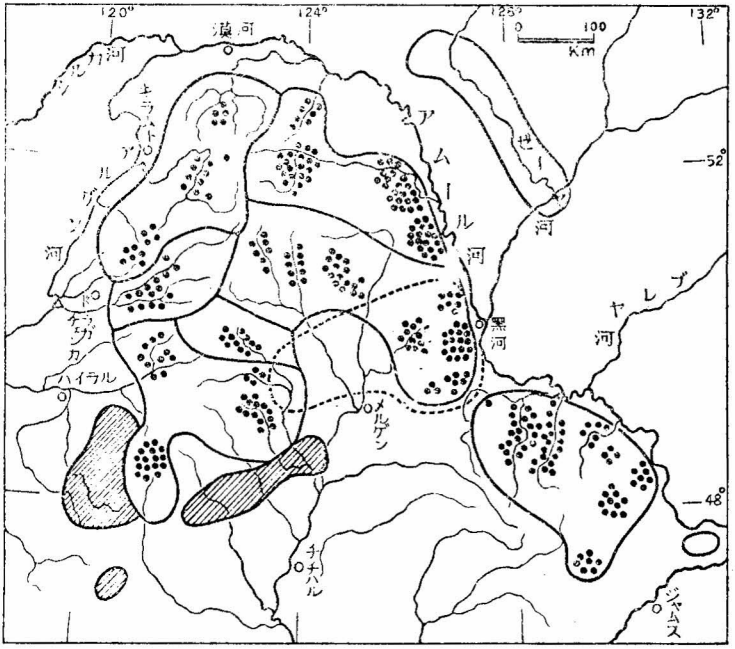

図 16. オロチョンの分布図．実線でかこんだのはオロチョン，斜線はソロン族，破線は農耕化した部分をしめす．黒点ひとつは10名をあらわす〔主として1938—39の治安部調査による．ソロンの分布は，興安局調査課(1939)満洲國内旧蒙古地帯民族分布図にもとづいた〕．

プ地帯の週辺に、森林ステップ地帯が存在するはずであるが、じっさいには、その幅がひじょうにせまく、ほとんどタイガとステップとがじかにつながっているようなところがおおいので、

ところで、この馬オロチョンとおなじ生活型を、満洲以外の地方にもとめてみると、もともと、満洲のオロチョンの分岐と考えられるゼーヤ河流域のものをのぞいては、[6] すくなくとも北方ツングース系の種族のなかには、まったくみあたらない。満洲以外の北方ツングースは、ザバイカル地方の一部をのぞいて、ほとんど大部分が、トナカイを飼っているのである。[8] ザバイカルでは、ツングースのあるグループが、モンゴル化またはロシア化して、それぞれ遊牧または農耕の生活へと移行している。この方面でも、モンゴルのステッ学術篇の記載にみられるように、

馬を飼う狩猟生活型の社会にとっては、あまり好ましい立地條件をそなえていない。そのうえ、ここには、早くからブリアート・モンゴル人の、強力な遊牧社会が進出ないしは成立していたために、馬オロチョン的な狩猟の世界は、開かれえなかったのであろう。

また、満洲以北または以東の地になると、純然たる森林地帯となるために、やはり馬オロチョン的生活型の発生はさまたげられる。すなわち、馬の飼養と狩猟との結びつきは、偶然的なものではなくて、それは、まったく森林ステップという環境に即した、特殊な独自の生活型とみなすべきであろう。このことは、大興安嶺のなかでの、馬オロチョンの分布を吟味してみても、すぐ明らかとなるのである。なお、現在のかれらの分布が、大河谷ごとに小集團をなして、おたがいに分離されていることは、注意しておかねばならぬ。もともと、大河谷にそうて森林内に進出した森林ステップが、馬オロチョンにとっては、もっとも好適な生活空間なのであるが、その下流部には、いまでは、ロシア人やシナ人の農耕世界が進出してきたために、本來は下流部でおたがいにつながりあっていたかもしれないかれらの生活空間が、谷ごとに局限されてきたのであろう。このような小集團はそれぞれの河の名をとって、たとえばガンチェン、クマルチェンというように、おたがいをよびならわしているのである。

狩猟生活　オングーチャン一家による狩りの結果は、つぎのようにまとめられる。[7]

この表でみると、数量的にみて、もっとも重要なのは、ノロとハンダハンとの、二種類のシカである。とくにノロは、馬オロチョンの衣食住の大部分にわたって、自家用としてひろい用途をもっている。肉は、おもな食料のひとつとしてよろこばれ、皮は、衣服・靴・寝袋・しきもの・ユルタのおおい・容器類の材料などとなる。また、いまでは交易によって、木綿糸がもちいられるようになったが、ノロの腱は、なおりっぱなぬい糸としての

表 1.　馬オロチョンの狩猟表（オングーチャン一家）

けもの（オロチョン名）	狩りの時季	1年間の狩猟高 予想	1941—42年	用途	価格（單價）
ノロ（ギプチャン）	常時	40～50頭	30～40頭	自家用	
ハンダハン（トーケ）	とくに6月頃さかん	5～10	約 10	主として交易用 一部自家用	皮 15～50円 角 10円前後
アカシカ（コマハ）	袋角は春 毛皮は冬	不定	2～3（袋角なし）	交易用	皮 20～30円 袋角 100～200円 角 10～20円 尾 20～90円 胎兒 20～30円
ヤマネコ（ティプジョキ）	冬	不定	1～2	交易用	皮 50円前後
オオカミ（ウィツカ）	冬	不定	なし	交易用	皮 40円前後
カワウソ（ジュウキン）	常時	不定	なし	交易用	皮 50～100円又はそれ以上
イタチ（ショーリェ）	冬	不定	なし	交易用	皮 20～30円
イノシシ（トロキ）	冬	不定	なし	交易用	皮 40～50円

価値をうしなってはいない。あとで、くわしく説明されるように、ノロは、そのすみ場所として、森林ステップをえらぶ動物であって、この点では、まさに馬オロチョンと生活空間を重複させているのであるから、馬オロチョンとノロとのあいだに、切っても切れない関係があるのは、とうぜんのことである。オングーチャンは、「わたくしの狩りは、ノロをうつのが主である」と語ったし、またシロコゴロフによると、とくにノロの皮を大量につかう大興安嶺東斜面の馬オロチョンは、満洲族によって「ノロ」となづけられてさえいるという。[8] さきにわれわれのみたボルカンのぬいとりのうち、上部中央の曲線もようと、その両側の人型とがノロをあらわすことや、祭祀の場合の

犠牲にノロのもちいられることは、ノロがかれらにとって、一種の神聖さをもつにいたっていることをしめすのである。

ノロは、河の谷にそうて、夏は上流に、冬は下流にと、季節的移動をするという。これは、食物である草の量に関係しているのだろうが、おなじ草食獣である馬も、やはりおなじ要求をもっているわけだから、馬オロチョンも、やはりおなじ季節的移動をする。もちろん、それがノロの狩りに好都合なのは、いうまでもないであろう。一方、夏に上流へと移動することによって、ハンダハンの狩りがらくになる。やはりあとで説明されるように、ハンダハンは、和名をシベリアエルクシカという巨大なシカで、本來灌木原のおおい森林地帯の谷の動物であり、ガン河では、ノロが下流部を、ハンダハンが上流部をしめて、上下にすみわけているからである。ハンダハンの獵が、おもに夏にかぎられているゆえんである。

ハンダハンは、自家用としても交易用としても、むしろノロにまさっており、收獲量も安定しているが、数はわりあいにすくない。しかし、そのおおきな体は、ノロの数倍の肉を提供するし、皮は、毛皮としてもなめし皮としても利用できる。大人三人子ども三人の一家族は、ノロならば二―三日でくいつくすが、ハンダハンならば七―八日はもつのである。

アカシカ（マンシュウアカシカ）は、東満洲の森林地帯が本場だから、興安嶺にはそれほどおおくない。しかし、有名な袋角の魅力は、オロチョンたちをも強くひきつけて、熱心にアカシカ狩りに從事させる。五月から六月ごろ、生えはじめた角が、まだびろうどのような皮でおおわれているものを袋角というが、これは鹿茸などの名で、貴重な強精強壯藥としてシナ人にとうとばれる。良質のものなら、一対三〇〇円くらいに引きとられるというから、[8] ちょうど前の表にでているオングーチャンの一年分の交易用えもの全部にそうとうする收入になるわ

けだ。平均しても、一対の袋角は一〇〇円にはなる。この幸運にめぐまれるものは、このあたりでも、毎年一〇人に一人や二人はあるといわれる。およそ狩りというものは、農耕や牧畜にくらべて、その収獲がいちじるしく投機的な性格をおびているが、アカシカ狩りは、なかんずくその傾向の強いものといえよう。

しかし、狩りといえども、それによって生活をたててゆく以上、ある程度収獲が安定して、予想が立てられなくてはならぬ。たとえば表1のアカシカ以下は、予想収獲量が不定で、数がすくなく、そのかわり単價は比較的高いが、こういうものに生活の基礎をおくことは危険である。毎年ある程度確実な収獲を確保するためには、個体数のおおいものか、あるいはすくなくとも狩りのやさしいものを対象にえらばなくてはならぬ。ノロとハンダハンはその條件をみたしているが、その大部分は自家消費にあてられるので、のこりわずかのハンダハンでは、交易によって、ほかの生活必需品を買うに足りないであろう。もちろんオロチョンは、食用・毛皮用となる動物は一切ぬけめなく狩猟するのであって、ヤマネコ、オオカミ、カワウソ、イタチ、イノシシをはじめ、ハタリス、キツネ、クマなどは、馬オロチョンの経済上、わりあいに重要な位置をしめているが、その重要性においては、しょせん附随的なものであるにすぎない。それでは、馬オロチョンは、交易用の狩りの対象としては、いったい何にたよっているのであろうか。

数年まえまでは、それはリスであった[10]。表2のしめすように、リスの毛皮は、ガンチェンの交易額の九四%までをしめていたのである。しかし、いまでは、かれらは、まったくリスを狩らない。いまでもガン河の源流のあたりには、たしかにリスがすんでいるから、かれらがリス狩りをやめたのは、腑におちない。しかし、生態的にみるならば、リスはもともと典型的な森林動物であって、しかも源流地方におおくあつまっている。だから、リス狩りのためには、ユルタを最上流に移動さすのがつごうがよいが、あいにく毛皮獣の猟期である冬は、馬オロ

チョンの下流に移動している時期である。馬をかうことと狩猟との矛盾は、ここに、典型的なかたちをとってあらわれている。馬オロチョンのリス猟ということそれ自身が、すでに一種の自己矛盾であるのかもしれない。

けれども、これだけでは、かれらが最大の收入源であるリス猟をみすてた説明にはならない。最大の原因は、かれらが、そうとうな量のアワの配給をうけている点にある。馬オロチョンは、現在、特務機関の手を通じて、戰時のための特殊訓練をうけているのであった。そのため、かれらは、全部の時間を狩りについやすことができない。狩りの結果いかんにかかわらず、最低限の生活を保証されているのは、とうぜんの代償なのであろう。しかし、オロチョンの軽快な山野跋渉力を、作戰のために役だてようとする日本軍のねらいは悪くなかったにしても、その方法は、これで正しかっただろうか。われわれは、うたがいをもつ。最低限の生活の保証は、かえって、努力しだいで生活をよくしうるという、かれらの狩猟生活にたいする信條と希望とをにぶらせているのではなかろうか。オングーチャンは、雪のふかいときには、ハンダハン狩りにさえゆかなくなったと告白して、狩りに対する積極性のおとろえたことをものがたっている。われわれのみた馬オロチョンの不健康と、陰うつな空氣とは、このような精神的沈滯となまけぐせとに由來していないと、だれがいえよう。そして、軍がかれらに要求している自然民族の軽快な行動性と射撃技術とは、トラコーマがかれらの眼をむしばんでゆくように、日に日にうしなわれてゆきつつあった。

消費生活　狩猟民族としてのオロチョンの生活は、決して、他の世界から独立した、自給自足的なものではない。かれらの生産活動の基礎をなす狩りの道具そのものが、かれらの手でつくることのできない鉄砲と弾丸であ

表 2.　馬オロチョンの交易出貨表.

品名	毛皮の枚数	金額（百分率）
リス	9636枚	12526.8円 (94)
その他	156	785.0 (6)
計		13311.8 (100)

（ガン河地方1936年度集計）

って、えものとの交易によって手に入れなければならない。この意味で、かれらの消費生活の内容を検討してみることは、單に民族誌的な興味にとどまらない。

まず、かれらの食物は、本來のかたちでは、自給自足を原則としている。馬オロチョンは、ふつう一日に朝夕の二回食事をとるが、肉のある場合にはほとんど肉ばかりしか食わないという。馬の乳は利用されるが、量はいうに足りないであろう。河にすむ魚類は、かなり重要な食糧であって、袋角とりのおわり、毛皮獸の商品價値のすくない夏と、早春とに、とくに重要である。オングーチャン一家も、タイメン、レノック、シューカなどの大形の魚を、年に四〇—五〇匹消費する。ふしぎに、きわめてゆたかな鳥類は、ほとんど狩りの対象とならず、したがって食われない。植物性の食物としては、わずかに野生のエゾネギ（ルーク）をつんでいるのが観察され、このほか一般に漿果・木茸などが採集される。後者は交易用ともなるが、家計のうえには、たいした位置をしめるものではなかろう。

オロチョンの交易表を繰ってみると、基本食料であるアワ・茶・塩をはじめ、メリケン粉・米・油・燒酎・砂糖・果物・野菜などの植物性食品が、そうとうな量にのぼっている。かれらの食膳で、自給食品と購入食品とがどのくらいのわりあいをしめるかはあきらかでないが、肉があれば肉ばかりを食うということからみて、なお自給食品のほうに、すくなくとも精神的な重みのかかっているのが知られる。しかし、アワの配給は、たちまちこの比重を逆轉させてゆくであろう。

衣と住の生活においても、大部分の材料は、かれらの周囲にゆたかに見いだされる木と、狩りのえものとから、自己の力で生産される。ユルタは、木材と樹皮・よしず・獸皮からなり、一本の釘も針金も必要としない。衣服・靴・寢具・容器の類も、皮でこと足り、それらをぬう針と糸も、骨と腱（ときには馬の尾毛）とによって

ともかく自給されている。さらに、舟・馬具・桶・食器にいたるまで、ほぼ自給的にととのえることができる。銃の導入以前には、狩りの道具である弓矢も、シラカンバの木からつくられていたのである。

けれども、どうしてもかれらの手におえないものがある。それは金物である。鉱工業は、狩猟の世界では発達できなかった。余剰生産にとぼしい狩猟生活は、その移動性とあいまって、鉱工業をはぐくむ基盤とはなりえなかったのであろう。現在オロチョンによって要求される金属製品のうち、もっとも生活にとって基本的なものには、銃・弾丸およびやす（魚扠）、工作器具（小刀・おの・のこぎり・きり）、鍋類などをあげることができる。これらの金属製品は、銃と弾丸とをふくんでいる以上、かれらの交易する生活必需品のなかでも、食料品とならんで、いやそれ以上に、もっとも重要な位置をしめるものである。

交易は、かれらの狩りの手段を提供し、その食生活の不安定さをとりのぞく。かれらの生活は、もはや世界経済機構の外にあるものではない。しかも、交易は、外部の世界に眼をひらき、生活をゆたかにするため、より便利なもの、より快適なものから、嗜好品・ぜいたく品へと要求をむけさせる。馬オロチョンの交易表には、さらに進んで、テント・布切れ・洋服・シャツ・帽子・ゴム靴・瀬戸物・茶わんなどが書きこまれ、うで輪・耳かざりなどの装飾品、煙草・マッチ・阿片・狩猟用毒薬などがみいだされる。こうしてかれらの世界は、いよいよはなれがたいきずなにより、外部の世界と結びつけられてゆくのである。[11]（今西・伴・吉良）

〔註〕

① シロコゴロフ（一九四一）北方ツングースの社会構成、前出、六八ページ。

② ラティモア、後藤富男訳（一九三四）満洲に於ける蒙古民族。一六四ページ。原著は Lattimore, O. (1934) The mongols of Manchuria.

③ 滿洲事情案内所（一九三八）滿洲國の現住民族。二四ページ。

④ 上牧瀬三郎（一九四〇）ソロン族の社会。

⑤ シロコゴロフ（一九四一）前出、一三三—四、一三八ページ。

⑥ シロコゴロフ（一九四一）前出、六七、七〇、一一〇—八ページ。

⑦ ガンチェンの狩り場には、このほかクマ、キツネがすこしいるが、トラ、ウサギ、テンはまったくいない、とかれらはいっている。アカシカのオロチョン名コマハは、滿洲國治安部発行の「鄂倫春語（一九三九）」によるホマカ（牝）にあたるものであろう。なお、この辞典によれば、アカシカの総称はブウ、牡をブウウクという。價格は、年により、品質により、ひじょうな差があるので、あらましの基準をしめした。なお、これらの数字は、滿洲畜産株式会社漠河交易部の一九四一—二年の買入れ價格をもととし、そのほか、滿洲國治安部（一九三九）滿洲におけるオロチョンの研究、第一篇、滿洲國國務院興安局（一九三九）滿洲國内のオロチョンについて　および　ルカシキン（一九三九）北滿野生哺乳類誌　などによる数年前の價格に、その後の変動を考慮して算出したものもある。この表全部の收入は、およそ三〇〇円である。

⑧ シロコゴロフ（一九四一）前出、九〇ページ。

⑨ ルカシキン（一九三九）北滿野生哺乳類誌、前出、四一八ページ。

⑩ ここにいうリスとは、ホクマンリス（三四八ページ、図67）をさしている。シロコゴロフ（前出、四七ページ）も、ツングース居住の全地域を通じて、リスが最大の交易用えものであることをのべている。リスは、タイガの各地方に、ひろく、密に分布し、狩りもとくに困難ではなく、常に外部の市場から強い要求があり、したがってそれによる收入は、年により致命的な変動をうける危険がすくない（ルカシキン、前出、三二七—九ページ）。

⑪ この節の内容は、今西錦司・伴豊（一九四八）大興安嶺におけるオロチョンの生態。民族学研究一三巻一、二号、二一—三九、一四〇—一五九ページ　にもとづいて、書きあらためたものである。

樹海に入る

二一日の朝は、いまにも降りだしそうな、どんよりした空もようだった。お天氣のせいか、「月曜日」の朝のせいか、からだもなんとなくけだるかった。しかし、二九頭の馬のほうは、馬車につんであった燕麦をしこたまあてがわれて、元氣いっぱいでせいぞろいした。これで濃厚飼料とおわかれとも知らない馬どもは、馬車につまれていた山のような荷物を分配された。いよいよ、漠河隊にでむかえられるまで数十日、濃厚飼料なし補給なしの、駄馬のみにたよる行進がはじまるのだ。出先きの日本人たちが口をそろえていったように、濃厚飼料なしの長旅は、はたして無鉄砲な冒険なのだろうか。そんな向う見ずなことをして、このうちの何人がぶじにかえってくるか、と、われわれをまえにして冷笑した三河の特務機関長は、ただしかったのだろうか。しかし、こうするよりほかに、輸送問題を解決する道はないのだ。飼料とそれをはこぶ馬との堂々めぐりについて、そういう人たちはなにも知らない。われわれは、草原をこえ森林をぬけてシベリアの開拓にたずさわってきた、小柄だが頑健なコサック馬と、名にしおうコサックの馬あつかい技術とに信頼していた。それは、根拠のない信頼ではないはずだ。

馬車からおろした荷物は、文字どおり山のようにあって、はたしてつみきれるかどうか心配だったが、どうやら二九頭の脊におさまった。それをみていると、馬というものは、いくらつんでもきりがないような氣がした。このへんの馬の安全駄載量は、七五キロくらいだというが、一時的になら、ずっとよけいに積むことができる。馬夫などは、朝でるときには、これ以上は一プードもつめませんといっておきながら、ひるからになってじぶん

が疲れてくると、平氣で積荷のうしろにまたがって居眠りなどしているのだから、あきれたものだ。しかしこの一時の耐久力にまかせてつみすぎることは、けっしてよい結果をまねかない。われわれがのちに経驗したように、このあわれな動物は、死ぬまで二〇貫もの荷をはこんであるくのである。

駄馬隊は、ふたりの日直につきそわれて、滯在地のまえのあさい瀬を、左岸に渡渉していった。われわれ徒歩組は、右岸の急な崖の中腹をからんで、ほそいふみあとをたどった。足もとにみおろすガン河の本流は、おどろくばかり貧弱だった。たぶんこのころが、春の減水期の最低水位をしめしていたのであろう。急斜面がおわると、道は、はじめて本格的なカラマツの林にはいった。林のしたをとおりすぎたふるい野火のために、大木の根もとや倒木は黒くこげて、すくなからず眺めをそこねていたが、さすがにしっとりとした森林の味わいはかくべつであった。まっすぐな幹はすくすくとのびて、ひろがったこずえが、曇った空からのよわい光りをさえぎっていた。うすぐらい地上には、みじかいコケモモが一めんにしきつめ、大灌木はまったく欠けているので、林のなかは、まるで公園のように整然としていた。ひさしぶりに、しめり氣をおびた空氣を胸いっぱいにすいこむと、さわやかな松やにの香りがただよってきた。ドラガチェンカから六日の行程で、とうとうシベリアにつながる樹海の一角にたどりついたのだ。

やがて、ふみあとは、また河谷原にかえってきたが、そこには、もういたるところに、カラマツやシラカンバの林がちらばっていた。紫陽道人のために尾根の一角にのぼってみると、それでも谷の三分の二以上は草原で、なかばは黒く野火に燒かれていた。いただきに近い急斜面には、きまって、角ばった石くれがガラガラとつみかさなって露出し、平地にはたえてみないスナヂジャコウソウやツメレンゲが、むらがって生えていた。尾根の風かげには、エゾノムラサキツツジのつぼみもふくらんでいた。風にのって、どこからともなくきこえてくる呼び

どえにレンズをむけてみると、二度本流をわたってふたたび右岸にかえってきた駄馬隊が、いつのまにか足もとの焼野に近づいてきているのであった。丘をかけおりて隊列に合すると、もう晝めしの時間になった。おりから西の強風にあふられて、空はみるみる晴れあがった。つめたい風を、とある支流の河原にさけて、あたたかい紅茶と焼餅(シャーピン)との晝めしをくった。

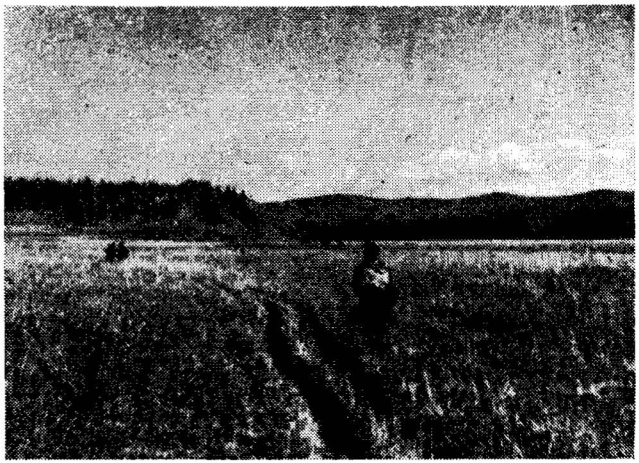

図 17. イワノガリヤスの枯れ野．まんなかに，ソルノピョーク地形の，はだかの急斜面がみえる．

西風のなごりで、午後も風がさわいだ。イワノガリヤスの枯れ野のなかを、ふるいわだちのあとが二すじ、どこまでもつづいていた。それがわれわれの道である。わだちがガン河にぶつかって絶えるところに、カラマツの木立ちがあって、そのなかにロシア人の丸太小屋が二軒、朽ちかかって立っていた。伐木の小屋か狩り小屋か、いずれにせよ、さっきのわだちはこの小屋に関係があったものとみえて、ここで切れてしまった。ゆかいなことに、おなじ林のべつの端には、オロチョンの物おきも立っていた（図版一三ページ）。三メートルあまりの高さの足場のうえにゆかをつくり、カラマツの皮をうまくクルリとはいで、三角形に屋根をふいたものである。ゆかを高くしたのは、野獣の害をふせぐためであろう。はしごをのぼってのぞいてみると、いろいろな容器類や、毛皮のふいご、馬乳酒を蒸溜する筒などがでてきた。容器のなかには、ほし肉や腱糸などがたくわえられて

いた。こういう倉庫のある場所は、オロチョンがかならず移動の途中に立ちよるところである。オロチョンとロシア人とが、おなじ林に住んでいたときがあったとしたら、かれらはどういう近所づきあいをしていたものだろうか。

第七キャンプは、はじめてガン河の小石河原のうえにもうけられた。テントのまえに、おおきなタイメンがひきずりあげられて、総がかりで石でたたきころすというにぎやかさである。そうしないと糸を切って逃げてしまうからだ。枕もとに瀬の音をきく、内地の山をおもいださせる夜であった。

図 18.　馬オロチョンのものおきからでてきた器具類．白樺皮を腱糸でとじつけた容器類と，毛皮製のふいご．

雪の峡谷

ここの地形は、ちょうど前日の滞在地とおなじような関係になっていて、流れが右岸の山すそにせまっているので、あくる朝は、まず河をわたらねばならなかった。ガン河の水は、三河いらいうす茶色に色づいていたが、この朝には一夜のうちに濁りをまし、いつのまにか水かさもふえて、テントのすそにせまってきていた。河をわたるには、まず空馬に隊員がのって先にわたり、最後に荷をつんだ馬の尻に馬夫がまたがって渡りおえるのだから往復に時間がかかる。水は、やっと馬のひざにとどくくらいだったが、渡りおえるには、小一時間を要した。

まもなく、ショボショボと小雨がふりだした。濕地の野地坊主がぬれて、駄馬の足どりはおくれがちになった。このあたりから、濕地の様子もかわってきた。これまでの濕地は、沖積原のなかの凹地だけに分布しているにすぎなかった。きょうあたりでくわす濕地は、かわいた草原の部分とたいして水準のちがわない土地にも、ひろくひろがっているようになった。土地がいっそう多濕になってきたのである。のちになって、上流地方の濕地につきものであることのわかったミズゴケや、背のひくい灌木性のカンバ類——ただしくいえば、コウアンヒメオノオレとマメカンバとの二種類だが（一八九ページ）、かんたんのためヒメカンバと総称することにしておこう——も、この日の午前にはじめてあらわれてきた。

沖積原のなかにポックリとひとつ立った玄武岩の三角山にのぼってみると、上流の眺めは、これまでにない様相をあらわしていた。きのうきょう、ガン河の谷には、両岸からかわるがわる急な崖がせまって、しだいに山地の河らしくなってきたが、ここから眺めると、数キロの上流ではさらに両岸の山がせまって、まったく谷をとざしているようにみえた。このガン河の峡谷部を境として、谷の性質は上下でいちじるしく変化する。さきにいった濕地の狀態の変化もそのひとつであるが、谷の地形や地表の形態にも、はっきりしたちがいがみとめられるのである。もちろん、そういうことのわかったのは、のちになってのことで、そのときはただ、この峡谷部の狀態を、ものめずらしくスケッチしたにすぎなかった。紫陽道人の結果は、この峡谷部をこえたところで右岸からそそぐ大支流ヤンギール川を、この夜のキャンプ地ときめた。

小山のふもとの濕地では、駄馬が難行をきわめた。こういう場合には、馬夫の馬あつかいの上手下手が、はっきりとあらわれた。ブレーキになるのは、いつも例のグラモースキーだった。一人の馬夫は、平均四—五頭の馬をじゅずつなぎにして引いていたが、グラモースキーの馬は数もおおく、おまけに弱い牝馬ぞろいで、すぐ故障

をおこした。馬あつかいの上手な、馬夫頭のバダエフや、フォーミン・イワンというような連中なら、口ぶえで馬の足なみをそろえて、かるくきりぬけてゆくところを、かれはぐいぐいひっぱるばかりなので、すぐ馬がつまずいた。一頭が野地坊主のなかにひざをついてしまうと、たちまちそのさわぎが前後につたわって、ける、はねる、荷物をずりおとす、けっきょく総だおれになってしまうのである。うしろの馬のたづなは、前の馬の脚や、ひどいのはしっぽに結びつけてあるのだから、馬のあばれるのにむりはないが、先をいそぐわれわれには、これほど腹立たしいことはない。降りしきる雨のなかで待たされるわれわれからはむろんのこと、馬夫なかまからもあらゆる悪口雑言がグラモースキーにあびせられた。およそどこの國のことばでも、ののしりことばほどおぼえやすいものはない。

　畫めしは、雨のなかでごうせいな焚火をしてすませた。そこは峡谷の入り口で、食事がすむときた河をわたらねばならなかった。河辺林をぬけて河べりにでてみるとおどろいた。水は、わずかのあいだに濃い茶いろにごって、おびただしく増水しているようにおもわれた。たぶん上流では、前夜から雨が降っていたのだろう。河はばは一〇〇メートルたらずであろうが、一メートルばかりのひくい切り岸をなした両岸のあいだに、濁水は満々とあふれて、見えるかぎりには一つの洲もなく、馬をのりいれるのが不氣味であった。

　わたりおえてしばらく歩いたころ、雨は雪にかわった。しだいに雪のふりしきってくるなかを、隊列は、峡谷のいちばんせまった部分の山ごえにかかった。これまでの山ごえのような、なだらかな斜面ではない。ぎっしりとカラマツ林におおわれた、急な山腹をからんでゆくのだ。雪のなかから、峡谷の壁をつくる岩石の露頭が顔をだしている。玢岩であった。この附近の基盤である花崗岩類をつらぬく玢岩の大岩脈が、ガン河をよこぎるところに、この峡谷部ができたのであろう。この数日來ずっと河谷にそってみられた玄武岩は、いちおうここでとぎ

れている。地形から判断すると、岩脈は北東から南西にはしっているらしい。雪にぬれた坂道には、石ころや倒木もおおかった。ひくくたれた雲と雪とで、見とおしはまったくきかない。倒木や灌木の枝は、みるみる白くなってゆく。森林は、たちまち冬のすがたにかえり、イソツツジの下生えも、冬ごもりのシャクナゲのように、きびしく葉を巻いて垂れてしまった。きょうの泊り場ヤンギール川までは、まだとおい。不安な前途をひかえて緊張したわれわれの氣もちは、すぐ馬にもつたわった。馬どもは、すべりやすい道を一足一足愼重に、たいした事故もなく、この山ごえを切りぬけてくれた。

坂をおりたところは、せまい濕地だった。ここで、ガイブシャンは、ゆくての山ぎわに一頭のノロをみつけた。かれの指さすところからは、わずか数百メートルしかはなれていない。隊列は、濕地のなかに立ちどまり、鳴りをひそめて、しのびよってゆくガイブシャンの姿をみつめた。かなしいことに、われわれ文明人の退化した眼には、いくら眼をこらしても、ノロの姿はみえなかった。手もちぶさたのままに、ずぶぬれになってこごえた足を野地坊主のうえで足ぶみしながら、われわれは想像をたくましくして、めいめいかってな野次をとばせていた。ついに銃声がひびいて、ガイブシャンの右手はあがったが、とうとうノロらしいものは見えなかった。しかしかれは、数十歩の距離で、みごとにノロの肩を射抜いていた。

ガイブシャンをノロのあと始末にのこして、われわれはふたたび歩きはじめ、やがて第二の崖ぎわにさしかかった。ガン河は、ここではいくつもの分流にわかれて、崖ぎわをあらっていた。眞白に雪によそおわれた河原のなかを、あさい分流の水が、吸いこまれるような黑さにサラサラと流れていた。流れを渡渉して中洲にわたると、迷路のようなヤナギの茂みのなかから、いくつもいくつも分流が流れだしてきた。本流がどこにあるのかもわからない。河辺林は、じかに山腹のカラマツ林につらなって、見あげるドロのこずえには、ひくく雲がたれこ

めていた。左手には、急な山腹をおおってしずまりかえったカラマツの林、右手には、奥ゆきのしれないドロの林、そのなかにはさまって、いつかわたくしは、深い深い峡谷の底をあるいているような氣もちになっていた。

図 19. 峡谷部の雪. ドロの大木が雪にうつくしくかざられている.

峡谷といっても、おそらく谷の幅は、最小一キロくらいはあったかもしれぬ。しかしあかるくひらけた谷は、いまのわれわれの氣分からはとおいものであった。雪は、ながめといっしょに、ひとびとの心をもしろくぬりかえた。いよいよガン河の上流、興安嶺の中心部にふみこもうという日に雪にぬれて深い峡谷の底をゆくという場面は、わるくはないではないか。ガイブシャンにかわって先頭にたったグラモースキーの、要領のわるい案内のおかげで、切れるようなつめたさの水のなかを、なんどもむだな渡渉をくりかえしたが、どなりつける氣にはならなかった。われわれの頭からは、ゆくさきの不安も、ずぶぬれの着物も、なにもかも洗いさられて、ただわれわれをここまでみちびいてきた執拗な漂泊心だけが、ゆたかに心をみたしていた。

しかし、馬夫たちにとってみれば、ずぶぬれの姿でちかづいた宿りをおもえば、われわれのようにのんきではいられなかったのだろう。崖ぎわを切りぬけて、ヤンギール川出合のひろい平地にでてきても、依然として水づかりの濕地がつづくのをみると、とうとう悲鳴をあげるも

のもでてきた。グラモースキーの話では、この近くの林のなかに、魚釣りにきたときとまった小屋があるというので、「小屋(バラック)！　バラック！」となさけない声をあげて、うろうろするものもあった。むりもない。かれらは、毛皮の寝袋などはもっていないのだ。

こういうとき、たよりになるのは、馬夫頭のバダエフだった。バダエフは、グラモースキーとおなじ四五歳、中肉中脊のしまった体つきで、眼のするどい、みるからに沈着そうな人がらだったが、さすがに三河コサックの総アタマン(スタニーツ)から、とくに人夫頭として指名されただけあって、見かけにたがわぬ人物のようであった。眼も髪も黒くて東洋人くさく、まくりあげた腕などはわりあいに白くて細かったが、その腕には女すがたのいれずみがあり、馬あつかいの抜群に上手なところが、いかにも一くせありげであった。われわれのいいつけたしごとが、どんなにむりなものであっても、やむをえないとみてとれば、いつも、「承知(ハラショウ)しました」とふたつ返事でひきうけてくれるのがたのもしかった。いまの場合も、隊長のさしずに應じて、バダエフが二こと三こというと、馬夫たちはまただまって歩きはじめた。そして、この日からのちは、どんなにわるい日がきても、ついにかれらから泣きごとを聞かなかったということは、かれらコサックの後裔の名誉のために、つけくわえておかねばならぬ。食糧は日々にとぼしくなり、いつ里にかえれるか見当もつかないような日にも、馬の尻にうしろむきにまたがって、ハーモニカを吹いている姿の不敵さと、シナ人にまさるともおとらぬ生活力の強さとは、われわれを驚嘆させるに足るものであった。

カラマツ林をまじえた濕地がつきて、ヤンギール川に沿うた、ひろびろとした雪野原がひらけた。いつのまにか空は晴れあがって、さざなみをうった雪の面を、午後七時のうす日がばら色にそめた。ヤンギール上流のとおい山々は、雪がおおかったのか、まっ白にかがやいて美しかった。あさいヤンギールの流れを渡渉して、流れに

のぞんだ台地のうえにキャンプ地をえらんだのは、もう八時まえであった。テントのしたは、雪だるまをころがして雪かきをした。そのうえにずっしりと厚くヤナギの枝をしきこんで、毛皮の寝袋をのべると、寝じたくはできた。奥山をうすあかく染めた夕陽がおちると、低氣圧のあとの冷えこみがきた。くみおきの水には、たちまちうす氷がはり、食器もすぐに凍りついた。

あくる日は疲れ休みときまって、ゆっくり朝寝した。ひるまえにおきてみると、ゆうべの雪は、かわいた大氣のなかにすっかり消えてしまって、なごりのつめたい西北風がテントをふくらませていた。枯れ野は、三河を出た日とかわりなく、黄いろく風にゆれていた。われわれは、去りゆく冬をおうて、北へ北へと旅してきた。京都をでるとき、東山には葉櫻の色があざやかだった。長春では、並木のドロの新緑が春をつげていた。浜洲線の線路ぞいには、オキナグサがみだれ咲いていた。三河の野も、オキナグサで紫にそまっていた。そして、三河をでてもう一〇日たったというのに、あいかわらず林のはずれには、オキナグサが満開だった。われわれは、すっかりオキナグサに飽きてしまった。それどころか、きのうの雪は、ふたたびわれわれを冬の世界においもどしてしまったようだ。

「おはよう。春はまだこんのかね。」

「おはよう。どうもまだらしいな。」

これがわれわれの朝のあいさつにもなった。焚火にあたっていても、北風が寒くて外とうのえりを立てねばならなかった。調査や魚つりにでかけない居のこり組は、いつまでも焚火とノロの串焼きとに執着して、午後をおくった。夕方には、またまたノロ二頭と、魚数尾とがもちこまれた。（以上二節　吉良）

濕地と永久凍土

ガン河の峡谷部をとおりぬけて、ヤンギール川の合流点までくると、疎林をまじえたひろい河谷原が、また復活してきた。しかし、よく注意してみると、地形はあきらかに変化してきていた。両岸の山々は、いっそうなだらかになり、谷底との比高はちいさくなった。もっともめだつのは、両がわの丘と谷の平面とのつぎめが、これまでのように不連続でなく、なだらかなカーブをえがいて、いつのまにか谷底から山腹へとうつりかわっていることであった。もっとも、森林のほうは、山腹だけをおおっており、カラマツの密林が、谷に面したところをズバリと切りおとされたように、断面をみせてつらなっていた。ときには、その森林のふちまで、かなりの傾斜面を、野地坊主の濕地がはいあがっていた。斜面に水をたたえた濕地のあるのは、ふしぎにきこえるが、これはほんとうである。これは、きっと地下に凍結面があるからであろう。

ここで、野地坊主についての観察を、すこしくわしくのべておこう。野地（ヤチ）（または谷地）坊主というのは、濕地に生えたスゲ、ワタスゲの株のつくる、円筒形の隆起に、たぶん北海道の人々がつけた名まえである。満洲にいるシナ人は「塔頭」といい、ロシア人はコチカ（kochka）とよんでいる。平均の大きさは、直径二五センチ、高さ四〇センチくらいで、スゲの根がなかば泥炭状となって密にかたまりあったものからできている。夏には、その頂きから葉が叢生して、ほぼ一定の面積にひろがるので、野地坊主の間隔は、おのずからほぼ一定となり、一めんに濕地のなかに密生して、そのあいだに水をたたえている。冬には、写眞のように、不氣味な頭をならべているが、夏には葉がしげりあって、ちょっと見には、まるでなめらかな草原のようにみえる。しかし、一

足ふみこめば、たちまちすねを沒し、発達のよいものでは、高さ五〇センチ以上にも達するから、水はももにおよんで、容易にとおりぬけることができない。（図99）

図 20. 流れのあとの凹地をうずめた野地坊主.
ガン河中流にてうつす.

この地方で野地坊主をつくっているのは、ヒラギシスゲを主とし、シュミットスゲ、シラカワスゲなどをまじえた数種のスゲ類と、ワタスゲとであった。[1] これらの植物は、みな北方的な植物で、野地坊主の濕地そのものも、北方的なものと考えられる。温帯から南でも、高山には、やはり野地坊主がみられ、熱帯でさえ高山帯になると、スゲ属（*Carex*）やコメススキ属（*Deschampsia*）の野地坊主濕地の報告がある。また、スゲやイ（*Juncus*）の類は、北半球北部の濕地で、いたるところ野地坊主をつくっている。しかし、このような、直径より高さのほうがずっと高いような野地坊主と、それが廣大な面積をしめる濕地とは、極東地方のタイガおよびツンドラ地帯の特性であって、世界のほかの地方にはみられない。おなじ種類のスゲであっても野地坊主をつくる能力は、地方によってちがい、たとえば *Carex Soczavaena* は、チュクチ半島北部では野地坊主をつくらないのに、もっと南方では、ワタスゲとおなじように、さかんに野地坊主をつくるといわれているのは、興味がふかい。それに関係する環境條件がなんである

かはわからないが、北部大興安嶺は、なかんずくその條件をみたしているらしく、ビストラヤの流域などでは、数キロの幅のある谷を、まったくうずめつくしている場所がめずらしくない。

ガン河では、中流部以上におおく、下流部の森林ステップ地帯には、わずかしかみられないことは、すでに説明しておいた。すなわち、峡谷部から下流では、流れに沿ったせまい帯状の地域とか、支流の河床、ふるい流路、三日月沼のまわりなど、沖積原のなかの一番ひくい場所にだけ、局部的に分布している。この場合、濕地狀態をもたせているのは、おもに増水期の氾濫水であろう。沼や流れのふちの汀線にそうて、帯狀に野地坊主ができているのをみると、その範囲は、おおむね乾燥期、雨期を通じて水面の上下する範囲に一致しているようであった。スゲやワタスゲは、一定以上の濕度をたもつ土地でないと生えることはできないし、さりとてたえず水面下にある土地には、発芽定着することはむずかしいだろうから、これはとうぜんの現象であろう。そして、流れのふちに、図21のように、完成から半成までのいろいろな段階の野地坊主がならんでいる点からみて、野地坊主ができるためには、水面の上下にともなう水の浸蝕作用が必要なものとおもわれる。

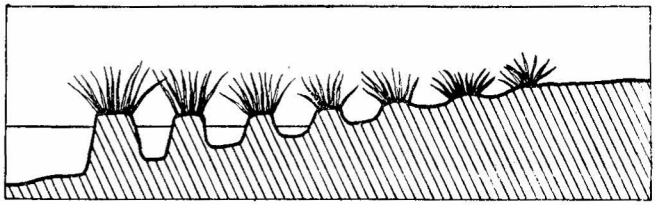

図 21. 流れのふちの野地坊主.

もっとも、浸蝕だけで野地坊主ができるものとは考えられない。スゲ類は、イネなどのように、根ぎわでの茎の分岐がさかんで、その結果できた多数の茎が密生するので、成長点は年々上方に移動し、しかも枯れた茎や根は、濕地狀態のもとでは分解しないで、泥炭となって集積するから、株は全体として上昇してゆくであろう。この株自体の上昇と、水による浸蝕とがあいまって、あのお

どろくべき高さの野地坊主ができるのであろう。[2]

大興安嶺の東がわにあるノンニの上流の森林ステップ地帯では、やはり流れにそうて野地坊主帯があり、その両側に、イワノガリヤス帯と草原帯とが、順次にならんでいたという。[3] これは、まえにのべたガン河下流の沖積原の草地を占めている三大要素の、土壌水分にたいする要求を、はっきりあらわしている。草原は、ほとんど水のこない乾いた土地に、イワノガリヤス原は、増水期にのみ水のつく半湿地に、野地坊主は、つねに水のあるほんとうの湿地に、それぞれ成立しているわけである。大興安嶺の谷で、この三つが、この例のようにきれいに帯状にならばないで、不規則に谷のあちらこちらに斑点状に散在しているのは、ひじょうに平坦な地形がしからしめているのであろう。

したがって、野地坊主地帯に接して、イワノガリヤスが密生しているところは、ひじょうにおおい。こういう場所では、じゅうぶん水面上にのびあがった野地坊主のあたまに、二次的にイワノガリヤスが侵入して、すっかりスゲをおおいかくし、まるでイワノガリヤスが野地坊主をつくったようにみえる。しかし、そうではないしょうこに、早春にイワノガリヤスの枯れ茎をかきのけてみると、ちゃんとスゲの花が咲いているのがみられた（図版一〇ページ）。前者の茎は、後者のように密接して増殖することはなく、したがって野地坊主をつくる能力のないことはあきらかである。[4]

ところで、峡谷部から上流のガン河の谷では、野地坊主湿地のしめる面積の比率は、にわかに増大する。これまでは、河そのものとあまり高低差のない、低平地にかぎられていたのが、ずっと高い段丘面上にもあらわれて、平坦面いっぱいをおおうようになり、すでに注意しておいたように、しばしばゆるやかなスロープにも発達しはじめる。こうなると、湿地状態をたもたせている水の給源は、降水以外には考えられないのであるが、それ

だけでは説明が困難で、どうしても排水をわるくしている條件を考えなくてはならない。もちろん雨量もふえ、また溫度がひくくなるにつれて、蒸発によりうしなわれる水の量もすくなくなっているだろうが、土地の透水性がとぼしくなっているのではないか、という疑いが、どうしてもおこってくるのである。ここで、永久凍土層の存在が、われわれの議論のまととなってきた。

地中のある深さから以下が、夏にも0度以上にのぼることがなく、一年を通じて凍結の狀態をたもつ永久凍土層が、北部大興安嶺に存在することは、はじめから予想されていた。学術篇でくわしく論議されているように、この現象は、全世界でもとくにエニセイ河から東の東シベリア地方にいちじるしい。東シベリア地方は、冬には有名な大陸高氣圧の安定した勢力圏となり、おそろしい低溫と、晴れわたった雪のすくないしずかな天候とに支配される。こういう條件のもとで、寒さは、はだかに近い地表から、地中ふかくへとしみこみ、それを凍結させる。もっとも、永久凍土が、現在の東シベリアの氣候のもとでできたものか、過去の地質時代のより低溫な氣候のもとでできたものかについては、学者の意見が一致していない。しかしいずれにせよ、この東シベリア的氣候が、永久凍土を保存するに適していることはうたがいない。そしてその分布の南の限界は、一月の平均氣溫マイナス二五ないし三〇度の等溫線のあたりにあることが知られている。北部大興安嶺は、完全にマイナス三〇度以下にあるから、とうぜん永久凍土層がみられてもよい。事実、北部大興安嶺をとりまく各地、たとえばホロンバイルにあるジャライノールの炭田、浜洲線の峠を東にこえたブヘト(博克図)、ドラガチェンカ、アムール沿岸の各地の金鉱などから、ぞくぞく永久凍土層が発見されていた。

ただ、これらの南限にちかい永久凍土層の分布地では、凍土がいちめんにみられるのではなく、島狀に散在しているのがふつうである。だから、大興安嶺でも、いったいどの程度の廣範囲に分布しているかが、興味の中心

であった。しかし、ヤンギール川より上流の谷にみられる濕地のひろい分布は、われわれに、すでにいたるところ永久凍土層がひろがっているのではないか、という疑いをいだかせるにじゅうぶんであった。とくに、これまでの北満各地の例では、島状の永久凍土は、濕地の泥炭層の下にかぎって発見されることがおおかった。これによっても、濕地が永久凍土層のうえにできやすく、また濕地狀態によって凍土が保存されやすいことはあきらかなのである。[15]

もっとも、地面の凍結が、いちばん深くまでとけるのは秋だから、直接永久凍土層の存在をたしかめることは、この季節ではできなかった。しかし、濕地の泥のなかに棒をつきさしてみると、カチンと固いものにぶつかり、北斜面のカラマツ林の土は、わずか一―二センチしかとけていなかったのである。この狀態からみて、あるいはカラマツ林そのものが、やはり永久凍土層のうえに生えていたのかもしれない。これは、行程のおわりごろある程度確認された。

じっさい、りっぱな森林のしげっている下の土が、一年中凍結してとけることがないということは、なかなか信じにくい。シベリアに永久凍土があるということは、すでに一七世紀に、そのころの開拓の最前線にあたっていたヤクーツクから、毛皮商人によってモスクワに報告されていたが、そのころの人は、これを信じようとはしなかったのであった。それが事実であることが一般にみとめられ、学者の興味をひくようになったのは、一九世紀のはじめにおこなわれた、有名なミッデンドルフのシベリア探検以後といわれる。しかし、開拓がすすむにつれて、永久凍土の存在によってひきおこされる奇妙な現象は、しだいに明るみにでるようになり、なによりも切実な実際問題として、研究の必要を痛感させた。シベリアの自然は、地文・水文をとわず、多少とも永久凍土の影響をうけていないものはない。そして、人工のくわわらない処女地において、微妙なバランスをたもって存続

してきた凍土は、人工の作用によって、おもいがけない破綻をひきおこす。シベリア鉄道の建設のとき、土木技術者たちは、これによってさんざんになやまされた。

正確にいうと、永久凍土というのは、地下ある程度の深さにある地層が、二年以上数万年の長さにわたって、0度ないしマイナスの溫度を保っているものをいう。[6] だから、べつに土壤でなく基盤岩であってもよく、また氷をふくんだり、かたく凍りついていなくともよいわけだが、眼にふれやすい、いろいろな奇妙な現象をおこすのは、やはり凍りついた土壤の場合である。シベリア鉄道の技師たちは、まずその硬さにこまらせられ、そのうえ、せっかく丈夫な地盤のうえに敷設したとおもった線路が、しだいに沈下してゆくのにおどろかされた。泥炭層の下に凍土層が保存されやすいことからわかるように、一般に植物の被覆は、断熱材料となっているので、これをはがすと、大氣と地下とのあいだの熱のやりとりのバランスがやぶれて、夏にとける深さが深くなる。あたらしくとけた土の層は、ふくんでいた氷の体積だけうすくなって、地盤が沈下するのである。おなじような原因で、せっかくたてた家がかたむくこともある。レナ河の中流地方では、伐採そのほかのために地上の被覆がなくなると、土地がしずみ、とけた水のために、沼ができたりする。

また、こういうこともある。冬になると、夏のあいだとけていた土地の表層部は、また凍りはじめて、しだいに表面から深部におよんでゆく。この、毎年凍ったりとけたりをくりかえす表層部を、「活動層」というが、この場合、活動層の下部は、下にある永久凍土層とうえから進んでくる凍結とにはさまれて、おおきな圧力をうける。もし、地表のどこかに弱い場所があれば、水をふくんで半流動性になった土が、そこをつきやぶって地上に噴出する。濕地などでは、この地下噴出の泥土で、一めんに小丘のできることがある。ところで、凍土地帶に家をたてると、その下の地面は、家の保護をうけて、大なり小なり凍結がおくれ、うすい。そこをねらって噴出し

た泥水が、せっかくの家を氷漬けにしてしまった例は、めずらしくない。ひどいのになると、庭に伏せておいたおけの下から噴出して、家がだいなしになったという話さえつたえられているのである。

われわれの荷物にはいっていた数十冊の本のなかには、「永久凍土層の研究」[6]という一冊もまじっていた。それをたよりに、われわれは、まわりの自然現象のなかから、永久凍土の存在に関係のありそうなものを、ひろいだそうとつとめた。

そのなかでも、めだった收穫だったのは、ドラガチェンカに着くまえから注意をひいていた、南北両斜面の非対称地形と永久凍土との関係であった。ひとつの丘の南北両斜面、あるいはひとつの谷の両がわの斜面が、しばしば、ひじょうな傾斜のちがいをあらわすことは、森林地帯にはいってからも、たえず観察されていた。南ないし南西にむいた斜面は、つねにいちじるしく急傾斜であり、北にむいた斜面は、格段にゆるやかである。河川浸蝕の正常な型からいえば、どちらの岸にたいする浸蝕もほぼひとしく、対称でなければならない。これは、どういう原因によるものだろうか。

おなじような小地形は、アルグン河を西にへだてたザバイカルの山地でも、ふつうにみられるらしい。そしてソ連の学者たちは、これを、永久凍土の影響に帰している。[7] 北斜面は、夏になっても、地表ちかくまで凍結しているため、水の浸蝕力にたいして強く抵抗するが、南斜面は、じゅうぶんに太陽熱を吸收して深くまでとけ、はげしく浸蝕される。その結果が、傾斜のちがいとしてあらわれるというのである。ハイラルと三河とのあいだのステップ地帯には、いまでは、連続的な永久凍土層はみられないらしいが、そこでも丘の斜面におなじような現象がみられるのは、わりあいあたらしい過去の地質時代に、現在よりも廣い範囲に凍土のひろがっていた時代があって、その結果が今日にまでのこっているのだと考えれば、一應の解釈はつくであろう。シベリアでは、この

非対称地形の急斜面を、ソルノピョーク（solnopyok）とよんでいる。南にむいた、日あたりのよい丘、という意味である。（吉良・川喜田・藤田）

〔註〕

① スゲの類は、現地での種類の区別がむずかしかったので、どの種類が野地坊主としておおいのか、よくわかっていない。南カラフトでは、ヒラギシスゲのおおいことが報告され、ヤチボウズの和名をこの種類にたいしてあてることさえある。一般にソ連東部の湿地では、ヌマクロボスゲ（*Carex Meriana*）、カブスゲ（*C. caespitosa*）、タイリクムジナスゲ（*C. filiformis*）、ヒラギシスゲなどがおおいという（館脇操（一九四五）東亜植物誌・北方篇。積善館、六二ページ）。また、アムール中流のビロビジャン地方南部（北緯四八度前後）では、アムールの河岸段丘上に、シラカワスゲの野地坊主湿地が、広大な面積をしめているという（Katz, N. (1932) Zur Kenntnis der Moore des fernen Ostens. Ber. Deutsch. Bot. Ges. **50**: 237–288.）浜洲線附近および中部大興安嶺では、シュミットスゲが主であるという報告もある（Plaetschke (1937) op. cit. S. 76）。大興安嶺では、ワタスゲの野地坊主もまた、ひじょうにおおい。

② オックスフォード附近の、泥炭採掘あとの凹地に野地坊主をつくるヒゲクサの一種について報告しているドーキンスも、おなじような結論に達している（Dawkins, C. J. (1939) Tussock formation by *Schoenus nigricans*: the action of fire and water erosion. Journ. of Ecology **27**: 78–88）。

③ 中尾佐助氏による（中尾佐助（一九三九）小興安嶺の植物。京都探検地理学会第七回例会講演、昭和一四年一二月）。

④ ロシアの学者たちは、ザバイカルのオレクマ河地方やアムール地方で、主としてイワノガリヤスが野地坊主をつくっていると述べているが、われわれの経験によれば、はなはだうたがわしい（Plaetschke (1937) op. cit. S. 76）。

⑤ カッツ（一九三二、前出）は、ビロビジャン地方で、冬の凍結が地下一・八メートルにおよび、七月後半では、まだ湿地の下がいたるところ凍結しており、九月になっても、なお凍結が散在していることを報告している。そして、この夏の地下凍結と、夏に集中する雨とが、湿地の大面積にわたって発達する原因だといっている。ただし、ビロビジャン地方には、永久凍土はみとめられていないようである。

⑥ エム・イ・スームギン、満鉄経済調査会訳（一九三五）永久凍土層の研究。露文翻訳ソ連極東及外蒙調査資料第一四篇、大連。原著は、一九三四年モスクワ、露文。

⑦ スームギン（一九三五）前出、七二ページ。

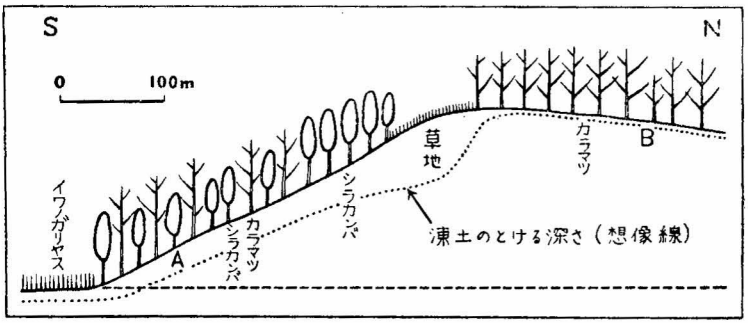

図 22.　斜面の向きによる森林の構造のちがい．垂直距離は，てきとうに誇張されている．

森林の構造 (1)

ソルノピョークがあらわしているような、斜面の向きによる環境のちがいは、そのうえに生えている森林にも、影響をおよぼしているはずである。ヤンギール合流点の近くで観察した実例について、説明してみよう。ヤンギール合流点の第八キャンプの北一キロくらいのところで、河谷原から山腹にうつるところに、図のような森林の構造がみられた。

平地のイワノガリヤスの草原は、斜面にかかると、とつぜん森林とかわる。ゆるく南に向って傾斜した斜面の下部は、カラマツ・シラカンバの混合林でおおわれているが、斜面の上端ちかくなると、シラカンバばかりの疎林があらわれ、頂上のすぐ南がわには、わずかの面積の草地がある。頂上をこえた北がわは、北に向ってかすかにかたむいた斜面であるが、そこには、ほとんどカラマツばかりの純林がみられた。AおよびBのふたつの地点で、二〇メートル平方のクォドラート（わく）をおいてかぞえた結果は、表3のようになる。すなわち、Aでは、カラマツの下にシラカンバが生えて、樹冠は二層になり、樹木の密度はちいさく、そのかわり一本々々の木の発育はよい。これにくらべて、Bでは、樹冠はカラマツばかりの一層で、密度たかく、木の発育はいちじるしくわるく、背もひ

くい。下生えもまた、まったくちがった種類からできているのである。

おなじAとBとで、土を掘ってみると、表4のような結果となる。すなわち、Aでは、粗腐植ないし落葉の層（A_0層）がうすく、腐植をふくんだ黒色の表土層（A_1層）がわりあいによく発達しているが、Bでは逆に、A_0が厚くA_1はごくうすい。どちらの場合も、A_2層は多少漂白されて淡色となっており、それ以下は凍結していて、掘り下げることができなかったが、凍結面の深さはAのほうが浅かった。なお、Aから二〇〇メートルくらいの距離にある斜面の上部のシラカンバ疎林内では、四〇センチ掘りさげても凍結面はあらわれず、ただ一五センチ以下では土がよくしめっていて、最近にとけたものであろうと思われた。

この早春の凍結面の深さは、おそらく、植物の成長のもっともさかんな、夏のあいだの凍結面の深さにほぼ併行しているであろう。そう考えると、夏の状態でも、凍結面は、図にかきこんでおいたように、北斜面よりも南斜面に深く、しかも南斜面では斜面の上部ほど深いことになる。もしわれわれの推定どおり、この地方にひろく永久凍土が存在するとすれば、これはそのまま活動層の深さの状態をもあらわす

表 3. 斜面の向きによる森林構造のちがい (20×20m クォドラート).

		全数	高さ10m以上の個体数	平均の高さ	最大の直径	平均の直径	下生え (1×1mクオドラート)
南向き斜面 A	カラマツ	13	11	15m	70cm	40cm	ベニバナイチヤクソウ 50%
	シラカンバ	19	13	10	33	20	スゲの一種 50%
北向き斜面 B	カラマツ	41	36	13	28	20	ホソバイソツツジ オオバコケモモ 全面
	シラカンバ	0	0	若木のみ 6			ベニバナイチヤクソウ

(1942. 5. 23. ガン河・ヤンギール川合流点附近)

表 4.　斜面の向きによる土壌断面のちがい（表 3 とおなじ場所）.

層位	南向き斜面（A）	北向き斜面（B）
A_0	4 cm，カラマツそのほかの落葉.	7 cm，落葉およびコケモモ，イソツツジの根.
A_1	6 cm，黒色.	1 cm，黒褐色.
A_2	灰褐色，凍結，氷粒をふくむ.	灰褐色，凍結，氷粒をふくむ.

ことになる。南斜面の上部ほど深くまでとけるのは、斜面の角度にもよるのだろうが、上部ほど水はけがよく土がかわきやすいことに関係しているのであろう。表4にみられるように、土壌学的にいって、AではBよりも土壌断面の発達がよく、より成熟した土壌がみられる。土壌断面は、土の排水がよく土のなかでの水の上下運動のさかんであるほど、よく発達する。この條件は、凍結面の低いほどみたされるわけで、表4の内容は、この考えをよく支持している。北向き斜面にA_0層が発達しているのは、小灌木の根がはびこっているのと、低温のために落葉の分解がおそいのとによるものであろう。

このような、凍土層の季節的変化にもとづく環境の変化に、森林の構成種であるカラマツとシラカンバとの性質を考えあわせると、どうなるか。これが、つぎの問題である。ダフリアカラマツとコウアンシラカンバとは、大興安嶺だけでなく、東シベリアのいたるところで、なかよくまじって森林をつくっており、その生理的な性質は、ひじょうによくにているはずである。しかし、やはり両種のあいだには、多少のちがいがある。たとえば、この両種からなる大興安嶺のタイガが、ホロンバイルのステップに接する部分には、シラカンバばかりの森林ステップの帯がはさまっていることを、われわれはながめてきた。この現象は、シラカンバのほうが、カラマツよりは、いくらか乾燥につよく、その性質のちがいが、距離にして三〇—四〇キロにおよぶ分布のずれとなってあらわれているものにほかならない。また、濕地がふえてくるにつれ

てカラマツはしばしば濕地のふちにはえ、細い木が濕地のなかに立っていることもおおい。ところが、シラカンバのほうは、決して濕地の近くには生えていない。したがって、シラカンバは、乾燥につよいと同時に、土地の過濕にたいしては、カラマツよりもよわいということがわかるのである。

図22にみられる分布は、ふたつの種の、このような性質のちがいを、そのまましめしている。ふかくまで凍土のとける南向き斜面では、夏によく土壌が乾燥するので、カラマツよりはシラカンバに有利である。斜面の下のほうでは、まだカラマツもそだちうるが、上にのぼるほど乾燥がひどくて、シラカンバばかりとなり、いちばんかわきやすい上端部では、シラカンバさえそだつことができないで、草地となっているのである。ただし、この考えがなりたつためには、夏のあいだに、あまり多くの雨がふっては、つごうがわるい。学術篇でくわしく論ぜられているように、東シベリア一帯は、雨がすくなくて氣候の乾燥度がたかく、その雨の大部分は夏に集中してふるにもかかわらず、場所によっては、このように、土壌水分の不足がおこるものと考えられる。われわれが森林ステップをはなれるころから、シラカンバの林はしだいにカラマツ林におきかえられてしまったが、なお南に向いた斜面には、しばしばシラカンバの林がみられ、ソルノピョークの急斜面には草地さえみられるのは、このように解釈できるのである。

いまや、われわれをとりまく山地の大部分は、B地点のようなカラマツ林によっておおわれていた。数字のしめすように、その発育ぶりは貧弱で、直径三〇センチをこえるものはめずらしい。根のはびこりうる土の深さは、きわめてわずかで、風にふきたおされたカラマツの根が、まるでヒトデのように、たいらに浅くひろがっているのを、たびたび観察することができた。ずっとのち七月上旬になっても、根のあいだの凹みには、氷の張っているのがみられたのである。この浅い活動層の土は、雨と、とけてゆく凍土からしみだす水とで、たえず過濕

の狀態にあり、もちろん溫度もひじょうに低い。これでは、カラマツが大きくなれるはずはないのである。A地点のカラマツが格段に大きいのもとうぜんであろう。カラマツの大木がみられるのは、河谷原のなかの乾いた部分で、ステップのとび地のような草原となっているなかに、点々と立っている場合にかぎられていた。こういうところでは、凍結層がひじょうに深いらしく、したがって表土の乾燥のために、なかなか若木がうまくそだたないが、チャンスにめぐまれて一たん定着すれば、大木にまでそだちうる條件をみたしているのであろう。このような場合には、直径一メートルに近いものも、まれにみうけられた。

木がほそいということは、若いということを意味してはいない。ポクロフカの村に、切りだされていたカラマツの材は、直径二〇—三〇センチで、樹齢一〇〇—一五〇年をかぞえた。これなどは発育のよいほうで、濕地ちかくにはえているものなどは、直径三センチくらいで、すでに三〇年以上に達していた。東シベリアを旅したミッデンドルフは、こう書いている。

「わたくしは、ひどく失望した。エニセイスクから北にゆくと、森林の平均樹齢は、せいぜい五〇年で、けっして一〇〇年をこえるとはおもえない。この見かけの若さは、北にゆくほどはなはだしくなる。しかし、一度くわしく観察してみると、木々には、暗灰色のコケや地衣のふさがまといつき、ながらく見なれたこの矮少な木々こそ、樹木のなかの老兵（ヴェテラン）にほかならなかったことがわかるのである。……もっともめぐまれた南東シベリアにおいてさえ、森林中の成木の九九パーセントまでが、直径一ないし一・二五フィートをこえることはない。[1]」

この失望は、われわれにとってもおなじだった。しかし、大興安嶺の森林が、とくに貧弱なのではない。シベリアのタイガということばから、すくすくとそびえる大木の密林を想像するのが、まちがっているのだ。すくなくとも東シベリアのタイガの実体は、こんなものなのである。

山地のカラマツ林の下生えは、オオバコケモモとホソバイソツツジとの、二種類のシャクナゲ科の小灌木によって、ほとんど九〇パーセントまで占められている。前者は高さ一五センチくらい、後者は三〇センチくらいで、どちらもじゅうたんのように地上にしきつめる。表3の例では、ふたつがまじりあっているが、こういう例はむしろすくなく、ふつう斑点状にすみわけている。だいたいの傾向として、コケモモは、よりかわいた土地をこのみ、イソツツジのほうは、しめった土地や北むき斜面におおいようであった。そのほか、イソツツジとにた高さのものには、クロマメノキがわりあいにおおく、ほかにグフリアビャクシン、スグリ類などをみうけ、コケモモ級の草本では、ベニバナイチヤクソウ、リンネソウなどが、カラマツ林の下にふつうであるが、量的には問題にならない。ときにはスギゴケ、ウマスギゴケ、ハリスギゴケ、オオヒモゴケ、フトヒモゴケ、フトゴケ、フロウソウ、イワグレゴケ、タチイワゴケ、ナミシッポゴケなどのコケ類が、カラマツ林の下生えをなしている部分もあるが、やはり面積はおおきくない。一般にカラマツ林のなかは、生えそろった下生えのうえに、いきなりカラマツがならび、若木はすくなく、中間の灌木層がないので、公園のようにととのった感じをあたえ、荷をつんだ馬がらくらくと通りぬけることができる。

カラマツ林をささえている土壌については、すでにくわしくのべたが、この状態は、われわれの行程中どこでも大差はなく、断面の発達は、つねにわるかった。おなじ北方のタイガでも、常緑針葉樹であるエゾマツ、トドマツの森林地帯では、氣候が濕潤で、永久凍土もないので、土壌断面の発達がよく、白く漂白されたA_2層をもつポドソール土という特有の土壌型がみられる。しかし、この落葉針葉樹の地方では、A_2層はわずか淡色で、多少漂白されているにとどまり、土壌型からいえば、未成熟の弱ポドソール化土壌に分類されるべきものである。表土の反應は、PH五・〇—五・四くらいの、かなり強い酸性をしめした。

〔註〕

① Middendorff, A. T. von (1864) Die Gewächse Sibiriens. In Sibirische Reise, Bd. IV, Theil 1, Lief. 4, S. 630.

ナプタルダイ

ヤンギール合流点をたつ二四日の朝は、よく晴れていたが、まもなく卷層雲が空をおおいはじめて、ゆくての天候をきづかわせた。いまや野地坊主は、おもうままにその領域をひろげはじめていた。オリエットという、ちょっと氣のきいた名まえの支流から、畫食点まで、われわれは、はじめて濕地の連続行進を強いられた。例によって例のごとく、グラモースキーの馬は、難行に難行をかさねた。おりあしく、砂糖とマッチ、佐藤さんの写眞フィルムという、貴重品ばかりをつんだ駄馬が、オリエットの川べりの濕地に、横だおしになってしまった。雪いらい、濕地の水はふえていた。たちまちマッチは分解し、砂糖はどろどろにとけてしまった。佐藤さんはもちろんのこと、甘党たちのふんがいはやるかたなく、グラモースキーは、ひる休みをつぶして、とけた砂糖を細口のびんに流しこむしごとをいいつかった。近々とみると、もうごましおのひげをのばしたグラモースキーが、ブツブツいいながら、半固まりの砂糖と格闘しているのは、きのどくでもあり、こっけいでもあった。

もしグラモースキーが、たびたびの失敗ごとに、恐縮したような顏をすれば、それほどまでにはにくまれなかっただろう。しかし、そのたびにかれは、じぶんの馬の数のおおいことをいい立てたり、荷物のおもい不服をならべて、口をとがらせるのであった。ロシア人なかまでさえ、かれの評判はわるかった。ただでさえモーションのにぶいところへ、馬がおおいと來ているから、荷ごしらえは、いつでもいちばんおそい。もとハルビンの白系

露人部隊にいたという、大男のニコライなどは、じぶんの分はテキパキとすませて、いつも待たせられるものだから、ひまさえあればグラモースキーに八つあたりしていた。荷物のつみおろしは二人がかりでないとできないのに、誰もてつだってやらないので、いよいよかれのしごとはおそくなり、日直をいらいらさせた。責任上バダエフはよく手をかしていたようだったが、さもないと、氣のよいガイブシャンがひっぱりだされて、いつも相棒をつとめた。しかし、力なしのグラモースキーとガイブシャンとがしめた綱は、あるきだすとすぐにゆるんで、またまた立ちどまってしめなおすのに時間をくった。あるとき、この奇妙な関係を、大塚さんがひやかすと、ガイブシャンは、にがわらいしてこうこたえた。「沒法子的朋友(メイファツズデポンユウ)！」

こういうところが、東洋人であるオロチョンと、西洋人であるコサックとの氣質のちがいでもあった。ロシア人たちはいいつけさえすれば、なんでも氣もちよくやってくれたが、だまっていれば、じぶんたちのことを第一にするのがふつうだった。食事のときも、当番をだしてこちらの手つだいをするようにいいつけるまでは、われわれの食事ができていてもいなくても、さっさとじぶんたちの食事をはじめた。ところが、ガイブシャンは、いつも隊員とおなじものを、おなじときに食べていたが、隊員がそろ

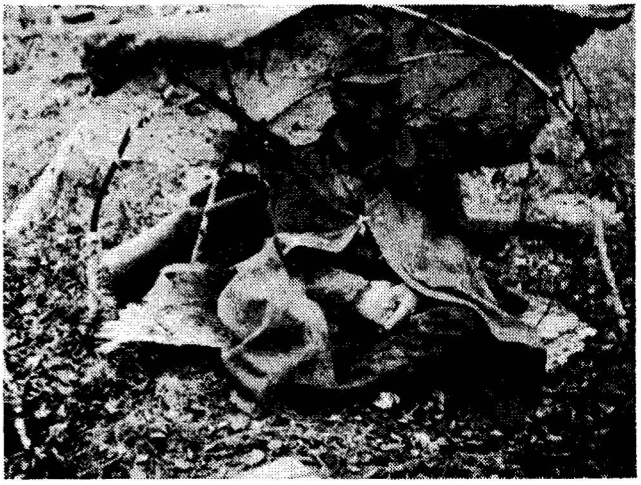

図 23. ガイブシャン．シラカンバの皮をはいで雨やどりをしている．

って箸をとるまでは、けっして口をつけず、おかわりも、こちらが氣をつけてやらないと、いつもひかえめにしているふうであった。われわれの習慣と共通した、このつつしみぶかい礼儀は、やはり氣もちのよいものだった。われわれとガイブシャンとのあいだのへだては、まずこういうところからなくなっていった。

朝の卷層雲は、やっぱり低氣圧の前ぶれだった。夕食には、せっかくのタイメンのフライを、あわててテントのなかにもちこまなければならなかった。雨はあくる日のひるまでつづき、ガン河にのぞんだ第九キャンプでは、またまた一日の滯在をかさねた。予定は一日々々とおくれて、食糧計画にくいこんでゆく。せめてものことに、しきりと雨はふるが、二日とはつづかない。この雨も、二六日には、ぬぐったように晴れあがった。

キャンプをでると、また見わたすかぎりの濕地である。雨で、野地坊主の頭だけが、すれすれに水面にでていた。グラグラする野地坊主の頭づたいにあるくのは、なかなか氣づかれのするしごとである。どうせ何十メートルかあるけば、足をふみはずして水におちるにきまっているのだから、いさぎよくあきらめればよいのだが、せっかく夜のあいだにかわかした足を、なるべく長いあいだ溫存したいというみれんがでて、いろいろの醜態を演ずるのである。野地坊主のうえで、手をふったり脚をふったり、よろしく平均運動をやったあげくは、ボチャリと水のなかにおちてけりがつく。野地坊主のあいだの深さは、ひどい場所では五〇センチもあるので、運がわるいと、一挙にくつ下からひざの上までぬらしてしまう。ぬれた足やズボンはかわかせばよいが、靴にはこまりはじめた。シルホーワヤをでてから、靴のなかまで水びたしにならない日は一日もなかったから、わずか一〇日たらずのあいだに、あたらしい兵隊靴のつまさきには、はやくもちいさな孔があきはじめた。靴を軍隊給與にたよったのは、失敗だった。はきなれた登山靴をもってきた二—三人をのぞけば、めいめいズック靴一足をスペアとしてもっているだけだ。この調子では、モーホの町へ、はだしで入城ということになりそうだ。

最短距離で濕地をよこぎってゆく隊列とわかれて、隊長とわたくしとは、左手にみえる丘をめざした。本流に近いほうは、かえって土地がかわいていたのに、山すそは、ゆるい斜面にまで一めんに濕地がはいのぼって、なかなか骨がおれた。丘のいただきは、例によって角礫がガラガラしていた。足もとの濕地と、駄馬のとおっていった河べりの路とのあいだには、谷をうずめて、ひろいカラマツ林がひろがっていた。上流にも、おなじような黒々としたカラマツ林が、谷の平地のなかば以上を占めているのがみられた。これまでの谷にみた、あかるい大木の疎林ではなくて、びっしりと密生した林である。そういえば、カラマツの大木の散らばった、かわいたステップ的な草原は、ほとんどみあたらなくなってきた。見とおしのきくカラリとした谷から、密林と濕地とのいりまじった谷へと、ガン河の谷のながめは、決定的に上流の性格をおびてきたようだ。

対岸には、比高三〇〇—四〇〇メートルをこえない、ゆるやかな山々がつらなっていた。さきほどガイブシャンにきいたところでは、対岸にそそぐケイラットという支流をさかのぼると、甘河（ゲン）の流域にこえるのだ、といった。ゲン河は、東南にながれるノンニの支流である。してみると、いまこの眼のまえにある、なんの変哲もない丘がガン河とゲン河との分水嶺——大興安嶺の主稜そのものなのだろうか。出発いらい、興安嶺の風物になれてきたわれわれにとって、それは、なんのふしぎもない、ごく自然ななりゆきであった。けれども、子どものころから見なれてきた地図に、こい茶いろにぬられていた大興安嶺と、このなだらかな低い山なみとは、なんとちぐはぐな対照をなしていることだろう。主稜というからには、どこかにひとつくらい、ずばぬけて高い山があってもよさそうなものだ。この晩壮年期の波状山地のなかには、氷と岩との鋭峯はかくれていそうもないが、なだらかに高まったまるい頂きが、くっきりと森林限界をぬいて、ワイルドな、原始の香りにみちた高山帯をくりひろげている、そんな山が、おのずからわれわれの空想のなかから、結晶しはじめていた。そういう山のみつかる可能性

は、もちろん主稜の近くに、もっともおおいだろう。しかし、現実の主稜のなんとのんびりしていることよ。

「やっぱりあかんねえ。」

「そうですね。」

と、ふたりは顔をみあわせてつぶやいた。

濕地をみおろしてみると、野地坊主の黄いろのなかに、灌木が密生して茶いろにみえる部分が、縞のようにまじっていた。あそこなら乾いているだろうというので、そちらめざしておりてみると、あにはからんや、それは野地坊主の頭のうえに、ヒメカンバが胸くらいの高さに密生しているのであった。これでは、頭づたいに歩くのに、一そう骨がおれる。これは、たしかに、予期しなかった型の濕地だった。ヒメカンバの根株には、カモの巣があって、おおきな卵を一〇あまり拾ったが、ふたたびカラマツ林にたどりつくまでの苦労は、それくらいの副産物では、うめあわせがつかなかった。林のふちを流れる小川でさえ、増水してさかんに泡をたてており、ももまでつかって渡らねばならなかった。

足もとに氣をとられていると、うしろから今西さんのよび声がきこえた。ニコニコわらって、上流のほうをゆびさしている。ゆびさすほうに眼をやると、さっきまで丘のかげにかくれてみえなかったとおくの山に、おや、ピカリと残雪が光っているではないか。じっと眼をこらしてみると、距離こそとおいが、その根ばりといい、山のすがたといい、これまでみてきた山々よりは、格段に高いようだ。双眼鏡でつぶさにみると、残雪もひとつではなくて、いくつもちらばっており、光りぐあいからみて、数日まえの新雪のとけのこりとは思われなかった。もしそれが冬の雪ならば、その高さは、うたがう余地がない。まるい頂きの右肩には、森林限界線らしいものもかすかにみとめられた。もううたがいはない。さきほどの幻滅から一時間たつかたたないうちに、空想の山は現

実化したのだ。こんど林をでるときには、この山が一だんと近くにせまっていることだろう。それをたのしみに、わたくしたちは、また密生した森林のなかにわけいった。

図 24. ナプタルダイの遠望.

林をぬけると、まわりを森にかこまれた、明るい草原が、ひろびろとひらけた。駄馬隊は、そこに荷をおろして、ひるめしのしたくにかかっていた。この草原は、ちょうどそこで右岸からそそぎこむ支流の水源にむかって、のびひろがっていた。ゆるやかなその谷のおくに、さきほどの山は、さえぎるものもなくゆうゆうとその全身をあらわしていた。ガイブシャンによれば、この山の馬オロチョン名は、ナプタルダイといった。ナプタルダイまでの距離は、三〇キロそこそこであったろうか。その遠さでも、頂きの両肩には、肉眼にもはっきりと森林限界がみとめられた。頂上ちかくには、ハイマツとおぼしい黒い斑らがちらばり、ところどころに残雪がきらめいていた。山の位置は、主稜からとおく西にかたよっているが、その頂きに立てば、われわれのめざすビストラヤ河の流域がみられそうであった。

残雪とハイマツと、未知の山々への展望とのゆうわくは強かった。みんなが、腹のなかで、この山にのぼることを考えていた。とうとう川喜田が隊長に口を切った。馬二頭と二日の暇とをゆるして

もらえば、強行して頂上に立ったのち、本隊においつこうというのだ。

しかし、隊長の首は横にふられた。われわれの遠い前途と、おくれた日程とを考えると、道草をくっているときではなかったのだ。ナプタルダイ。ナプタルダイ。われわれは、この名をわすれないだろう。逃がしたえものは、思いだすほどに大きくなる。ナプタルダイはますます高くみえた。一五〇〇メートルというのは、みんなの見こみの一致してうごかないところだった。ガイブシャンの知っているかぎりでは、これにひってきする山は、ゲン河の上流にもう一つあるきりだという。それでは、もうこんな山には出あえないのだろうか。いやいや、めざすビストラヤの流域はひろいのだ。しかもガイブシャンは、ビストラヤ水系のことは、なにも知らないじゃないか。いまにみていろ、ナプタルダイ。われわれは、こうみずからをなぐさめた。

午後は、うららかに陽がさして、春の蝶がしきりに舞いはじめた。やわらかな緑いろにかがやくウラアカシジミは、早春の精のように、シラカンバの木立ちをめぐってとんだ。北海道の高山蝶として、内地の昆虫マニアたちのあこがれのまとであるアサヒヒョウモンも、いくらもネットにはいった。なにしろ、ここは北緯五一度半なのだ。山すその路は、密生したシラカンバやカラマツの若木のなかを、上り下りしてつづき、馬は背の荷物を、若木にひっかけては、木の弾力におしもどされてあえいだ。右手の林のなかから、つぎつぎとあらわれてくる支流は、どれもこれもとうとうと増水して、こい茶褐色の水をいっぱいにたたえていた。渡渉になやんで泥まみれになった人も馬も、かわきにたえかねて、あらそってこの水に口をつけた。本流の水も、やはり茶に色づき、どういう原因でできるものか、ねばい泡のかたまりを白くうかべて、かわいたのどにビールをおもいださせた。水はPH五・四—五・六のかなり強い酸性①、そのビール色の流れが、音もなくカラマツの林のなかからあらわれて、また林のなかにきえてゆく。これが、春から夏への大興安嶺の河のたたずまいであった。

そういう支流のひとつをわたるところに、一九四〇年ゲン河からガン河にこえた、一等三角点測量班ののこした、三角点導標が立っていた。おなじような導標は、ヤンギールの近くにもみつかっていたが、こんどの導標によって、はからずも、ナプタルダイには、一等三角点がもうけられていたことが、明らかになった。ただ、二等三角班、地形測量班がまだ着手していないために、ナプタルダイの存在は、一般には知られていなかったにちがいない。ナプタルダイは処女峯ではなかったのだ。このニュースは、ナプタルダイのゆうわくを、すくなからずよわめる効果をもっていた。おもえば、めまぐるしい一日のナプタルダイさわぎであった。[2]（以上二節　吉良）

〔註〕

① ガン、ビストラヤ、アルバジハの三つの河の流域を通じて、四〇数ヵ所で測定した河水のPHは、二―三の例外をのぞきすべて五・四―五・六の範囲にあり、ひじょうに一様であった。ただし、ガン河下流にそそぐ、レンブール、ムリのふたつの支流では、六・四という、やや高い値がえられた。これは、その流域が半乾燥気候のもとにあり、森林や湿地にとぼしいからであろう（梅棹忠夫（一九四八）北部大興安嶺の陸水、生理生態、二巻一号、三九―四九ページ）。

② 一九四三年の八月、京都探検地理学会の市原実・富川盛道の両氏は、われわれの記録にもとづいて、三河からガン河をさかのぼり、ナプタルダイに登頂した。頂上には一等三角点がもうけられ、標高は一五〇〇メートル前後と推定された。この旅行には、はじめわれわれと同行したダフール族のトクンボが案内をつとめた。

ハンダハンとノロ

この日の午前は、もうひとつのあたらしい経験をくわえた。展望台から晝食点への途中、とおりぬけたカラマツの密林のなかで、われわれは、はじめてハンダハンのなまなましい遺物にでくわしたのである。

それは、森のなかを縦横に通じる獣道と、なかんずくそのうえに無数におちている糞とであった。糞は、長径三・五センチ、短径二・五センチのだえん体で、六〇—一〇〇コくらいが、一かたまりになっておちており、あきらかに有蹄獣のものであることをしめしていた。ノロの糞にくらべると、ひとつひとつがずっと大きく、一回の排泄個数もおおいし、また前者よりもずっと濃い黒褐色で、まちがえようもない。これが、ハンダハンの糞だった。

ハンダハンというのが、例のスプーン形にひろがった、どくとくの角をもつ、オオシカ属（*Alces*）のシカであり、ヨーロッパでエルク（elk）、アメリカでムース（moose）とよばれる、小馬ほどもある動物だということをわれわれは知っていた。和名をシベリアエルクシカ、ロシア名をサハーテ、オロチョン名をトーケというが、北満の諸民族のあいだでは、ハンダハン（堪達罕）という名が、いちばん通りがよい。もちろん、オオシカの類は、日本の領土のどこにもすんでいない、じゅんすいのタイガの動物である。ついきのうまで、遠いみしらぬ世界のものだと思っていた、そういう動物が、いつのまにかまわりをとりまいていたのだ。糞のなかには、湯氣の立ちそうな、まあたらしいのもある。こうしているあいだにも、どこかそのへんの灌木のあいだから、この大きなシカが、われわれをみおくっているのではなかろうか。わたくしは、そういう錯覚におそわれて、何度もうしろをふりかえってみた。

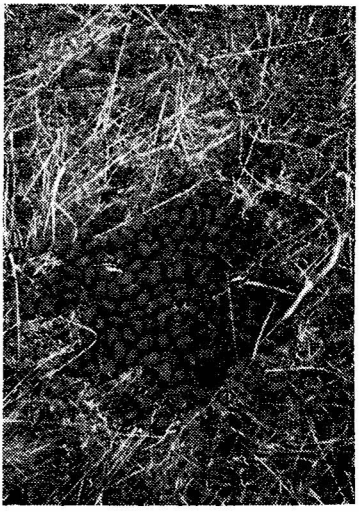

図 25.　ハンダハンの糞.

晝食点の草原にでてみると、さきについていた隊員たちは、たったいまこの草原の向うを、一匹のハンダハン

が走ったことをつげてくれた。ガイブシャンが、たてつづけに追いうちしたけれど、あたらなかったという。やっぱり、やつはいたのだ。しかし、わたくしは、それをみのがしたのを、そう惜しくはおもわなかった。ノロのように、これから毎日見られるだろうと思ったからだ。だが、それはまちがいだった。体のおおきいハンダハンは、ノロより数もすくないし、すんでいる土地も密林とヒメカンバの灌木原にとざされた、見とおしのわるい土地だ。そのうえ、ノロにくらべるとたしかに小心で、これ以後ガイブシャンこそ四頭のハンダハンをたおしたが、われわれは、いつも間一髪というところで、生きている姿はみなかったのである。この日の夕方には、キャンプに着く直前、林のなかで、数年まえの秋におちた、ハンダハンの古角をひろった。四つ又にわかれて、ややスプーン形にひろがり、つけねから先端まで、主軸にそうて六五センチ、重さは三・四キログラムあった。興安嶺のハンダハンの角は、同類中ではごく小さいほうで、両角の尖端の幅が最大一七〇センチもあるという、アメリカのムースにくらべれば、お話にならないが、それでも、両方そろって二貫もの角をはやしている頭は、どんな頭だろうか(図版一六ページ)。のちに、ビストラヤの中流でたおした牝は、頭の長さ六五センチ、肩の高さ一・六メートルという、角にふさわ

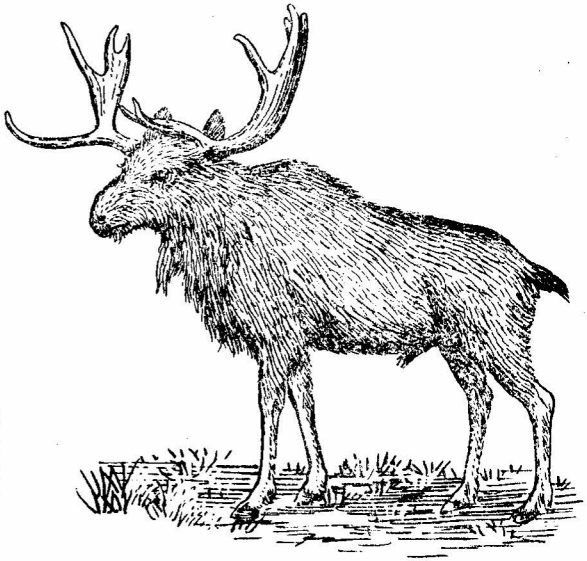

図 26. シベリアエルクシカ（ハンダハン）
Alces alces bedfordiae Lydeckker.

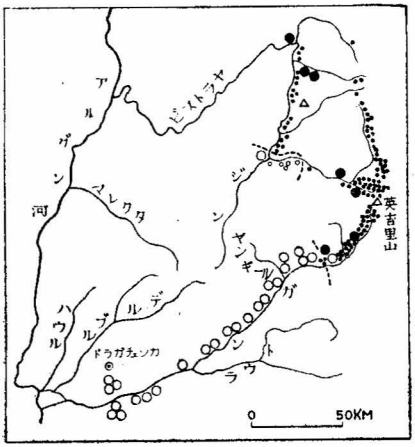

図 27. ノロ(白丸)とハンダハン(黒丸)の糞の分布. ○は確認した個体, ○は糞5塊をあらわしている.

しい大きさだった。ばかげて大きな頭、ぶざまなふくらんだ鼻づら、太くみじかいくび、がんじょうな体と四肢、そのどれをとってみても、われわれの考えるシカのしなやかさとは縁どおい。むしろ、牛馬を連想したほうが早いだろう。

この日の午前までは、地上には、ほとんどノロの糞ばかりしかみられなかった。もっとも、ヤンギールから上流で数回、ガイブシャンはハンダハンの糞をわれわれに注意してくれた。しかしそれは、雨にさらされてくずれた、ごく古いものにすぎなかった。そして、駄馬隊は、この林にはいる直前に、一匹のノロをみていた。ところが、林にはいると、突如としてハンダハンの糞が地上にあふれ、林をぬけるとその姿がみられた。そして、それ以後、全行程を通じて、ほとんどハンダハンの糞ばかりがみられたのである。そのうつりかわりのあざやかさには、まったくおどろくほかはなかった。図27にしめした、糞の分布図は、この直観的な印象を、みごとにうらがきしている。[1]

ハンダハンは、ガン河上流以北に、ノロはガン河中・下流に、このふたつのシカのみごとなすみわけは、どういうふうに解釈すべきだろうか。

ノロのすんでいる地域は、下流の森林ステップの地方と、その延長であるかわいた草原がなお河谷原にちらばっている、中流地方とであった。ところが、まえの節でのべたように、かわいた草原がなくなり、そのかわりに濕地とヒメカンバの灌木原とが優勢になってくると同時に、ハンダハンがあらわれた。つまり、ノロは森林ステ

ップの動物であり、ハンダハンは森林の動物なのである。シカの類は、すべて植物を食う草食獣だから、植物界の変化がシカの種類の変化をともなうのは、ごくあたりまえのことであろう。われわれのみたかぎりでは、ノロは、いつも草原のうえをさまよいながら草をくっていた。ノロの食物として、木の若芽や地衣などをあげている人もあるが、原則としてその主食物が草本であることはうたがいない。馬オロチョンは、早春に野火をはなち、そのあとにもえでた若芽にあつまってくるノロをねらうという、プリミティヴな狩りの技術をよくつかうのである。ところで、ハンダハンのほうは、なにを食っているか。

数日ののち、ガン河の源流でたおしたハンダハンの胃ぶくろは、梅棹の注文で、テントまでもちかえられた。その巨大な胃の容積は、ゆうに三〇リットルをこえ、内容物のままで、八・五キロの重さがあった。こなごなになった内容物を、ていねいに水あらいしてみると、五ミリから七センチくらいにかみきられた廣葉樹の枝がかなりあらわれた。そのおおくはあきらかにヤナギで、胃の内容物の大部分が、ヤナギの枝らしいことが推定された。ガイブシャンによると、ハンダハンは、ヤナギのほか、ヒメカンバとキンロウバイとの二種の灌木を、このんで食べ、ヒメカンバのあるところには、きまってハンダハンがいるという。じっさい、この日以後、灌木原のヒメカンバやヤナギのこずえが、一メートルばかりの高さで、きりそろえたようにかじられ、そのために異常に枝わかれしたものが、いたるところにみうけられた。また、ビストラヤ流域にはいってから、シラカンバの細い木が、一・五メートルくらいの高さから、何本となくおりまげられているのを、本隊員も支隊員も眼にとめている。ガイブシャンの説明によれば、これもハンダハンのしわざであって、冬のあいだに幹をくびでおりまげ、芽をしごいて食べたものであった。いずれにしても、ハンダハンの食いものは、木であって草ではない。これにたいして、ノロの食いものは、草であって、木ではないのである。

二種類のシカは、このように、その食物を通じて、ちがった植物界を要求する。ハンダハンは灌木をくい、したがってその豊富な森林地帯を、ノロは草をくうがゆえに、草のゆたかな森林ステップ地帯を、それぞれ要求する。しかし、これだけによって、かれらの分布が決定されているときめてしまうのは、はやすぎる。なぜかというに、ビストラヤや、アルバジハの流域にも、かなりの草地があるし、逆にヤナギやシラカンバはドラガチェンカの附近にもはえている。食物の点からいえば、あのようにみごとなすみわけをする必要はなく、わずかの数ならば、ノロがアルバジハ流域にすみ、ハンダハンが三河にすんでも、一向さしつかえはなさそうに思われるからである。もっとも食物以外に、まだ両者の分布を制限する自然的な制約があるのかもしれないが、よくわからない。けれども一般的にいって、食物そのほかの自然條件だけで、環境決定論的に、種の分布のちがいを説明しようとすれば、いつもこのような困難におちいりがちであることは、注意しておきたい。

自然界をみわたすとき、われわれは、しばしばこういう例にぶつかる。ノロとハングハンとのように、一方のすんでいるところには他方がすまず、しかも両方のすんでいる地域は相接している、このような対立的非混在的なすみわけをしている二種の生物は、いつもその生活型をおなじくする、いいかえれば、生活内容のひじょうによくにたものどうしである。なるほど、ノロとハンダハンでは、その大きさにも食物にも、かなりのちがいはある。しかし、ひろく動物一般をかんがえるならば、この二種は、どちらも有蹄類のなかのシカ類であり、どちらも草食し反芻し、大きさも近く、運動型式もにていて、きわめてよく似た生活内容をもっているのである。生活型のおなじ二種の生物が、おなじ土地にすめば、かならずそのあいだに、いろいろな利害関係の衝突がおこるだろうから、べつべつの地域にすんでいるほうが、つごうがよいだろうとは、すぐに想像できることである。こういうふうに考えるのは目的論的な解釈で、ただしいとはいえないだろうが、とにかく自然界の秩序は、結果とし

てこうなっているのである。生活型のおなじ、あるいはよくにた種どうしが、このように対立的非混在的なすみわけをしている場合、こういう種を、生態学的同位種 ecological equivalents という。[2]

同位種が、地域的にすみわけて、決してまじりあってすまないという現象のうらには、おなじ種に属する個体どうしの、密接なつながりの強さが関係している。生活型さえおなじなら、じぶんの属している種の個体でも、ほかの種の個体でも差別をつけないというのなら、両方の種の個体が、まんべんなくまじりあってすんでいてもおなじことであろう。ところが、事実はそうではないというのは、おなじ種に属する個体のあいだに、とくにつよい結合力がはたらき、いわば、全部が一團となって、他の種の個体群に対立するような機能をもっていることを意味する。おなじ種の個体は、種族を維持してゆくためには、おたがいの存在を必要とし、また環境に対して完全におなじ要求をもっているのであるから、これは当然のことといわねばならぬ。生物社会学者は、この同種の個体間の血縁的地縁的な密接な結合を、生物界におけるもっとも基礎的な社会現象と考え、種社会 (specia) となづけている。同位種のすみわけ現象は、種社会と種社会とのあいだの関係と考えるとき、はじめてよく理解できるのである。この場合、いくつかの同位種は、あつまって同位社会をつくっているという。同位社会は、種社会をその構成要素とする生物の全体社会の、最低次の基礎構造をなすものである。

種の分布範囲とは、こう考えると、種社会の成立している地域的な基盤である。ノロにとっての森林ステップ、ハンダハンにとっての森林は、それぞれの社会の基盤——領域である。まえに説明したような食物のちがいは、それぞれのちがった領域にたいする適應の結果あらわれたもので、いわば、社会学的なすみわけの、経済学的ならづけである。このふたつの面を理解することによって、はじめて、あのみごとなすみわけ現象の内容があきらかにされたといってよいであろう。

ノロとハンダハンとの領域の境界が、このように社会的な存在であるとすれば、それは、一定不動のものでなく、両方の種社会の勢力の消長に應じて、移動してもよいはずだ。事実、まえにものべたように、この境界は、夏には上流に、冬には下流にと移動するといわれている。冬の境界は、オロチョンの話によれば、ヤンギール合流点附近まで下るというが、われわれのみたハンダハンの古い糞の存在は、ある程度これをうらがきしている。秋になると、ノロは大群をつくって移動するといわれており、この地方でも、デルブル河の谷で観察の記録がある。[13] もっとも、この大群が、ここでいう季節的移動と、すぐ結びつくかどうかには、まだ疑問はのこっているが。

ノロとハンダハンとの領域の境は、また、歴史的にも変化している。二〇—三〇年まえには、浜洲線から一〇—二〇キロ以内の地方にさえ、ハンダハンがたくさんいたという。[14] ガン河の谷においてさえ、いま生きているオロチョンの一代まえには、トゥラ川のシュリカン附近にまで、ハンダハンがいた、とオロチョンはいっている。ハンダハンの領域は、しだいに山のなかに收縮し、それを追ってノロの領域はしだいに森林地帶にまでのびてきているのである。おもしろいことに、ガイブシャンによれば、シュリカンにハンダハンのいたころ、ヒメカンバの灌木原もまたみられたという。いまでは、トゥラ河の上流にもヒメカンバの灌木原はないというが、[15] 下流からなくなってしまったのは野火のためで、七—八年も野火がつづけば、枯れてしまうということだ。野火がひんぱんになったというのは、人間の影響の強まったことを意味する。おそらく、三河のロシア部落の成立以後、オロチョンの領域はちぢまり、ロシア人の狩りとあいまって、シカはそれまでよりずっと大量に殺され、同時に伐採と野火とが、森林を破壞して、シカのすみ場所をおびやかしはじめたのであろう。

このような人間の力に対して、ハンダハンは、ノロよりも、抵抗力がおとるらしい。森林や灌木原の破壞によわいのはもちろん、狩りによる減少も、よりひどいだろうと思われる根拠がある。たとえば、ノロの一回の出産

数は、ふつう二―三頭であるが、ハンダハンは、たいていの場合一頭しかうまないという。また、体の大きなハンダハンは、それに應じて、一頭の生活に必要な面積もまた大きいであろうから、一頭減少するたびに、種社会ぜんたいとしての領域は、いっそう急激にせばまってゆく、とも考えられる。もし、このままの傾向が、將來もつづいてゆくならば、やがては、ビストラヤの谷の草原にも、ノロが草をはむ日がくるかもしれない。しかし、あるいはそのまえに、ノロもまた人間的諸力の増加とともに全面的に減少して、同位社会そのものが、くずれ去ってしまうかもしれない。現に馬オロチョンたちは、近年ノロさえもしだいに数すくなくなってきたことをなげいているのである。もはや、ほかの種社会に対立するだけの勢力をうしなって、同位関係のくずれさった場合については、アカシカを例にとって、のちに考えてみることにしよう（四〇五―七ページ）。（梅棹・吉良）

〔註〕

① 図27にみられる、ビストラヤ中流ジン川合流点におけるノロの出現については、べつの場所でふれることにする（四〇四―五ページ）。

② 同位種・種社会・同位社会を、社会構成の基礎理論とする生物社会学は、今西錦司（一九四〇）生物の世界（東京、京都、弘文堂）によって、はじめてとなえられた。今西錦司（一九四九）生物社会の論理（東京、大阪、毎日新聞社）は、その理論を、わかりやすく一般に紹介する目的でかかれている。くわしくは、これらの本を参照されたい。

③ 満洲國治安部（一九三九）満洲に於ける鄂倫春の研究、第二篇。

④ ルカシキン（一九三九）前出、四四六ページ。

⑤ Plaetschke (1937) op. cit. S. 79.

冬を追うて

ガン河の谷には、いよいよ草原がすくなくなり、森林と濕地、それにヒメカンバの灌木原の占める面積が、ますますおおきくなってきた。おかげで、二六日の夜のキャンプにも、本流と濕地とにはさまれた、猫のひたいのような草地をえらばなければならなかった。馬の放し場にさえとと欠くありさまである。

あくる日は、二日つづきの快晴に、氣溫があがった。カラマツの枝には、あかい、ちいさな雌花が咲き、芽もようやくうごきだして、いままでうすずみ色にみえていたカラマツの樹海はどことなくけぶるような青みをおびてきた。こずえには、しきりとカッコウがないた。オロチョンの動物季節のことよみでは、カッコウは春をつげる鳥である。この軽快な春のうたい手は、こずえからこずえへと、小止みなしにとびまわって、ドラガチェンカ出発いらい鳥うちに精進している梅棹の手にもおえなかった。あたたかさのせいか、疲れのでたわれわれは、あまり道草もしないで、ヒメカンバのしげみをわけて、終日おいたてられるように歩いた。ヒメカンバは、濕地ばかりでなく、かわいた土地にも、二—三メートルの高さにしげって、人も馬も、すっかり姿を沒してしまう。疲労とたたかいながら、汗をながしている、この人馬をあざけるかのように、尾根のはずれ、支流の谷のおくからはナプタルダイの残雪が、キラキラとかがやいた。

支流のひとつ、ロクローヘという流れの、増水した淵の渡河にてまどって、第一キャンプは、ここをわたったところにもうけられた。このキャンプ地は、ゆうべにくらべると、よほど枯れ草がおおかった。けれども、馬どもには満足できなかったのか、かれらは、夜ぢゅうテントのまわりをガサゴソと荒しまわって、みそ汁の残り

なべに鼻をつっこみ、飯盒をふみつぶし、麻袋をかじって食糧をこぼすなど、いたずらのかぎりをつくした。テントのすそをうかがって、鼻息をフンフンいわせ、寝袋の端をふんだりするものだから、おちおち眠っていられない。起きだして、棒切れでも投げつけると、しばらくはよいが、またすぐやってくるのである。朝になってみると、みな、よろしくはなれたところに立って、眼を半眼にとじ、なにくわぬ顔でいねむりなどしているので、どれがいたずらした奴だかわからない。腹も立ったけれど、かんがえてみれば、連中もかわいそうなのだ。馬オロチョンの滞在地をでたときには、よく太っていた馬が、ようやくめだってやせてきた。コサックたちは、あと数日にせまった山ごえの前後に、河をはなれて、草地のなくなることを心配しているようであった。このキャンプをでて、しばらくいったところに、オロチョンの野宿のあとがあったが、ガン河の馬オロチョンとしては、これが狩りにでる遠さの限度だということだった。馬オロチョンの生活空間がようやくおわろうとしているのだから、馬の生存そのものがおびやかされはじめたのも、むりはない。いまは、このはてしない冬との競争が一日もはやくおわって、春とともに青草のもえでる日が、ひたすらに待たれた。きのうきょう濕地のほとりには、リュウキンクヮやホソバタネツケバナのいじらしい花が、わずかにつぼみをほころばせはじめたが、花びらはまだ寒さにいじけて、興安嶺の春はまだ浅かった。

ヒメカンバの濕木原は、黄ばんだ茶の一といろに谷をぬりつぶして、二八日もわれわれをむかえた。一〇時すぎには、シャジという右岸の大支流に達した。川べりのカラマツの幹には、

「此河ヲ渡リ河沿ニ登ルコト六時間ニシテ興安分水嶺ニ達シ甘河上流チリビンニ入ル。昭和一五・七・三一。

I△緒方。」

という文字がのこされていた。I△は一等三角班のことであろう。ふりかえってみると、ナプタルダイは一そう

遠ざかり、灌木原のかなたに紫いろにかすんでいた。その山のすがたが、京都の町からながめた愛宕山に、どことなく似ているのもなつかしかった。

シャジ川は、ほとんど本流におとらぬ大きさをもっている。いわば、ガン河は、ここで二叉にわかれるのだ。川のまんなかで一頭の馬があばれて、寝袋をずぶぬれにし、みそ一と樽を水にながしたので、三〇分をついやしてやっと渡りおえた。午後は、道のりをはかどらせようというので、対岸の河原に荷をおろし、早いめの晝めしのしたくがはじまった。滯在の日に焼きためておく焼餅(シャオピン)も、そろそろ油がとぼしくなってきたので、おあずけとなり、かわりにすいとんが晝めしになった。すいとんができるまでには、たっぷり一時間はかかる。それがあたりまえのことに思われて、だれもあわてなくなったのは、それだけわれわれが、こういう旅行のテンポに馴れてきたのでもあろうか。

両岸の山々は、主稜に近づくにつれて、逆にますます谷そこの比高を減じ、あさい皿のような谷の底は、しばしば、平原をあるいているような錯覚をあたえた。濕地がつづいて、ガイブシャンのゆくところが、はたしてふみあとなのかどうかもわからない。しかし、そのガイブシャンも、シャジからかぞえて三つめの支流まできたとき、ぱったり立ちどまってしまった。かれの知っている道は、ここでガン河を左岸にわたり、支流ぞいに分水嶺をこえて、ゲン河にはいってしまうということだった。ガイブシャンは、もともとゲン河の上流にすむ馬オロチョンのグループに属していた。どういう事情からなのか、かれが家族をつれて、トゥラ河へとこの道をたどって移住してきたのは、まだ数年まえのことでしかない。道案内としてのガイブシャンの役目は、一おうおわった。これからの行程については、かれはなにも知らない。もう日本人の足あとにであうこともないだろう。航空写眞があるから、道すじに心配はないけれども、航空写眞というものは一種の精密な地図にすぎないから、現実

の地形にぶつかって、てきとうなルートをえらぶことは、やはりそれ相應な技術を要する。そして、そういう場合にこそ、ガイブシャンの本領が発揮されることは、じゅうぶん期待してよい。一度通って知っている道の案内だけでは、オロチョンのほんとうの実力はあらわれないであろう。われわれのほうだって、これからがほんとうにおもしろくなるのだ。

ふみあとがないとすれば、濕地をさけるほうがらくだ。われわれは、左におれて、山すそのカラマツ林のなかに道をえらんだ。林のなかは、遲よく明るくかわいて、三〇—四〇センチにのびあがったイソツツジでおおわれていた。その彈力のあるやわらかい枝の足ざわりは、ちょうどスプリングのうえをあるいているようで、かえって脚をつからせはしたが。山すそにぶつかったところの、南にむいた斜面には、はじめてであう、みごとなシベリアアカマツの林があった。日本のアカマツのように、南画的なおもむきはとぼしいが、すらりと立ったまっすぐな幹は、あざやかな朱いろにかがやいていた。葉は、春の雨にあらわれて、赤茶けた冬の色から、めざめるばかりの鮮緑色によみがえっている。手にとってみた二本の針葉は、ふとく硬く、いかにも酷寒の冬に耐えるシベリアの松らしかった。

イソツツジの下生えのあいだには、ところどころに、ハナゴケ類の地衣のはえた土地がいりまじっていた。そのなかでも、もっとも眼をひく、青緑色の海綿坊主といった感じのミヤマハナゴケに、はじめてお目にかかったのは、一昨日のことだった。無数のハングハンの糞におどろいたのとおなじ林のなかで、イソツツジとスギゴケの類におおわれた、うすぐらいしめった地上に、その白っぽい、あわい青緑色の群れは、まるで燐光をはなっているようにあざやかであった。いま、われわれの足もとには、ほかの種類をもまじえた地衣のカーペットが、まだらに地上をいろどっている。ハナゴケ類の地衣は、トナカイのたいせつな食物だということは、かねがね聞い

ていた。いよいよトナカイ・オロチョンの世界が近づいてきたのである。

はたして、つぎの谷に近づいたころ、おもいがけなく、左手から、かなりよく踏まれた道がおりてきた。獣の道だろうか、人間の道だろうか。判断にまよったわれわれは、すこしおくれていたガイブシャンにたすけをもとめた。かれは、しばらくあたりをみまわしていたが、苦もなく一ととこと「ヤクート！」とこたえた。ヤクートというのは、トナカイ・オロチョンを、東シベリアにすんでおなじくトナカイを飼っているヤクート族とまちがえて、ひろく使われているよび名である。これにはおどろいた。いったい、道をみただけで、どうしてそれを歩いた人間がわかるのだろう。見わたしたところ、足あともないし、おちている品物もない。いぶかしそうなみんなの顔にこたえて、ガイブシャンは、道ばたのカラマツの幹の、地上すれすれのところをゆびさした。なた目だ。ふるいなた目だった。かれはこう説明した。馬オロチョンはいつも馬にのって歩き、手にみじかい柄のなたをもって、なた目を切る。トナカイ・オロチョンは、なが柄のなたをもって、徒歩であるく。もし、このなた目が馬オロチョンのものとすれば、それは、馬をおりて、しゃがんで切ったものということになる。そういうことはありそうもないことだから、まぎれもなくこれは、「ヤクート」の切ったものだ、というのである。この解答はこの上もなく明快だった。これくらいのことがわからなくては、山でくらしてはゆけないだろう。われわれのほうがあきめくらで、せっかく書いてある文字がよめないだけのことなのだ。

しかし、ガイブシャンの答えに、なにか神秘的なものがあったことは否定できない。われわれは、アルセニエフの名著「ウスリー探検記[1]」「デルスウ・ウザーラ[2]」の主人公、デルスウをおもいださないわけにはゆかなかった。アルセニエフの筆にえがきだされたデルスウは、あんなになまなましく、人間的な悩みをなやむ老人でありながら、どことなく超人的なおもかげをもっている。ウスリーの密林のなかのことなら何ひとつ知らないことが

なく、森のなかにのこされたあらゆる足あとを精確によみとき、なんどもアルセニエフを危地からすくった「足跡驗知者」デルスウが、さいごに、アルセニエフの眼前でなく、すこしはなれたところで、誰とも知らず殺されて、土まんじゅうだけがのこっている場面にまでよみすすんだとき、ほっとした感じをいだいたのは、わたくしだけではあるまい。アルセニエフの筆によって、不朽のものになった超人デルスウは、死んだのではなくて、過去のなかに消えていったのだ。ガイブシャンは、いまわたくしのまえで、いつものようにりんご色にほほをふくらませ、カーキ色の戰鬪帽をかぶって立っている。かれもまた、シベリアの密林のなかに住んでいる、無数のデルスウのひとりなのだろうか。正直なところ、わたくしはそう考えることはできなかった。ガイブシャンは、あまりにも若く、あまりにも現実の人間でありすぎるのだ。しかし、かれの答えの神祕さのなかに、われわれは、デルスウその人ではなくとも、すくなくとも、デルスウの分身をみいだして、うれしかったことにまちがいはない。

馬オロチョンの路をはなれてから、このトナカイ・オロチョンの道にでるまでは、二時間とはかからなかった。これは、あるいは偶然のできごとであったかもしれない。しかし、前々日に経驗した、ノロとハンダハンとの関係にくらべてみるとき、これら自然民族の生活空間が、いかに深刻に生物学的法則によって制約されているかを、痛切に感じないわけにはゆかない。トナカイは、大興安嶺中央部の森林のなかに群生しているハナゴケや、上流部の濕地につきものの、ヒメカンバの若芽などを食べる。そして、ツンドラの動物としてのその体質は夏の下流の谷の暑さと、吸血昆虫の大群とに耐えることができない。このような自然の制約が、トナカイを、したがってトナカイ・オロチョンを、上流地帶の住人とする。逆に、馬の放牧のために必要な草地の欠乏は、馬オロチョンの上流への進出をさまたげる。このように、自然環境にたいして相反する要求をもった、ふたつの狩猟

社会の生活空間が、ちょうどノロとハンダハンとの場合のように、一線をもってあい接するところが、この一時間あまりの行程だったのである。

つぎの支流の谷は、猛烈なヒメカンバの密生にとざされていて、横断できそうもなかったので、われわれは、この道を利用して、また本流のほうへと下っていった。濕地には、かなりの量のミズゴケがまじって、野地坊主のあいだをうずめていた。夕ぐれちかい濕地の水は、氷のようにつめたく、えんりょなしに靴の穴からしみこんできた。三日の連続行進のあと、あすは予定の休養日ときまっていたので、あたたかい焚火がひとしおまちどおしかった。濕地をわたり、カラマツ林をくぐって、すくなからぬまよい道ののち、ようやく本流のほとりにでると、ヒメカンバのしげみのなかに、ちいさい空き地がみつかった。われわれは、もう一も二もなく、そこをキャンプ地ときめた。ガン河は、ついに幅四—五メートルの小川となって、それでも一人まえに蛇行しながら、テントのそばを流れていた。ちょうど、肉のきれたさびしい夕食に向っていたとき、ひとりで狩りにでていたガイブシャンが、ハンダハンをしとめたというしらせとともに、一かつぎの肉と肝臓とをかついで、かえってきた。日本人からもロシア人からも、かっさいの声はしばらくなりやまなかった。

〔註〕

① ウェ・カ・アルセニエフ・満鉄調査部第三調査室訳（一九四〇）ウスリー地方探検記。満鉄社員会発行。

② アルセニエフ・長谷川濤ほか訳（一九四二）デルスウ・ウザーラ。満洲事情案内所発行。

英吉里山

英吉里山。われわれがこの名まえにはじめて眼をとめてから、いつのまにか数年がながれすぎた。わたくしの記憶では、高等学校の二年ころには、もう地図をひらいて、英吉里山ごえ、ガン河——ゲン河のルートによる、大興安嶺横断計画を論じていたのをおぼえているから、わたくしたち若手の隊員にとってさえ、それは、すくなくとも三—四年の昔にさかのぼる。隊長今西さんをはじめとする大先輩たちの眼が大興安嶺にむいたのは、たぶん一九三五年の冬の白頭山遠征直後のことであろうから、その人たちにとっては、すでに七年という歴史がつみかさなっていることになる。英吉里山は、それほど長いあいだ、われわれの目標であり、宿望でもあった。だからわれわれのなかまでは、英吉里山の名は、知らないもののないほど有名だったが、考えてみると、これほどわけのわからない山はないのである。

日本やシナで発行された、いろいろな地図帳の類をみると、北部大興安嶺のまんなか、ガン河とゲン河とクマラ河との分水点にあたる主稜のうえに、きまって「英吉里山」の名がしるされている。一二一〇メートルと、標高のはいっているのもある。ところで、こういう地図帳の原図としては、われわれの知っている範囲では、まず陸地測量部発行の五〇万分の一の満洲地図以上にくわしいものはない。じっさい、大部分の地図は、あきらかにこれを縮尺したものであった。いまこの地図の西第五行北十段「甘河」の部分をひろげてみると、その位置に、伊吉奇山（一二一〇メートル）という名がかきこまれている。よく見ると、この伊吉奇山は、かならずしも附近での最高峯でもなんでもなく、すぐ北には一三〇〇メートルをこえる峯がいくつもならんでおり、どちらかといえ

ば、あまりめだたない主稜上のこぶのひとつにすぎないようである。しかも、附近には、伊里底吉山だとか、伊里汽山だとか、ばかによくにた名まえの山がおおくて、いったいどこからそんな名をききだしてきたのか、うたがってみたくなる。かりに伊吉奇山と英吉里山とが、おなじ山の異名であるとしても、なんの特徴もないこの山だけが、なぜほかの山々をおしのけてまであらゆる地図にはんらんし、中等学校用の世界地図にまで採録されるようになったのかは、だれにもわからないのである。第一、ほんとうのところは、この名をどうよんでよいのかもわからないのであった。三省堂の世界地図には、イキリ山とかながつけてあるが、シナの地図帳の発音別索引には、Inchirichan ともかいてある。だから、われわれが、どこかの喫茶店のテーブルをかこんで、まだ見ぬシベリアの山野に夢をはせていきり立ったゆうべには、英吉里山は「イキリ山」であり、計画のなかばに、各方面からの情報の不一致と交渉のゆきなやみとで、ほとほとこまりはてた夜中の下宿のたたみのうえでは、英吉里山は「インチキ山」であった。

とにかく英吉里山は、三つの河の分水点のシンボルとして、つねにわれわれの第一目標であった。英吉里山は、高きをもってとうとしとせず、その位置をもってとうといのであった。だから、英吉里山の正体いかんにかかわらず、計画はどんどんすすんで、われわれは満洲にわたってきた。長春では、北部大興安嶺のほとんど全部が、すでに航空写眞に撮影され、とおからず精確な地図ができあがろうとしていることを知った。満洲航空会社の大作業場に、ところせまきまでにならんだ一万分の一のバラ写眞をながめてみても、英吉里山とおぼしいあたりには、べつにめだった山らしいものはなかった。まだ等高線をいれる作業ははじまっていなかったので、しろうとの眼には、精確な高低はわからず、ただ河すじだけがたどられた。一万分の一では、大きすぎて、なにがなにやらわからないので、二〇万分の一にちぢめて河すじだけをかきこんだ水系図をみせてもらうと、おどろいた

ことに、これまで五〇万分の一で知っていた水系は、事実とはにてもにつかぬものだった。第一に、ゲン河とガン河とクマラ河との分水点などというものはない。ガン河とゲン河との水源から発している第三の河は、ビストラヤだ。ビストラヤは、五〇万分の一にでている貝司特河（牛耳河）のことだが、前章でものべられているように、この河がじっさいはひじょうに大きくて、北部大興安嶺の西斜面の大部分をその流域としているのである。一見こくめいな実測図としかおもわれない五〇万分の一図が、おそるべきインチキなしろものであることは、完全に暴露された。こんな精確な地図がありながら、なぜ大興安嶺の内部のことが、まったく知られていないのだろうかという、かねての疑問は、これでなっとくできたのである。

しかし、それにしても、地図屋が創作したのでないかぎり、こういう山の名まえを、どこでききこんだかという問題がのこる。われわれは、ぬけめなく英吉里山についての情報をあつめていたが、長春ではなんの手がかりもなく、もちろん、シロコゴロフ、倉重、野々垣などのパイオニーアの文献にも、それらしいものはみあたらなかった。それでいて、最近に発行された満洲の地質図[1]には、一めん玄武岩の色のなかに、英吉里山附近だけには、一はけ花崗岩の色がなすってあるのだから、ここにいたっては、満洲七ふしぎの一つとでもいいたいくらいである。チチハルでもハイラルでも三河でも、英吉里山という名まえはきかなかった。最後のたのみとしたガイブシャンも、やはりこの名を知らなかった。かれにいわせると、ガン河流域で名まえのある山は、ナプタルダイとキャラバ山くらいのものだという。ガイブシャンはゲン河出身だから、ゲン河のオロチョンのよび名でもないことはたしかだ。そうこうしているうちに、行程はどんどんはかどって、とうとうガン河の源流まできてしまった。ガン河の水源まではあと一日行程、われわれはいまや、英吉里山のま下にいるはずなのであった。

休養日の朝には、ひときれのようかんをそえた、うす茶のでるのがならわしであった。この大宮人どのみのヴ

ィタミンC剤は、だれにもよろこばれた。めいめい自己流のお点前で一服をすませると、われわれは航空写眞をまえに、首をあつめて、さいごの檢討にかかった。その結果、ガン河とゲン河とビストラヤ河と、この三つの分水点にあたる山に、英吉里山の名をあたえ、これを目標ときめた。そこから、一たんビストラヤの一支流の谷におりたところに、てきとうなキャンプ地をえらんで、本隊と支隊とはわかれることになった。本隊は、そこから西に向ってビストラヤの本流を下り、支隊のほうは、逆にビストラヤを北へとさかのぼって、北部大興安嶺の中心部にのこされた、航空写眞のない白色地帶をよこぎって、漠河隊の待っている基地に達するのである。

一日の休養ののち、あけて三〇日、早朝の冷えこみははげしく、河べりのヤナギの枝に樹氷がさいた。炊事のために、ひとり朝はやくテントをはいでてみると、あさい皿のそこのようなキャンプ地のあたりには、ひえきった濃い空氣がながれあつまって、よどんでいるようであった。朝の快晴の空は、ほどなくくもりはじめて、低氣圧襲來のしるしがみえはじめた。ひくくたれた雲の下には、あいかわらず茶いろと灰いろとの世界がつづいて、おもく人の心を威圧し、きょうは、人も馬も一とかたまりとなって足をはやめた。二時間ののち、ガン河のつまりの、最後の谷のわかれに達した。まわりをとりかこんだ山々から、扇がたに水のあつまってくる地形である。谷そこは一めんの濕地となっているが、その底はわずか三—四センチの深さで、かたくこおっており、馬の脚がもぐることはなかった。野地坊主のあいだには、一昨日もみたように、かなりの量のミズゴケがはえているところが、以前の濕地とはちがっていた。このあたりまでくると、河べりからは、ドロやケショウヤナギの大木がすがたをけし、そのかわりに、カラマツがわずかながら河辺林をつくっている。おりからバラバラとやってきたしぐれを、そのなかにさけて、ガン河での最後の晝食をとった。

上流にすすむにつれていちじるしくなってきた地形の平坦化の傾向は、こと主稜のまぢかにいたって、極端に

図 28. ガン河の最源流，はてしなくつづく濕地とヒメカンバの灌木原．正面に英吉里山．

あらわれていた。この濕地をとりまく山々は、いずれも、大波のようにゆるく起伏する丘ばかりで、目測では、比高はおろか距離のけんとうさえつきにくかった。東と南とをかぎる丘は、まぎれもない大興安嶺の分水嶺であるが、それは、ガン河の右岸をなす西方の山々よりも、かえって低いくらいにみえた。ただひとつ、ここで枝わかれして眞北にはいっているガン河の左叉のおくに、いくらか山らしくどっしりとすわっているのが、めざす英吉里山であった。眞正面にあたるその南斜面には、一本のせまい谷がわりこんでいて、かなり傾斜のあるその谷が、たいらなガン河の谷そこにそそぐところが、ちょうど逆三角形の門のように、はっきりとみえた。それは、大興安嶺の分水嶺に達するという、われわれの第一目的の完成をむかえる門であった。

河べりには、かなりふみならされた道がついていた。両がわのヒメカンバが、しばしば顔よりもひくい高さで交叉して、トンネルをつくるところから考えると、これはどうやらハンダハンの道らしかった。ガン河は、とうとう小川となって、足もとにサラサラと音をたてている。氣がついてみると、これはじつにめずらしいことだった。興安嶺の河といえば、大小にかかわらず、ほとんど傾斜のない河床に、ビール色の水が満々とあふれて、音もなく流れているのが、常識だったか

らだ。しかし、いまみるガン河の源流は、音をたて切り岸をけずって流れているではないか。頭をあげてみると、谷そこの面は、平らなままでしだいに高まりつつあった。谷をみあげると、晝食点のあたりは、はるかの低みにとおざかり、くらい空のしたを、駄馬の列が、三々五々、這うようなあゆみで近づいてきた。

谷の傾斜に氣づいたころから、濕地のながめは、すっかりおもむきをかえた。野地坊主のあいだに生えていたミズゴケは、しだいに量をまして、野地坊主をおおいつくし、谷の全面は、フカフカと彈力のあるミズゴケのじゅうたんとかわった。綠ばかりでなく、赤茶・黃綠色などとりどりのミズゴケは、おたがいにおしあって、でこぼこのある表面をかたちづくっていた。表面一〇センチばかりはすでにとけているが、それから下は、ミズゴケも泥炭も、ミズゴケのうえにはえた小灌木の根も、まだかたくこおりついていて、植物採集用の根掘りごてなどは、まるで歯がたたなかった。うすぐらい曇天の光にてらしだされた、みごとなミズゴケ濕原の光景は、ツンドラをおもわせる、極北の國のかおりをただよわせていた。原始的な、人の足にふみあらされていない土地から発散する、探檢家の心に元氣をふきこむかおりである。

英吉里山への谷の入口の門は、ふかくカラマツ林にとざされていた。その一端にたどりついたとき、雪がふりだした。葉のおちたカラマツのこずえをとおして降りこんでくる雪は、みるみる林のしたを白くおおって、どこが乾いているのやら濕っているのやら、わからなくなってしまった。ちょっとした流れをわたるにも、ぬれた倒木の橋に足をすべらせ、水をふくんだ切り岸に馬が立往生して、たちまち足なみはにぶりはじめた。ハンノキがしげり、倒木が算をみだした川ぶちの林をようやくぬけきって、からりとした森林のなかにたどりついたときには、もう暗くてみとおしはきかなかった。馬のかいばのとぼしいのは氣になったが、コケモモの下生えのなかか

らまばらにのびあがったスゲの枯れ草をたよりに、これをキャンプ地ときめた。このまえの雪の日とちがって、きょうの泊りは森のなかだから、材木に不足はしない。てごろな立ち木をきりたおして、大テントのなかには、たちまちりっぱなゆかができた。そのうえに毛皮の寝袋をしき、ろうそくをあかあかとともして夕食となると、そとの雪のことは、いつか忘れてしまった。あわれなのは馬ばかり、この夜は、いつもにもまして、馬の夜あそびがひどく、無電テントはすそから前足でふみこまれて、夜中にまんなかから裂けてしまった。

〔註〕

① 斎藤林次編（一九四〇）滿洲國及び接壤地帶地質図、三〇〇万分の一。

主稜ごえ

三河をでてから半月、五月も今日かぎりという日、いよいよ英吉里山ごえのときがきた。コケモモのじゅうたんのうえに、三—四センチの雪をのこして、空はうつくしく晴れあがり、枝々の雪が、さんさんと逆光にかがやいた（図版一ページ）。カラマツのこずえには、晴しらすがとんでいる。ゆうべ、夕やみのなかでわれわれをなやませた、濕地と倒木との迷路は、このあかるい朝の光に、あとかたもなくほぐれてしまった。また、どこからともなく、なた目のある道があらわれて、ふるいユルタの骨組みのふたつのこった、林のなかの空き地へとみちびいた。ユルタのかたちは、これまでみてきたものにくらべて、ややひらたく、直径もおおきい。骨組みの木の数もおおく、その一本々々が、きれいにけずってあるのが注意をひいた。もうガイブシャンにたずねるまでもなく、トナカイ・オロチョンのしわざと知れた。

高くにのぼってきたせいか、カラマツは、あわれなほどほそくて、竹やぶのように密生している。そのなかにちいさいゴヨウマツの苗木がちらばっているのをけげんにおもっていたら、すぐに大きな灌木となってあらわれてきた。ハイマツだった。すでに、ナプタルダイのいただきに、ハイマツらしいものが認められてはいたが、これが大興安嶺で——すなわち満洲で——二どめのハイマツの発見であった。内地のハイマツとおもむきをことにしているのは、高くのびあがった樹型で、森林のしたにちらばっていることである。ハイマツがめだちはじめるころから、きゅうにシラカンバがふえてきた。谷のシラカンバとちがって、その幹には、うすぐろい銀色にいぶしがかかり、皮はところどころ剝げおちてささくれだち、一見べつの種類のようにみえた。高地の冬の氣候のはげしさをものがたっているのであろう。

興安嶺にはめずらしいV字形の谷は、ますますせばまってきた。つめたい氣流の通りみちをしめすかのように、やせこけた谷そこの木々の枝だけに、サルオガセのような黒い地衣（*Alectoria jaubata*）が、不氣味にまといついている。ついに倒木から倒木へとしたたりおちる水となったガン河は、やがて落ち葉のしたにきえていった。

われわれも谷をはなれて、まっすぐにいただきをめざした。傾斜がくわわってきた。南にむいたこの斜面には、ほそいシラカンバと灌木とが、ぎっしりと生えていた。とぼしい枯れ草だけに、ここ数日のいのちをつないできた馬どもは、ちょっとした細い幹に荷物をひっかけただけでも、もうおしかえされて、くるしそうにあえいだ。傾斜は、二五度くらいになってきた。せなかの荷は、ともすればずりおちる。木を伐りたおし、荷物をつみかえ、馬夫たちのかけごえが、あおい空にこだました。はがゆいような、のろのろとしたあゆみだ。それでも、わずか二〇〇—三〇〇メートルの登りは、やがてつきた。きのうの雪にあらわれた眼のさめるような濃いみどり

のハイマツに、くっきりとスカイラインをふちどられて、尾根の線がみえはじめた。それは、じつにうつくしい色どりだったけれど、やせ馬をひいてのハイマツくぐりは、おもうだけでもいたましかった。しかし、案じるほどのことはなかった。ハイマツのなかにもぐりこんだとおもうと、頭のうえから人ごえがして、そこがもう頂上だった。ガイドシャンをつれて、キャンプから尾根みちをきた隊長が、はやくから頂上について待っていたのであった。

図 29. 英吉里山の頂上．ハイマツの海と，立ち枯れ一歩手前のカラマツとにさまたげられて，木にのぼってもなにもみえない．

頂上は、三メートルくらいの高さにのびあがったハイマツにうずめつくされ、そのなかにほそい低いカラマツがまばらに立っていた。駄馬隊を、頂上の西にあたる鞍部へおろしておいて、われわれは頂上にいのこった。ハイマツの海のそこからは、なんにもみえない。カラマツによじのぼってみても、はるか東のほうに、地平線の山なみがちょっぴりみえるだけだった。氣のせいか、東がわは、西がわにくらべて、谷がふかくえぐりこまれているようだ。われわれは、ハイマツの根がたに円座をつくって、ひるめしがわりの乾パンをかじった。だれも、あまり口をきかなかった。これが、ながらく夢にえがいてきた英吉里山の頂上なのか、こういう感慨を、乾パンと一しょにのみこんでいるような、

みんなの顔だった。ここは、ながい大興安嶺の縦断のうちの、ひとつの峠にしかすぎないのだろうか。これからさき、まだまだ高い峠をこえ、高い山頂に立つおりのあるのを、期待してよいのだろうか。みんなの表情はとまどっていた。たぶん、あまりにもとらえどころのないこの風景に、ひょうしぬけしていたのだろう。わたくしはあしもとに、これまでついぞみかけなかった、ほそい灌木のあるのを、つまみあげてみた。よくよくみると、めだたない暗紫色のちいさい花がさいていて、それはまぎれもないガンコウランが、日かげにヒョロヒョロとのびあがったものだった。この高山帯の植物は、とにかくここが、いままでとおってきたルートのうち、いちばん高い地点だということをしめしていた。やっぱりここは、この旅のひとつのやまにそういなかったのだ。

馬のまっている鞍部へつづく尾根すじは、ハイマツがすいていて、北から西へかけてのみはらしがえられた。この方角に関するかぎりでは、ここはやはり附近でいちばん高い山らしかった。ナプタルダイは、西の空に、一だんと高かった。ビストラヤの方角の地平線は、かすんではっきりしなかったが、どうやら、ナプタルダイほどの高い山はみあたらなかった。ただ、眞北にむかって、山々のあいだにわりこんでいるビストラヤの源流の谷が、地平線をとざしたあさぎ色のもやのなかにとけこむあたりに、すこしめだってとがった山がふたつ、白色地帯の入り口をまもる番兵のようにならんでいた。足もとから北へとかさなっている近い山々には、シラカンバのおおいのがめだっていたが、そのこずえが山腹にそうて、いくつも平行に水平な段々をつくり、とらがりの頭のようにみえるのが、きみょうな眺めであった。あれは、いったいどういうわけだろうか。

鞍部には、ハナゴケをしきつめた空地があって、駄馬どもは、ハイマツの株のあいだに、おもいおもいに休んでいた。みな荷物をつけたままで、ベッタリとはらばいになっている。やせこけた腹には、いたいたしくあばら骨がかぞえられる。氣のせいか、たちあがるにもヒョロヒョロしているようにみえた。しかし、かれらの休み場

であった、この空き地は、なんと風がわりな美しさにあふれているのであろう。地面にしきつめたハナゴケ類の、青・紫・茶・淡紅とりどりの色あいのはなやかさは、おもわず息をのませるような美しさであった。だが、馬はトナカイではない。ハナゴケしかないところに、長居は無用だ。

北への下りは、はじめ三〇度をこえる急傾斜だった。慎重にジグザグをきっておりてゆく先頭の馬が、ふみあらしたあとには、おち葉とうすい土の層とがはがれて、あおい氷の層があらわれてきた。三河をでるとき、どの馬にもあたらしく打たせておいた、スパイクつきの蹄鉄も、こうなっては役に立たない。一列につながれた数頭の馬が、ひとかたまりとなって、どっとすべりおちるのをみて、われわれはきもをひやした。密生したシラカンバのなかに、馬の道をひらくため、ガイブシャンと大兵の土倉とは、先頭に立ってなたをふるった。ロシア人たちのけんめいなたづなさばきと、土倉たちのふんとうとのおかげで、どうやらこの難場も、けがひとつなく切りぬけた。

谷にくだる斜面は、急になったかとおもうと、にわかに階段のようにたいらとなり、それがおわると、またつぎの急斜面があらわれた。階段のはばは、十数メートルから数十メートルくらい、等高線にそうて、くるりと山をとりまいているようだ。これが、さきほどみた、とらがりのシラカンバ林の正体だった。やがて、ぎっしり茂ったシラカンバの林は、ふたたびしだいにカラマツ林におきかわり、あたらしいビストラヤ源流の水が、おち葉のなかからしみでてきた。谷がひらけてゆくにつれて、あたらしい谷は、ガン河の源流とはまるでちがった風景をあらわしてきた。地上には、まるで砕石をおいた道路のように、わりあいに小形の角礫がしきつめられ、とりどりのハナゴケ類がそのうえをいろどって、ぜんたいとしてよく乾燥した感じをあたえた。そのうえに、まばらにカラマツの生えた風景は、ととのった公園のように美しく、ガン河の流域にはみられなかった新鮮な印象がわ

れわれをひきつけたから、最初の谷の出合に、馬のかいばに足りそうな野地坊主がみつかると、さっそくそこをキャンプ地ときめた。キャンプ番号は第一四、支隊はここで本隊とわかれるのである。

しかし、あとから考えてみると、このキャンプ地えらびは、すこしはやまりすぎた。乾いているように見えた石ころは、テントの杭をうちこもうとしてさわってみると、かたく地面にこおりついているのだった。そのうえに腰をおろしていると、からだのぬくみでとけた水分が、ジクジクとズボンをとおしてきた。馬のえさも、二日の滞在にはすくなすぎた。あたりの公園的な風景が、美しいけれども、じつは、この大興安嶺のなかで、もっともきびしい氣候をあらわしているものだと氣がついてさえいたら、われわれは、河ぞいにさかのぼってきつつある春をむかえて、たとえ一と足でも、一時間ぶんの行程でも、下流へとくだっておくべきだった。ほんとうに、春は、わずか二—三日行程の下流にまでおとずれてきていたのだ。もしそうしていたら、あるいは貴重な一頭の馬のいのちを、犠牲にしなくてすんだかもしれなかったのだ。

第一一キャンプの二日の滞在は、あわただしくすぎた。まず、装備と食糧とを、ふたつにわけなくてはならない。大テントのなかでの荷分けが不自由だとあって、しごとなかばにテントをとりのけたら、大興安嶺のまんなかに、くず屋の市ができた。主食から油・ようかん・氷砂糖にいたるまでを、精確に一〇対四にわけるのは、一ともめしなければおさまらないしごとである。本隊の計理主任伴と、支隊の計理主任土倉とは、こな屋の小僧のようにメリケン粉にまみれて、にぎやかに小ぜりあいをたたかわしている。食糧の残りは、二五日分とみつもられた。くず屋の市は、夕方までには、どうやらかたづいた。

滞在第二日の朝には、二人の馬夫、セミョンとステパーノフが、一一頭の馬をつれて、ドラガチェンカへひきかえしていった。グラモースキーをかえすことは、だれの頭にもうかんでいたが、こまったことに、かれは釣り

の名人だった。これからの食膳から、あのタイメンのフライがきえてなくなることは、とてもがまんができない。グラモースキーが帰還を命令されなかったらには、こういう悲喜劇があった。支隊の馬四頭をあずかるただひとりの馬夫には、支隊員の希望で、フォーミン・イワンがえらばれた。

フォーミン・イワンは、ことし三五歳になる。数年まえ、かれは、ソ連をおわれて三河にのがれてきた。だから、ほんとうの白系ではなく、かれのもっている旅券は、みんなのと色がちがった。妻は、対岸のザバイカルにのこっていて、生きわかれだということであった。氣のせいか、かれには、どことなくさびしそうな影があり、めずらしく黒ぶちのめがねをかけているのが、なんとなくインテリめいた見かけをあたえていた。いなかの小学校の校長さんというところだろうか。誰いうとなく、われわれは、かれをプロフェッサーとよぶようになった。このあだ名は、なかなかよくあたっていたとみえて、本人の恐縮にもかかわらず、だんだんロシア人なかまにまでひろがっていった。フォーミンがなにかで手間どっていたりすると、「いそげ、いそげ、プロフェッサー・フォーミン・イワン・ニキィーッチ！」などと、野次がとんだ。プロフェッサーは、あまりゆたかではない。二頭の馬も借りものだった。しかも、そのうち一頭は、鞍ずれをおこして、ここからつれもどされた。鞍ずれで死なせても、隊からは、馬のねだんの七割しか弁償しない約束になっていたので、かれはずいぶん心配そうだった。そのかわりにバダエフが、じぶんの持ち馬のなかで、めだってりっぱな白馬を、支隊用としてまわそうと申しでてくれたとき、われわれは心から感動した。馬あつかいの上手で、人間の誠実なプロフェッサーは、きっとわれわれの期待と、バダエフの信頼とをうらぎらないでくれるだろう。

支隊が白色地帯をきりぬけてゆくための武器である推測航法の起点となる、キャンプ第一四の位置も、藤田の二日つづきの観測から、北緯五一度一八分四二・五秒、東経一二二度三九分〇〇・五秒と決定された。無電テン

トもいそがしく活躍して、モーホへ、ハイラルへ、チチハルへ、そして京都へ、われわれのよろこびと、いささかの誇りをこめて、「調査隊大興安嶺の主稜上にあり!」の報告をおくりだしていた。六月二日の夕ぐれには、なにもかもかたがついて、せんたくもすませ、下着もきかえた一同は、ハナゴケのクッションのうえにあつまって、これまでの調査結果の中間報告会をひらいた。滞在の二日、ビジネスにおわれて、われわれは、あすにせまった別れを、ゆっくりおしんでいるひまもなかった。しかし、いまさらセンチメンタルにわかれのことばをかわそうなどとは、だれも考えていなかった。山にはいって二週間半、われわれの成功にたいする自信は、いささかもゆるんではいなかったし、高等学校いらいの山友達であるおたがいの実力にも氣心にも、じゅうぶんの信頼がもてた。だから、われわれは、あすからのことを心配するかわりに、しばらくは議論の相手がへるのを残念がっているかのように、泡をとばして論戰をまじえた。焚火のそばからは、久しぶりの油使用解禁に大塚さんがうでをふるったドーナッツや、あたたかいお茶がはこばれてきて、議論にはいよいよはてしがなく、食事のしらせがきても、いっこう腰をあげようともしなかった。（以上三節　吉良）

図 30.　せんたくと着換えをすませて.
キャンプ14にて.

三、白色地帶

春峠・花峠

六月三日、わかれの朝がきた。前夜からすっかり本隊と分離して、べつのテントにとまっていた支隊の四人は、ひと足さきに出発の準備をととのえて、隊長のまえに立った。

「では行ってまいります。」

「元氣でやれよ。」

わかれのあいさつは、みじかかった。一〇時、五人と三頭の馬とは、灌木のしげみのなかに、すがたを消した。

ここから、ビストラヤ本流の水源にでるには、ふたつの小山脈をこえなければならない。第一キャンプから谷ぞいにすこし下ると、北にはいる枝谷があった。これを登って第一の山脈をこえるのが、第一日のしごとだ。予定の谷のわかれに達したわれわれは、腰の拳銃をはなって、本隊にさいごのあいさつをおくった。さまざまの感慨をこめたその音は、晴れあがった空に、あっけなく吸いこまれていった。晴天つづきのせいか、氣溫はにわかにのぼって、きゅうに春らしくなった。カラマツの新緑はめだってのび、ヒメシロチョウやコツバメのかれんな春すがたが舞った。

われわれの支隊とは、なんとささやかな存在だろう。本隊とわかれて、無限のカラマツの森に吸いこまれたいま、孤独さは、ひしひしとせまってきた。大部隊の本隊の旅では、一種のさわがしさが避けられず、裝備のゆたかさも手つだって、なんとなく科学的探檢隊という、刺激的な空氣がただよっていた。それにくらべれば、支隊

図 31. 支　　隊

は、家族のようなものだ。孤独さが支配するかわりに、自然のなかにとけこむことができる。自然に話しかけ、また話しかけられることができる。しかし、いつかは、自然の圧迫もいっそう強いのに、氣づかねばならないときがくるだろう。われわれは、時報受信用の短波ラジオをもっているだけだから、支隊は、きょうかぎり、本隊からも、漠河隊からも、もちろんほかの文明世界からもいっさいの消息をたつわけだ。

ともあれ、ここには、四人のしたしいなかまと三頭の馬と、フォーミン・イワンとがいた。そして、なによりも、われわれの若さがあった。フォーミンをのぞく四人の平均年齢は、二三歳にみたなかった。支隊の特色は、めいめいが胸のそこにたたんでいる、闘志と若さとにあった。晝食のむしろをめぐって、カラマツのこずえにはカッコウが、「進め、進め！」と鳴いた。林のおくからは、ツツドリが、進め、進めと進軍の太鼓をうった。

このような小谷にも、ささ流れがさわやかに音を立てていた。なんといっても英吉里山をこえては、本格的なタイガの世界にはいったというしるしである。水溫は一・九度、凍土層からとけでたばかりなのだろう。谷くぼ

には、カラマツやシラカンバの若木が密生して、駄馬の荷をひっかけやすいので、ようやくたくみに山腹へとにげだしたと思うと、こんどは、シラカンバの林のしたをうずめる、ムラサキツツジの密生にぶつかってしまった。駄馬は、平氣でおしわけて進むのでほっとしたが、かえって人間のほうが、脊たけほどもあるやぶこぎでまいってしまう。おりから眞赤に花ざかりのなかを、汗だくになってこぎぬけた。それもそのはず、氣溫は二二度、出発いらいはじめての二〇度以上を記錄していた。濕度は、じつに二〇パーセント台に下っていた。こんなに乾いた日には、焚火の火は、たやすくハナゴケにもえうつって、まさに爆発するようにさえおもわれる。下生えのイソツツジやコケモモも、揮発油成分のためか、なまのままでよくもえる。この知識は、最初のひるめしのときボヤさわぎを演じて、服やリュックサックの焼け穴とひきかえに、えられたものであった。

峠は、カラマツのまばらにはえた、あるきやすい、あかるい鞍部であった。すこし東の高みの頂きは、庭園のように美しかった。谷そこの玄武岩は消え、赤味をおびた凝灰角礫岩の岩屑とハナゴケとをしきつめたなかに、まばらにハイマツをまじえ、北に向った雄大な展望をさえぎるものもなかった。ビストラヤ水源の左手よりには、ふたつの高峯がのぞまれ、また、はるかクマラ河境の源流とおぼしい方角にも、おく深く高い峯々があるらしく思われた。あすこえるべき第二の峠も、いま立っているのとおなじような、頂きの平らな尾根にあって、その平坦面と谷の平地とにはカラマツがおおく、山腹の斜面にはシラカンバがおおいという、このあたりの景観の特色を、よくあらわしていた。山火事のせいであろうか、下りの斜面は、うちひらけた灌木原がつづいて、たちまちのうちに谷におり立った。

第一夜のやどりは、きのうまでの滯在地に似て、もっとあかるい、ハナゴケとヒースとの風景であった。前にはひろびろとした灌木原がつづき、立ち枯れのカラマツが、白骨を林立させていた。ふみこんでみると、灌木の

根もとはいたるところ濕地化して、なかば水をたたえた凹凸の地面は、とてもあるきにくい。この奇妙な濕地のなかでは、カラマツもシラカンバも、その第二世をそだてることができないでいる。もとは森林であったこのゆるやかな扇狀斜面は、どうして濕地化したのだろうか。もう永久に昔にはもどらないのだろうか（一九四ページ）。

くずれるかとみえたあくる朝の小雨は、九時ごろになると晴れあがった。だだっぴろい第二の峠の台地にも、その西がわにかけて、もえるようなムラサキツツジの滿開がひろがっていた。春は、ようやくおいついてきたのだ。ガン河中流の丘に、すでにほころびはじめていたこのツツジの花ざかりを、いまごろここにむかえるほど、われわれの隊は、春にそむいて、北へ北へと旅をつづけてきたのだ。わたくしたちは、きのうきょうのふたつの峠を、それぞれ春峠と花峠とよぶようになった。

花峠の台地のうえでは、奇妙な光景をみた。まばらにはえているシラカンバの若木が、七—八割までも、人の脊たけの高さから、いっせいにへしおられているのだ。氣をつけてみると、カラマツの若木のほうは、まったくいためられていない。のちにガイドシャンから聞き知ったように、これはハンダハンのしわざであった。

日ざしのよい下りの尾根すじには、去年の秋から冬ごしのコケモモの実が、うれきってむらがっていた。おりたった谷の源流にも、ところどころソーファのようにもりあがった、ふっくらとしたミズゴケの濕地のうえに、糸のようにほそい茎と、米つぶのような葉をもったヒメツルコケモモが這っていて、やはり法外におおきな、あかい実をのこしていた。冬ごしの実は、とろけるように甘くて、晝食におもいがけないデザートをそえた。われわれはまた、葉のおちた一尺くらいの小灌木に眼をとめた。それは、ガン河の上流いらい、カラマツの林のなかにも、谷の濕地にも、どくふつうな種類だったが、紫いろにしなびた漿果をぶらさげていたので、はじめてそれがクロマメノキであることを知った。カラフトではフレップとよばれているこの実に、川喜田と梅棹とは、三年

まえの夏、北海道の石狩川水源のお花畑で、したしんだおぼえがあった。そのとき、わたくしたちは、ついさきほどまで、この実をむさぼっていたかもしれないヒグマの、なまなましい跡に野営して、その味をたのしんだものだった。

われわれは、この地方の旅に、もうそうとうな感をやしなってきている。どういうところが歩きにくくて、どこが歩きやすいか、ほぼわかってきている。山の斜面が谷の平地と接する境目、そこには、濕地もやぶもすくなく、木立ちのすけた乾燥地のあることがおおい。ミズゴケの高層濕原をよこぎって、右岸の山すそをねらってゆくと、どうしたことだ、そこには、よくふまれた小道が、ひょっくりとあらわれてきた。われわれの予想では、このような山おくにまで道をつけているのは、もはや野獸だけだろうと思っていたのに、その予想をうらぎって、この小道はあまりにもよくふまれ、山すその乾燥地をたくみに利用して、下流へ下流へと一行をみちびいた。おもいもうけぬ氣やすさで、われわれは、どんどん下流へと足をはこんだ。

きょうの午後の、この照りつける陽氣はどうだ。三日つづきの好天に、上昇氣流がおこったのだろうか、われわれのうしろには、夕立ち雲がしのびよっていた。やがてすみのような雲が、東南のほうから矢のようにひろがりはじめ、雷鳴がカラマツ林の燒けあとにはげしくとどろいて、午後四時ごろ、とうとう大つぶの夕立ちが、われわれに追いついてしまった。それは、まるで夏の夕立ちだった。たった四、五日まえには、雪のなかをうろついていたというのに。

雨は一時間であがった、小道は、しだいに谷をみおろすようになった。谷そこには、あいかわらず灌木原におおわれた濕地がひろがり、水流は、はやくもそのなかに、ふくざつな蛇行をえがいていた、けれども、われわれのいる山腹が、あたりがあかるくなるほどもえたった新綠につつまれているのとちがって、谷には、まだ灰いろ

にしずんだ早春のすがたがあった。小道は、山腹をぬうて、しだいにわれわれの注文からはなれてゆき、ついにシラカンバ林の峠に達してしまった。ここはもう分水嶺のはずだ。われわれは、大河スンガリーの水源をなすゲン河の流域が、そのむこうに横たわっているのかどうかをたしかめたい衝動にかられて、なおすこしこの道をたどってみた。東南に向っての展望は、まったくきかなかったが、道は急にくだって、小暗い谷へと吸いこまれた。もう、ゲン河の谷へとおりてゆくことに、まちがいはない。この平凡なひくい尾根は、まさしく、スンガリーとアルグンとの両流域をわかつ、大興安嶺の主稜そのものだった。

とある切りかぶにきざまれたなた目で、この道が、オロチョン道であることが知れた。かれらがゲン河の流域へとふみこむ、おもな交通路のひとつかとおもわれる。八年まえ、奇乾警察隊が分水嶺をこえたのも（図2）、たぶんここから遠くないあたりであったろう。分水嶺に立ったことに満足すると、われわれはこの道をすてて、ふたたびもとの谷へともどっていった。きょうのこの新緑にちなんで、サミドリ川となづけた谷へ。

サミドリ川の流れが山すそに近づいた、かわいたキャンプ地をえらんだとき、土倉が、ひとつの珍案を提出した。

「どうだ。おれたちもひとつユルタ式のテントを張ろうじゃないか。」

「そいつは傑作だ。」

「よかろう。」

というので、たちまちあたりの若木が一二—三本、まっすぐなのをえらんで切りたおされた。枝をはらい、二メートル半くらいにそろえると、そのうちの三本をこずえのほうでしばりつけ、三脚にひらく。のこりの棒をこれに立てかけて、円錐形の骨ぐみをつくる。角錐形の小テントを、頭からすっぽりかぶせ、下のほうには、携帯

テントをベタベタとはりまわした。鞍からおろした一切の荷物を、テントの内がわのすそに、ずらりとならべると、できあがりだ。完成までには、わずかに三〇分しかかからなかった。

この案は大成功だった。なかに陣取ってみると、感じはひろびろとして、立つこともできた。荷物はすべて手のとどくところにあり、われわれ五人が、まるでオロチョン一家のようにくつろいでも、さしてきゅうくつではなかった。これ以後、われわれは、すっかりオロチョンの一家になりすましてしまった。そして、朝がくるたびに、キャンプのあとには、オロチョンの移動したあとのような、しかしそれよりはすこし手ぎわのわるい円錐形の骨ぐみが、つぎからつぎへとのこされていった。ほんもののオロチョンたちは、いつかはこの骨ぐみをみて、眼をまるくしていぶかしがることだろうと、われわれは腹をかかえた。

図 32. ユルタ・テント (白色地帯最後のキャンプ).

川喜田は、たそがれのひと時を、サミドリ川のささ流れに釣り糸をたれてみたが、なにもくいついてはこなかった。藤田は、あたりの岩屑をたたいてみて、ほとんどが橄欖石玄武岩であることを知った。この玄武岩は、谷に沿うて溢流したものらしい。